

平安京左京四条三坊八町跡・
烏丸御池遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇一三―二

平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

平安京左京四條三坊八町跡・
烏丸御池遺跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、マンション建設に伴う平安京跡・烏丸御池遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

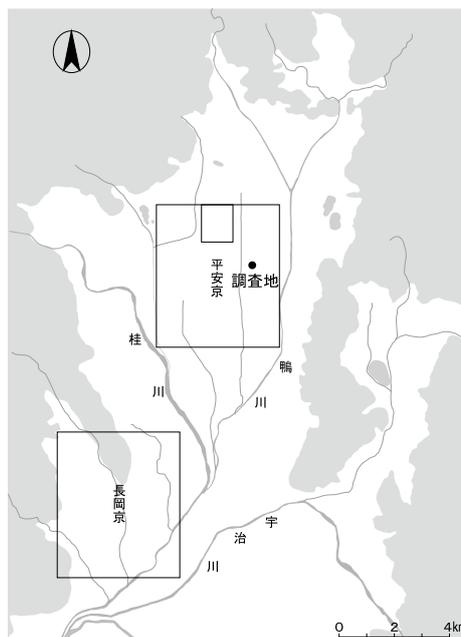
平成25年9月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡・烏丸御池遺跡（文化財保護課番号 08 H 069）
- 2 調査所在地 京都市中京区新町通三条下る三条町339-1他
- 3 委 託 者 三井不動産レジデンシャル株式会社 執行役員 関西支店長 柏原 達
- 4 調査期間 2013年2月18日～2013年5月20日
- 5 調査面積 300㎡
- 6 調査担当者 東 洋一・伊藤 潔・辻 裕司
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「壬生」、「三条大橋」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。なお、銭貨のみ別に通し番号を付し番号の前に銭を付けた。
- 13 本書作成 東 洋一・伊藤 潔
付章1：竜子正彦
付章2：丸山真史（奈良文化財研究所）
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	8
(1) 基本層序	8
(2) 第1面	8
(3) 第2面	13
(4) 第3面	22
(5) 第4面	24
4. 遺 物	29
(1) 遺物の概要	29
(2) 土器類	29
(3) 瓦類	47
(4) 銭貨	48
(5) その他の遺物	49
5. まとめ	50
付章1 出土銭貨について	55
付章2 出土した動物遺存体	63

図 版 目 次

図版1 遺構	1 第1面東半全景（西から）
	2 第1面西半全景（南東から）
図版2 遺構	1 土坑527（北から）
	2 土坑13（南東から）
	3 土坑17（西から）
	4 土坑19（西から）
図版3 遺構	1 第2面東半全景（東から）
	2 第2面西半全景（南東から）
図版4 遺構	1 地下室581（東から）
	2 地下室581西壁縦板炭化材と裏込め（東から）

- 図版5 遺構 1 地下室581 甕片散布状況（東から）
 2 地下室581 西壁縦板裏込め断面（北から）
 3 地下室581 東壁縦板裏込め断面（北から）
 4 地下室581 東石状況（北から）
- 図版6 遺構 1 地下室574（東から）
 2 地下室685（南から）
 3 地下室650（南から）
- 図版7 遺構 1 土坑80・85（北東から）
 2 土坑80（北東から）
 3 土坑85（北から）
- 図版8 遺構 1 第3面東半全景（東から）
 2 第3面西半全景（東から）
- 図版9 遺構 1 第4面東半全景（東から）
 2 第4面西半全景（東から）
- 図版10 遺構 1 土坑405（北東から）
 2 土坑671（西から）
 3 土坑515（北から）
 4 土坑693（南東から）
- 図版11 遺物 土坑13・17・7・54、井戸64、土坑560・80出土土器
- 図版12 遺物 土坑85・地下室581出土土器
- 図版13 遺物 地下室581・594・650、土坑123・208・671出土土器
- 図版14 遺物 土坑515出土土器1
- 図版15 遺物 土坑515出土土器2
- 図版16 遺物 土坑693出土土器

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：500）	2
図3	調査前全景（西から）	2
図4	作業風景（北から）	2
図5	調査地周辺等高線図（1：40,000）	3
図6	中世町概念図	4
図7	「寛永十四年洛中絵図」	5

図8	調査区東壁断面図 (1 : 80)	8
図9	第1面遺構平面図 (1 : 150)	9
図10	調査区南壁断面図1 (1 : 80)	10
図11	調査区南壁断面図2 (1 : 80)	11
図12	土坑527実測図 (1 : 5)	12
図13	土坑19実測図 (1 : 50)	12
図14	第2面遺構平面図 (1 : 150)	14
図15	地下室574・594実測図 (1 : 50)	15
図16	地下室581実測図1 (1 : 50)	16
図17	地下室581実測図2 (1 : 50)	17
図18	地下室667実測図 (1 : 50)	18
図19	地下室650・685実測図 (1 : 50)	19
図20	溝43、土坑54、井戸64実測図 (1 : 50)	20
図21	土坑80実測図 (1 : 20)	21
図22	土坑85実測図 (1 : 20)	22
図23	第3面遺構平面図 (1 : 150)	23
図24	溝129実測図 (1 : 50)	24
図25	土坑208実測図 (1 : 20)	24
図26	第4-1面遺構平面図 (1 : 150)	25
図27	土坑405・671実測図 (1 : 20)	26
図28	第4-2面遺構平面図 (1 : 150)	27
図29	溝698、土坑515・693実測図 (1 : 50)	28
図30	土坑13・17・7・539出土土器実測図 (1 : 4、48のみ1 : 6)	30
図31	土坑54、井戸64出土土器実測図 (1 : 4)	32
図32	土坑560・80・85出土土器実測図 (1 : 4)	34
図33	地下室574出土土器実測図 (1 : 4)	35
図34	地下室581出土土器実測図1 (1 : 4)	36
図35	地下室581出土土器実測図2 (1 : 4)	38
図36	地下室581出土土器実測図3 (1 : 4)	39
図37	地下室594・667・650出土土器実測図 (1 : 4)	40
図38	土坑123・208出土土器実測図 (1 : 4)	41
図39	土坑405・671・398出土土器実測図 (1 : 4)	42
図40	溝698出土土器実測図 (1 : 4)	43
図41	土坑515出土土器実測図1 (1 : 4)	44
図42	土坑515出土土器実測図2 (1 : 4)	45

図43	土坑693出土遺物実測図（1：4）	46
図44	墨書土器・印刻土器実測図（1：2）	47
図45	軒瓦拓影・実測図（1：4）	48
図46	地下室581出土ガラス玉実測図（2：1）	49
図47	鎌倉・京都地下室列比較概念図（1：500）	50
図48	八町四行八門内における位置関係（1：1,000）	51
図49	応仁・文明の乱前と現在の三条町比較概念図	52
図50	土坑527出土銭拓影1（1：1）	56
図51	土坑527出土銭拓影2（1：1）	57
図52	出土動物骨	64

表 目 次

表1	遺構概要表	13
表2	遺物概要表	29
表3	土坑527出土銭比率表	55
表4	個別出土銭比率表	57
表5	土坑527出土銭一覧表	58
表6	個別出土銭一覧表	62
表7	動物遺存体種名表	63
表8	動物遺存体集計表	64

平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

調査地は、平安京左京四条三坊八町の西一行北四・五門に該当する。当地にマンションが建設されることになったため発掘調査を実施した。調査地西側の新町通は、平安京造営以来の町尻小路（中世には「町小路」）を踏襲している。当地周辺は、日本における有数の商工業地として中世・近世から現代まで連綿と発展してきた。また、祇園会を担う「八幡山」を出す鉾町でもあり、平安時代の宅地から商工業者の町への変遷を追うことのできる遺構の検出が期待された。また、弥生時代から古墳時代の遺跡である烏丸御池遺跡の南西部にも含まれ、関連する遺構・遺物の検出も期待された。

調査は掘削残土の仮置の都合から、東西30m、南北10mの調査区を東西に二分し反転調査を行った。調査した遺構面は4面である。第1面は近世初頭から戦国時代とした。第2面は室町時代から鎌倉時代後半、第3面は鎌倉時代前半から平安時代中期、そして第4面では平安時代前期と弥生時代の遺構を検出し、前者を第4-1面、後者を第4-2面とし区別した。2月18日から開始



図1 調査位置図 (1 : 5,000)

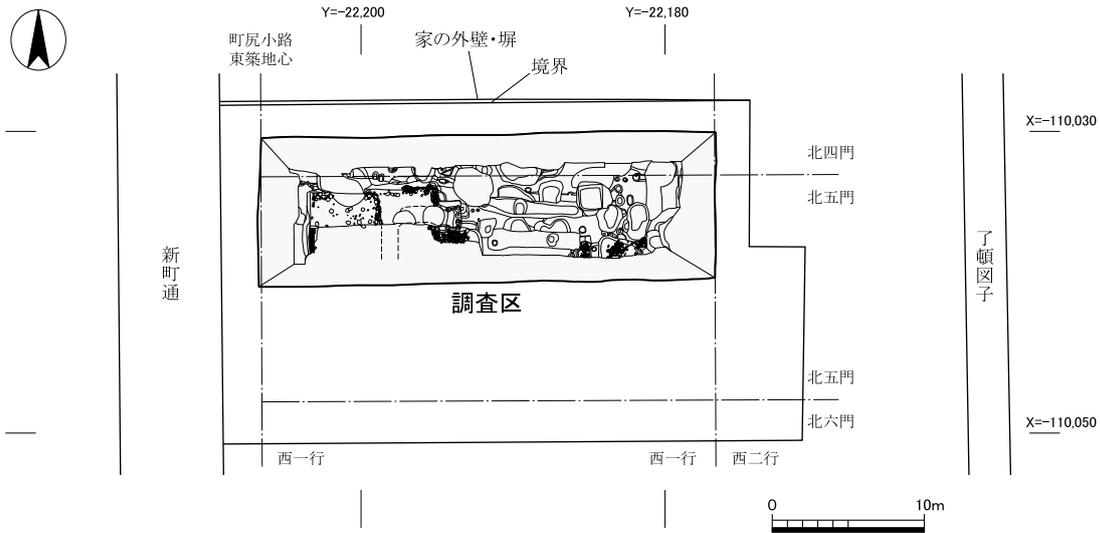


図2 調査区配置図 (1 : 500)



図3 調査前全景 (西から)



図4 作業風景 (北から)

し、現代から近世の堆積土を重機で掘削した後に人力による掘削を行った。その結果、平安時代から近世初頭までの遺構・遺物を多く検出した。主に第1面では緡銭565枚を埋納した土坑を、第2面では中世前半の地下室を6基検出した。第3面では敷地境に掘られたと考えられる溝などを検出した。第4-1面では平安時代前期の遺構を検出し、最終面の第4-2面では地山に掘り込まれた2基の土坑から畿内弥生第I様式の土器が多く出土した。適宜、平面および壁断面図、各遺構の断面図などの記録をとり、写真撮影を実施した。調査終了後、埋め戻して現状復旧などを行い、5月20日に全ての調査を終了した。調査では京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに実施し、各調査面ごとに臨検を受けた。

なお、3月23日に地元三条町住民を対象に現地説明会を開催し、30名の参加があった。

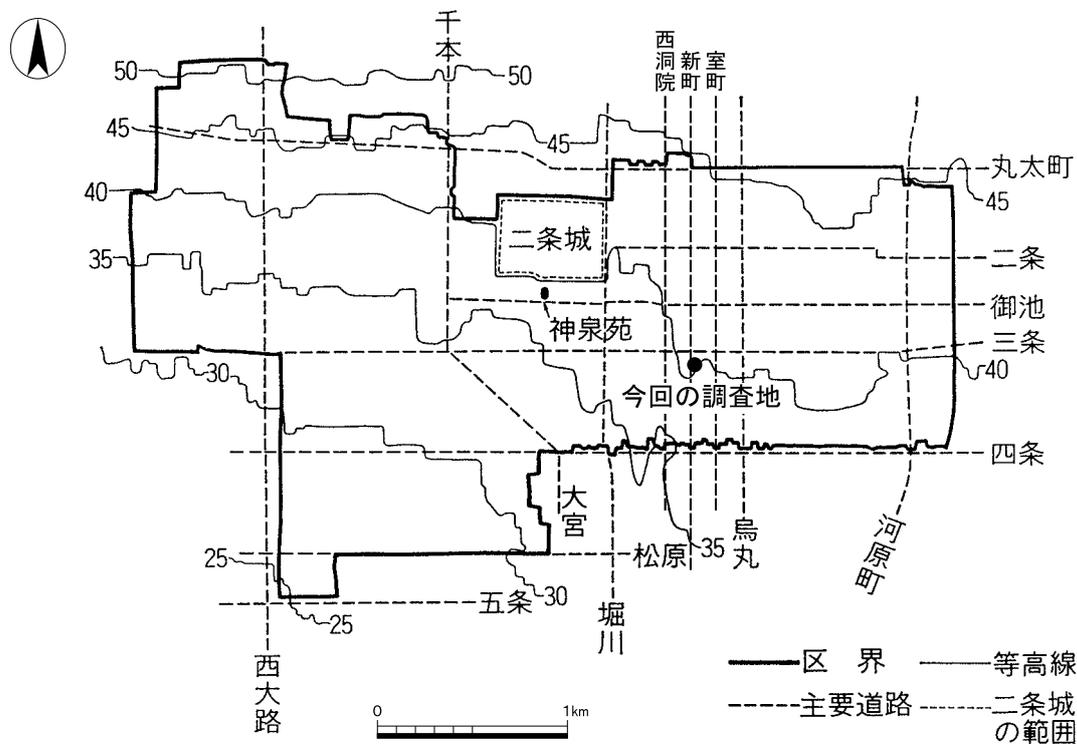
2. 位置と環境

調査地に面する新町通は、南に向って舌状に張り出した高まり上を南北に貫通している。調査地は西の西洞院通より約3m高く、調査地東の室町通より約1m高い。

平安京を描いた九条家本『延喜式』「平安京左京図」によれば、西側の西洞院大路に九条まで貫通する直線の西洞院川が描かれており、東側の室町小路にも室町川が描かれている。室町川は16世紀中頃の様子を描いたとされる上杉本『洛中洛外図』では、三条坊門小路から南行し、四条大路南側で西に折れ曲がって西洞院川に合流するように描かれている。しかし、江戸時代以降の『洛中洛外図屏風』には描かれておらず、正徳元年(1711)の『山州名跡志』でも「此河今無」とされている。また、江戸時代に暴れ川で有名であった西洞院川も現在では暗渠化されている。

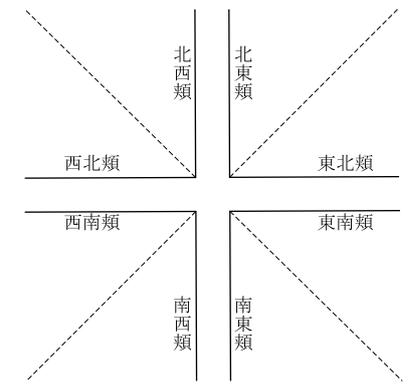
調査対象地である平安京左京四条三坊八町は、北を三条大路、東を室町小路、南を六角小路、西を町尻小路で区画された条坊街区である。平安時代を通じて「八町」内の住人名は不明であるが、『本朝世紀』久安元年(1145)三月十三日「三条町焼亡」(『史料 京都の歴史』第4巻)とあり、¹⁾少なくとも12世紀中頃までには町尻小路と三条大路交差点付近に「三条町」が成立していた。²⁾

平安時代末から鎌倉時代に成立したとされる『今昔物語集』二十九卷には「六角小路以北」に「其二蔵何ツ有ラム」とし「其ノ辺ニ車借ト云フ者数有リ」とあり、物流の集積地と認識されていた(『史料 京都の歴史』第4巻)。今回の調査地である三条町東側は、年号を欠くが15世紀半ばとされる『祇園社執行宛飯尾為衡書状』に「当社領三条町与六角間東頼屋地」³⁾とあり、一時期祇園社



※『史料京都の歴史9 中京区』平凡社 1985年より一部加筆・加工

図5 調査地周辺等高線図(1:40,000)



※ 五味文彦「京に中世を探る」
『都市の中世』 吉川弘文館 1992年より

図6 中世町概念図

領であった可能性がある⁴⁾。

しかし、成立期の三条町は現在のような両側町ではなく、応仁・文明の乱以前は、図6のように町小路と三条大路の交差点を中心に発展した町であった。例えば、位置表示が、交差道路名と四辻に成立する8箇所の類である北東・東北・北西・西北・南西・西南・南東・東南類という組み合わせで表示されていた⁵⁾。しかし、応仁・文明の乱以降はもっぱら交差点間全体の東類、西類、南類、北類という地名表示方法に統一されてくる。このことは、交差点四辻に木戸を設けて町が閉鎖されることや両側町の成立

過程と無関係ではないだろう。

洛中外の347軒もの土倉・酒屋を書き上げた有名な応永三十三年（1426）の『北野神社酒屋交名』（『史料 京都の歴史』第4巻）には「次郎三郎 三条町南西類 義重」「上総 三条町西南類 行玄」とあるが、いずれも町小路の西側に位置しているので調査地は該当しない。しかし、応仁元年（1467）四月に作成された『日吉社未日右方御酒一膳座交名帳』の中に「古々女 三条町南東類」（真乗院文書、『史料 京都の歴史』第4巻）とあり、調査地近辺の三条大路と町小路との交差点より下がった東側に山門に関係する女性の酒屋が応仁・文明の乱直前に存在したことを示している。応仁・文明の乱後の永正十二年（1515）1月の日付がある酒麴役酒屋139箇所を記録した『造酒正役銭御算用状』（小西康夫氏所蔵文書、『史料 京都の歴史』第4巻）には、調査地に該当する「津田与四郎 三条町東類」の他に、向かい側に「寺木 三条町西類」が書き上げられており、木戸などで道路を封鎖した応仁・文明の乱後に三条町が両側町として再編されつつあることがわかる。『八瀬童子会文書・補遺・総目録』（京都市歴史資料館）に収められた年代不詳の『第2紙背文書』には「三てうまちなみにしつら こふやさ〇〇」と「六かくまちきたひかしのつら（みそばかり）てらき」とあり、後者の「てらき」は永正十二年の『造酒正役銭御算用状』で調査地向かいに位置した「寺木」と同一か同族の可能性もある。また、乱前には「ちょう」ではなく町小路名から取った「まち」と呼称されていたことが注目できる。『造酒正役銭御算用状』にある「三条町東類」と、年代不詳の「六かくまちきたひかしのつら」が、ほぼ同一地点を指すならば、年代不詳の『八瀬童子会文書』紙背文書は古い地点表示を踏襲しており、応仁・文明の乱より前の文書である可能性がある。また、応仁元年『日吉社未日右方御酒一膳座交名帳』にある「古々女 三条町南東類」と「六かくまちきたひかしのつら てらき」が町小路に面した1町の北と南で異なる地点を表しているならば、現在の地点表示法である「新町三条下る」と「新町六角上る」が、同じ三条町でもほぼ中央で分かれているように、乱前には現在の両側町の三条町が北の三条町南半と南の六角町北半とで南北で分かっていた可能性を否定できない。乱前の永享二年（1430）三月三日に「三条室町南北東西西角四半町、口（東西貳拾柒丈、南北貳拾丈貳尺）」を「左女牛若宮御燈油」料として「永代寄進」した文案が『高師光屋地寄進状案』⁶⁾として六条若宮八幡宮（左女牛若宮）の別当職であっ

た醍醐寺三宝院に残されている。「八町」の北東4分の1（四半町）が「三条室町」の八幡宮社地で、南半が本能寺の大旦那で豪商小袖屋宗句が居た「六角室町」となっていた可能性が高い。また、『祇園社記十五』（『史料 京都の歴史』第5巻⁸⁾）によれば応仁・文明乱以前には「三条町と六角間」に「八幡山」の他に「れうもんの滝山」が出ていたとされている。

現在の三条町から出す祇園会の「八幡山」は、応仁・文明乱以前から成立していた古い山車であり、江戸時代には三条町の別名として「八幡山町」とも呼んでいた。鎌倉幕府・室町幕府の強い庇護の下で発展し、下京で祇園社と勢力を二分した、三条町に隣接する「六条若宮八幡宮」の社地との関連が指摘できる。なお、永和二年（1376）十二月の『大山崎住京新加神人等放札せらる注文』（『史料 京都の歴史』第4巻）の中に石清水八幡宮油神人が「三条町西南類」に3名がいたことが知られているが、「八幡山」との関係は不明である。

町小路が現在の新町通に名称が変化したのは戦国時代末期以降で、天下統一に迫った織田信長による二条城普請を契機に、上京と下京間の町小路に沿って「新在家」が建ち並び「新町」が形成されたとされている。また、現在の三条町該当地は、江戸時代前期まで「しん町通 伊藤ノ丁」とも呼ばれていたことが、寛永十四年（1637）成立の『洛中絵図』（図7）などで判明している。こ

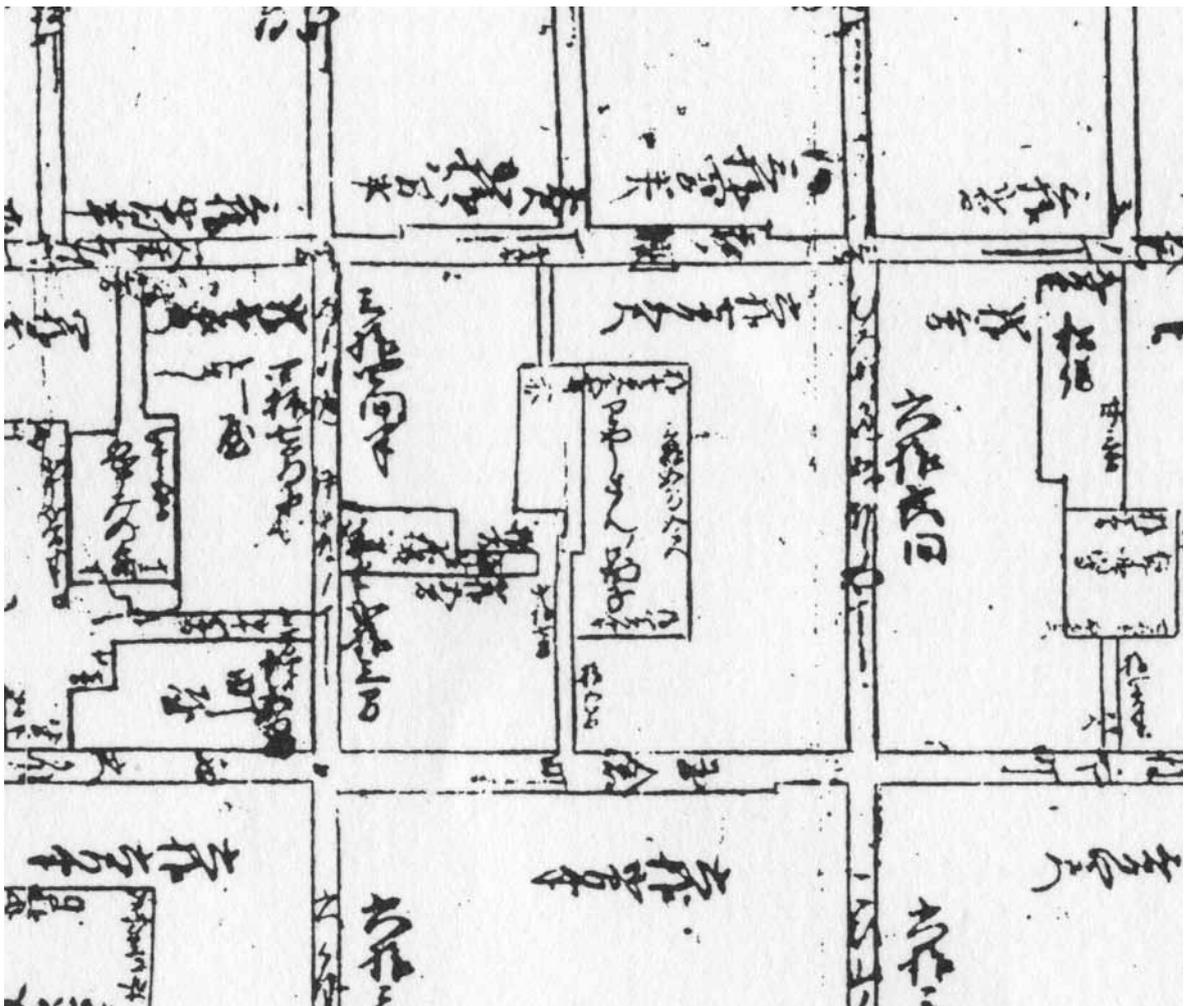


図7 「寛永十四年洛中絵図」 中井家旧蔵、宮内庁書陵部蔵
『慶長 昭和 京都地図集成』柏書房 1994年

の「伊藤ノ丁」は、貞享元年（1684）の『雍州府志』¹⁰⁾では「伊藤町、在新町三条南、始豊臣秀吉公未天下、時入洛日必寓、斯町伊藤道光家、道光在京師、掌洛外處々租稅收納之事者也、今代官之類乎」と伝えており、天正期に武家に近い人物が住んでいたことを想定できる。この点については、『言繼卿記』天正四年十一月二十日条「三条町伊藤与右衛門宿羽柴筑前守旅宿へ罷下」¹¹⁾という記事と符合する。

三条大路と町小路との交差点付近を表示する旧来の三条町の呼称とは別に現代の新町通を挟んだ両側町成立を示す確実な記録が、天正二十年（1592）作成の『太閤様拝借日記帳・三条町』である。それによると東西両側住民の名前と間口に応じた負担額を順に書き上げており、天正期には三条町が両側町を形成していたことが判明する。その書き上げ東側分のほぼ中央に「御宿」とあり、天正期に秀吉の「御宿」が両側町の三条町東側中央に存在した事が判明する。¹²⁾ところが、江戸時代初頭の『洛中絵図』では「しん町通 伊藤ノ丁」に面した「御宿」跡地が「蒲生飛驒守」と書かれている。蒲生家が寛永十一年（1634）に断絶していることや、有名なキリシタン戦国大名蒲生氏郷の息子で同じく「飛驒守」を踏襲した秀行も慶長十七年（1612）に亡くなっているため、絵図が作成されるまで実際にどのように使用されたのか不明であるが、徳川家の天下統一がほぼ確定した慶長以降の將軍上洛の際に供奉する大名家の在京「宿」とするために將軍家から蒲生家が拝領し、それが記録として残されていた可能性が高い。¹³⁾

なお、今回検出した中世の地下室は、京内ではこれまで4箇所5基が報告されている。平安京左京五条五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡¹⁴⁾で13世紀中頃の2基の「地下式倉庫」、上京遺跡¹⁵⁾で鎌倉時代の「地下式倉庫」1基、平安京左京四条四坊二町跡¹⁶⁾で鎌倉時代後期に埋没した1基、平安京左京四条三坊四町跡・烏丸綾小路遺跡¹⁷⁾で平安時代後期から鎌倉時代とされる1基を検出している。

註

- 1) 『史料 京都の歴史』第4巻 市街・生業 平凡社 1981年
- 2) 南北通りである町小路と東西通交差点を中心に中世街区が形成されたことは、赤松俊秀の「町座の成立について」（『古代中世社会経済史研究』平楽寺書店 1973年 所収）以降通説となっている。そこで、注意すべき点として「『町』が現在の町通に沿ってその東西両側のみをさしたのではないことである。史料の示すところでは、当時の人は、『町』と交叉する東西の道路のうち、東は室町、西は西洞院に至る地区を『町』に包括して考えていたらしい。」とされている。
- 3) 『祇園社記』第二五『増補続史料大成』第四十五巻 臨川書店 1978年
- 4) ただし、江戸時代の『祇園社記』第二五の編者である行快が「此地敷地目録ニ不見」と書き加えており確定はできない。飯尾為衡は今谷明氏によって寛政七年（1446）の記録が残る室町殿御前奉行の飯尾四郎衛門尉（為衡のち為信）である事が明らかになっているが（「室町幕府奉行人奉書の基礎的考察」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集 1982年）、彼がいつまで奉行でいたのかは明らかでなく、「当社領三条町与六角間東頼屋地事」とある表現からすれば応仁・文明乱以降の文書の可能性がある。
- 5) 五味文彦「京に中世を探る」（『都市の中世』吉川弘文館 1992年）によれば、図6にある「こうした

表現は鎌倉時代末期から一般化するが、それはとりも直さず大路小路に面する街区の成長を示しており、同時に条坊制の解体を物語っている」とされている。有名な三条釜座町は現在の三条町の北東に隣接し、三条大路を挟んだ両側町となっているが、鎌倉時代の正応二年（1289）の「三条まちかまのさの弥藤三」が『東寺古文書零聚』（東京大学史料編纂所蔵）に残っていることから、鎌倉時代の三条町は三条新町交差点の東西南北に広がっていた可能性が高い。

また、戦国時代の小西康夫氏所蔵文書を分析された久留島典子「戦国期の酒麴役」（『中世をひろげる』吉川弘文館 1991年）によれば、『史料京都の歴史』第4巻収録の小西康夫氏所蔵文書の他に「澤村又三郎跡 三条町東頼」と「あふみ屋 三条町」「こんにやく屋 三条」などがあり、その他の三条町関連では「ちわうせん屋 三条町与室町間北頼」「井上入道 三条町与室町間南頼」などを挙げられている。戦国時代に入ると鎌倉時代から一般化していた交差点を中心にした地点表示法が一掃されていることに注目したい。

- 6) 『大日本古文書・醍醐寺文書之十二』 東京大学史料編纂所 2001年 文書ナンバー 2633
- 7) 「両山歴譜・日唱本」『本能寺史料・古記録編』 思文閣出版 2002年
- 8) 『史料 京都の歴史』第5巻 社会・文化 平凡社 1984年収録
- 9) 高橋康夫「京の通り名」『京・町づくり史』 昭和堂 2003年 参照。
- 10) 『新修 京都叢書』第10巻 臨川書店 1968年
- 11) 『言継卿記』第六 新訂増補続群書類従完成会 1967年
- 12) この「御宿」に関しては、井上幸治氏（京都市歴史資料館）のご教示を得た。
- 13) 前記『洛中絵図』には「蒲生飛驒守」と別に、現在の御所南に「松平中務大輔娘女家屋敷」が描かれている。「松平中務大輔」は寛永十一年に没した蒲生家最後の親藩主である蒲生忠知のことである。なお、蒲生氏郷の聚楽第時代の屋敷は「飛弾殿町」に比定されている。また、京都における武家駐留所としての「宿」の形成過程は、藤川昌樹『近世武家集団と都市・建築』（中央公論美術出版 2002年）に詳しい。
- 14) 『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2008年
- 15) 『上京遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2011年
- 16) 『平安京左京四条四坊二町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-12 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2009年
- 17) 『平安京左京四条三坊四町・烏丸綾小路遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 文化財報告書 第2集 株式会社日開調査設計コンサルタント 2007年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8・10・11)

調査区の層序は、部分によって異なり複雑である。現地地表下約1.5mまでは近世から現代の焼土廃棄土坑や黄褐色土系整地層の重なりが続く。その下には室町時代の焼灰などを多く含む暗灰色泥土層が厚さ約0.5m堆積する。この上面を第1面とした。その下には鎌倉時代の褐色系の泥土層が厚さ約0.3m堆積する。この上面を第2面とした。その下に平安時代後半のオリーブ系の泥土が厚さ約0.4m堆積する。この面の上面を第3面とした。地山は黄色粘土と褐色砂礫である。この上面を第4面とした。

(2) 第1面 (図9、図版1)

第1面は戦国時代から近世初頭の遺構群で、江戸時代後期から幕末の火災処理土坑や井戸、穴蔵などによって多くの遺構が壊されていた。東半部で塵穴と考えられる土坑7・13と性格不明な集石遺構(土坑17・19)など、西半部では565枚の銭を埋納した土坑527、川原石と整理箱3箱分の中世前半の常滑大甕の破片が詰まった集石遺構(土坑539)などを検出した。

土坑7 調査区北東部で検出した東西幅3.3m、南北幅2.0m、深さ0.6mのやや長方形の土坑である。完形の土師器皿(京都XI期¹⁾)が出土している。

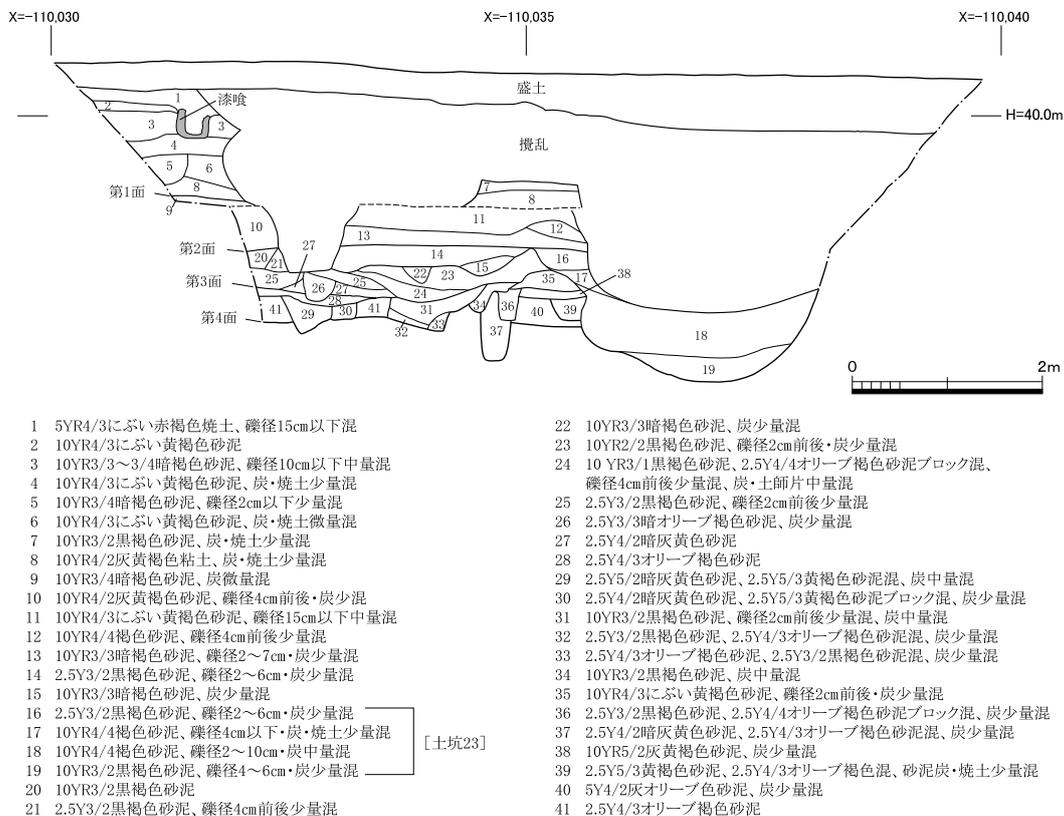


図8 調査区東壁断面図 (1:80)

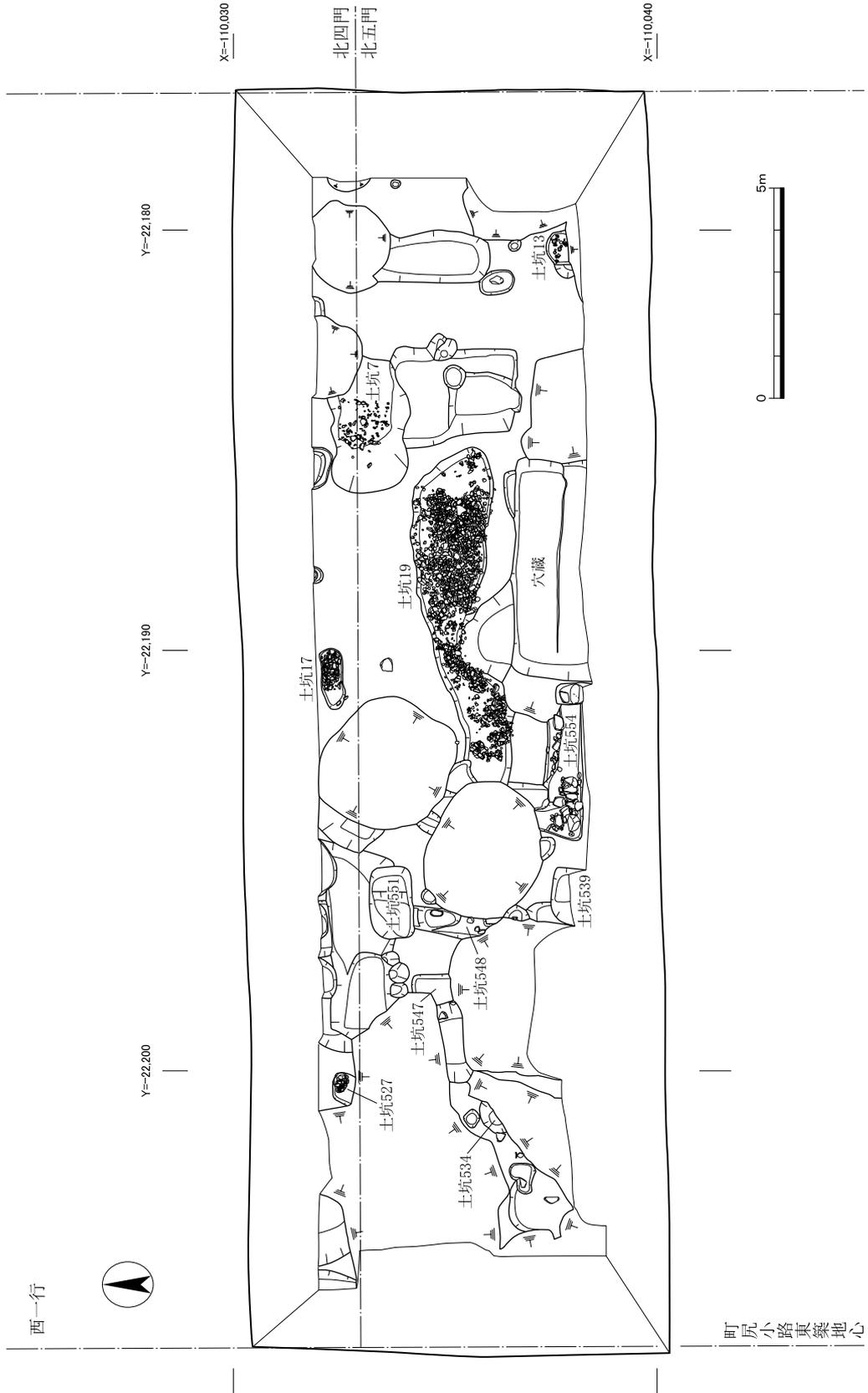


図9 第1面遺構平面図 (1 : 150)

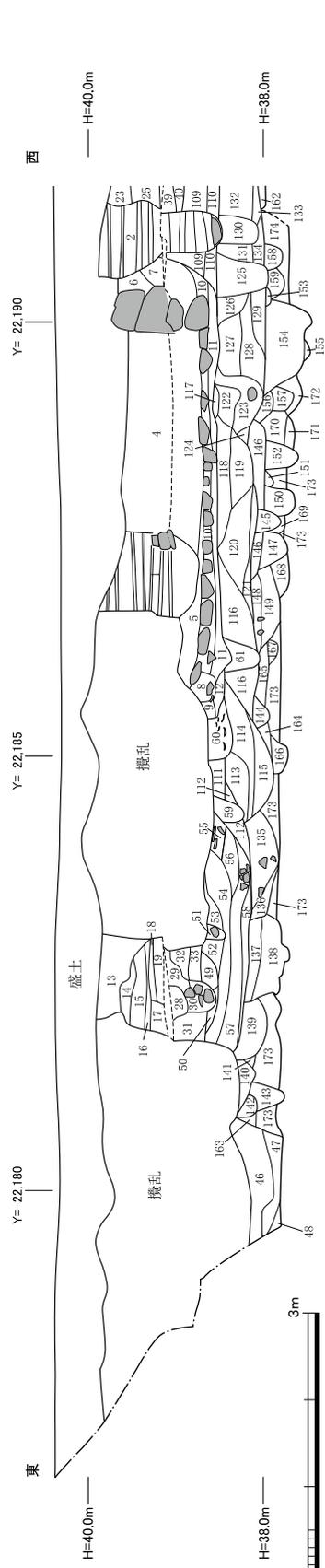
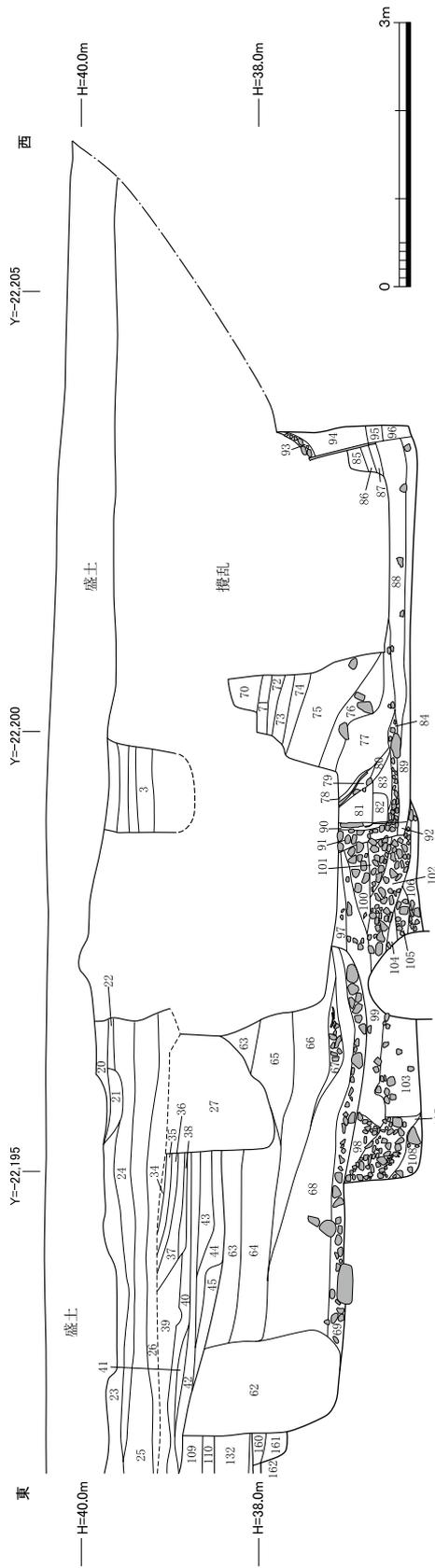


図10 調査区南壁断面図1 (1:80)

- 1 10YR4/3にぶい、黄褐色砂礫(礫径15cm以下)、10YR3/3暗褐色砂泥の五層、炭・焼土・瓦混。最下層は7.5YR3/4暗褐色砂泥、礫径8~12cm多量混
- 2 同上。最下層は10YR5/4にぶい、黄褐色砂泥、10YR3/3暗褐色砂泥混、炭・焼土中量混、礫径2cm前後少量混
- 3 10YR4/3にぶい、黄褐色砂礫(礫径15cm以下)、10YR4/3にぶい、黄褐色砂、10YR6/4にぶい、黄褐色砂泥、7.5Y4/6褐色焼土多量混、炭少量混、瓦少量混
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm前後多量混
- 5 7.5YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 7 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 8 7.5YR3/2黒褐色砂泥、礫径15cm混
- 9 10YR2/1黒色砂泥
- 10 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥、礫径15~30cm並ぶ
- 11 10YR2/3黒褐色砂泥、焼土中量混
- 12 10YR2/2黒褐色砂泥
- 13 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径5cm以下少量混、炭・焼土・漆喰混
- 14 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径1~3cm多量混、炭少量混
- 15 10YR5/3にぶい、黄褐色粘土、炭少量混
- 16 10YR5/3にぶい、黄褐色粘土、炭微量混
- 17 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径1~3cm少量混
- 18 10YR5/3にぶい、黄褐色粘土、炭微量混
- 19 10YR5/3にぶい、黄褐色粘土、炭・焼土少量混
- 20 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥、礫径3cm以下少量混、下層との境界線上に漆喰
- 21 10YR4/4褐色砂泥、礫径10cm以下中量混、炭・焼土混
- 22 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥、炭・焼土中量混
- 23 礫径20cm以下、炭・焼土中量混
- 24 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥、炭・焼土中量混、礫径5cm以下少量混
- 25 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥、炭・焼土中量混、礫径20cm以下中量混、炭・焼土多量混
- 26 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径10cm以下少量混、炭・焼土混
- 27 10YR5/4にぶい、黄褐色砂泥、礫径5~20cm多量混[土坑539]
- 28 10YR4/4褐色砂泥
- 29 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥、焼土少量混
- 30 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径11cm前後少量混
- 31 10YR4/4褐色砂泥、焼土少量混
- 32 10YR4/4褐色砂泥、焼土少量混
- 33 10YR3/3暗褐色砂泥、焼土微量混
- 34 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫径15cm以下多量混
- 35 10YR3/1~3/2黒褐色砂泥、炭・焼土混
- 36 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・焼土混
- 37 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・焼土混
- 38 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭・焼土混
- 39 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色砂泥混、礫径13cm以下多量混、焼土中量混
- 40 10YR6/6明黄褐色砂泥、礫径2cm以下少量混
- 41 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR6/6明黄褐色砂泥土ブロック混
- 42 2.5Y4/1黄灰色~4/2暗灰黄色砂泥
- 43 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土混
- 44 10YR6/6明黄褐色砂泥、10YR5/3にぶい、黄褐色砂泥土ブロック混
- 45 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径5cm以下少量混
- 46 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径5~15cm中量混
- 47 10YR2/2黒褐色砂泥、下部に礫径5cm前後中量混
- 48 2.5Y2/1黒色砂泥
- 49 10YR3/2黒褐色砂泥
- 50 10YR3/2黒褐色砂泥、焼土少量混
- 51 10YR4/4褐色砂泥、礫径16cm混
- 52 10YR3/3暗褐色砂泥
- 53 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・焼土・土師片多量混
- 54 10YR3/3暗褐色砂泥、土師器・瓦少量混
- 55 10YR3/3暗褐色砂泥、土師器・瓦少量混
- 56 10YR3/2黒褐色砂泥(粘質)、炭少量混
- 57 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師片中量混
- 58 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・土師片中量混
- 59 10YR2/2黒褐色砂泥
- 60 10YR2/2黒褐色砂泥(粘質)、土師器多量混[土坑85]
- 61 10YR2/2黒褐色砂泥、炭少量混
- 62 2.5Y4/1黄灰色粘土、2.5Y5/4黄褐色砂泥土ブロック混
- 63 10YR3/3暗褐色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色砂泥混、礫径3cm以下混、炭混
- 64 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫径11cm以下混、炭・焼土混
- 65 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫径5cm以下微量混、炭・焼土混
- 66 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y5/4黄褐色砂泥土ブロック中量混、礫径10cm以下少量混、炭・焼土混
- 67 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径5~25cm多量混
- 68 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径20cm以下少量混、焼土混
- 69 10YR2/2黒褐色砂泥、10YR6/2灰黄褐色砂多量混、礫径20cm以下多量混
- 70 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径5cm以下、炭・焼土少量混
- 71 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径10cm以下、炭・焼土・土師器多量混
- 72 10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥、礫径5cm以下、炭・焼土・土師器中量混
- 73 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径10cm以下少量混、炭・焼土中量混、土師器多量混
- 74 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm以下少量混、炭・焼土少量混、土師器中量混
- 75 2.5Y3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥土ブロック少量混、礫径10cm以下、炭・焼土少量混
- 76 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径20cm以下、炭・焼土少量混
- 77 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y5/2黄褐色砂泥土ブロック中量混、礫径10cm以下、炭・焼土少量混
- 78 10YR5/4にぶい、黄褐色砂、礫径3cm以下中量混
- 79 7.5YR4/4褐色砂泥、礫径5cm以下少量混
- 80 焼土(5YR4/6赤褐色砂泥~砂泥)、上部5cmはほとんど炭、礫径2cm以下少量混
- 81 7.5YR4/4褐色砂泥、礫径5cm以下少量混、炭5cm混
- 82 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/3にぶい、黄褐色砂泥中量混、礫径3cm以下少量混、焼土(5YR4/6赤褐色砂泥)中量混
- 83 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径3cm以下、焼土少量混、炭中量混
- 84 礫径10cm以下多量、10YR3/2黒褐色砂泥中量混、炭・焼土混
- 85 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径3~5cm少量混、炭中量混、焼土少量混
- 86 10YR3/2黒褐色砂泥~泥砂、炭多量混
- 87 ほとんど炭、10YR2/2黒褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混
- 88 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR5/4にぶい、黄褐色砂泥~砂ブロック少量混、礫径10cm以下中量混、炭・焼土少量混
- 89 2.5Y3/2黒褐色砂泥~泥土、礫径~4cm少量混、炭中量混
- 90 10YR4/4褐色砂泥、炭・焼土多量混
- 91 礫径15cm以下多量、10YR3/3暗褐色砂泥少量混



- 92 2.5Y3/2黒褐色粘土、礫径2cm以下少量混、炭中量混
- 93 礫径10cm以下多量、2.5Y3/2黒褐色砂泥少量混
- 94 2.5Y3/2黒褐色砂泥、礫径2cm以下少量混、炭・焼土少量混
- 95 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径5cm以下多量混
- 96 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径1cm以下、炭少量混
- 97 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR5/3にぶい黄褐色砂泥多量混、礫径3cm以下炭少量混
- 98 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径10cm以下西端に集中して多量混
- 99 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、2.5Y5/4黄褐色砂泥少量混、礫径10cm前後炭少量混
- 100 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径10cm前後炭少量混
- 101 礫径15cm以下多量、10YR3/2黒褐色砂泥少量混
- 102 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径15cm以下多量混
- 103 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y5/3黄褐色砂泥少量混、礫径10cm以下少量混、炭混
- 104 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y4/4褐色砂泥少量混
- 105 10YR4/2灰黄褐色砂泥～泥土、10YR4/4褐色砂泥中量混、礫径5～10cm多量混、炭混
- 106 10YR4/2灰黄褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色砂中量混、礫径8cm以下少量混
- 107 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫、2.5Y5/3黄褐色砂中量混、礫径15cm以下
- 108 2.5Y4/3オリーブ褐色砂～砂、礫径20cm以下多量混、炭混
- 109 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、焼土中量混
- 110 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR6/6明黄褐色泥土ブロック中量混、礫径2cm以下少量混
- 111 10YR3/3暗褐色砂泥
- 112 10YR3/2黒褐色～3/3暗褐色砂泥、礫径11cm前後少量混
- 113 10YR2/3黒褐色砂泥
- 114 10YR2/1黒褐色砂泥
- 115 10YR3/1黒褐色砂泥
- 116 10YR3/1黒褐色砂泥、炭少量混
- 117 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径2～8cm中量混、炭・焼土少量混
- 118 10YR3/4暗褐色砂泥
- 119 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径2～8cm少量混、炭混
- 120 10YR3/3暗褐色砂泥、焼土中量混
- 121 10YR2/2黒褐色砂泥
- 122 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径2～7cm中量混、炭・焼土少量混
- 123 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径4～12cm中量混、炭少量混
- 124 10YR3/2黒褐色砂泥
- 125 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径2cm前後少量混、炭混
- 126 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径2～6cm少量混
- 127 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、礫径2cm前後少量混、炭少量混
- 128 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、礫径4cm前後少量混、炭・焼土少量混
- 129 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 130 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂泥少量混、炭少量混
- 131 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土混
- 132 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、2.5Y3/1黒褐色砂土混、礫径8cm以下少量混、炭・焼土少量混
- 133 10YR3/1黒褐色砂泥、10YR4/4褐色砂土ブロック混
- 134 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 135 10YR3/1黒褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 136 10YR3/1黒褐色砂泥、炭中量混
- 137 10YR3/4暗褐色砂泥、2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥ブロック混、炭・土師器中量混[土所236]
- 138 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥ブロック混、炭・土師器中量混[土所236]
- 139 10YR2/2黒褐色砂泥、土師器中量混
- 140 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 141 10YR2/2黒褐色砂泥
- 142 10YR3/4暗褐色砂泥
- 143 10YR2/2黒褐色砂泥、焼土中量混
- 144 10YR3/1黒褐色砂泥、炭中量混
- 145 10YR2/2黒褐色砂泥(粘質)、礫径4cm前後中量混
- 146 10YR3/3暗褐色砂泥、10YR2/2黒褐色砂泥、礫径2～8cm少量混、炭少量混
- 147 10YR3/2黒褐色砂泥
- 148 10YR2/2黒褐色砂泥
- 149 10YR3/3暗褐色砂泥
- 150 10YR3/4暗褐色砂泥
- 151 2.5Y3/2黒褐色粘土、炭少量混、礫径4cm前後少量混
- 152 2.5Y4/3オリーブ褐色粘土、炭少量混
- 153 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 154 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土、2.5Y5/4黄褐色砂土混、礫径4～8cm少量混
- 155 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土、炭少量混
- 156 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭中量混
- 157 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土、炭少量混
- 158 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
- 159 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
- 160 2.5Y4/1黄褐色～4/2暗灰黄色砂泥、炭・焼土微量混
- 161 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 162 2.5Y3/2黒褐色砂泥、炭混
- 163 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥
- 164 10YR3/2黒褐色砂泥
- 165 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥
- 166 10YR3/1黒褐色砂泥(粘質)
- 167 2.5Y3/2黒褐色砂泥
- 168 10YR3/4暗褐色砂泥
- 169 10YR3/2黒褐色砂泥
- 170 2.5Y4/3～4/4オリーブ褐色粘土
- 171 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘土
- 172 2.5Y4/3オリーブ褐色砂泥、炭混
- 173 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥、炭混
- 174 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、炭混

図11 調査区南壁断面図2 (1:80)

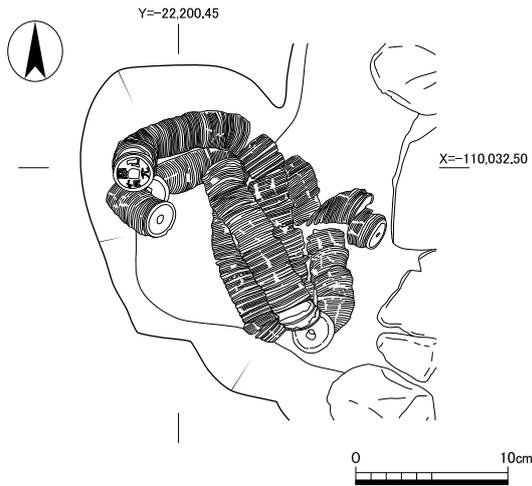


図12 土坑527実測図 (1 : 5)

土坑13(図版2-2) 調査区南東隅部の東西幅0.8m、深さ0.3mの土坑である。南部は幕末の火災処理土坑によりこわされている。土師器皿(京都Ⅺ期中段階)が出土しているが、肥前磁器破片などが混在しゴミ処理土坑の可能性が高い。

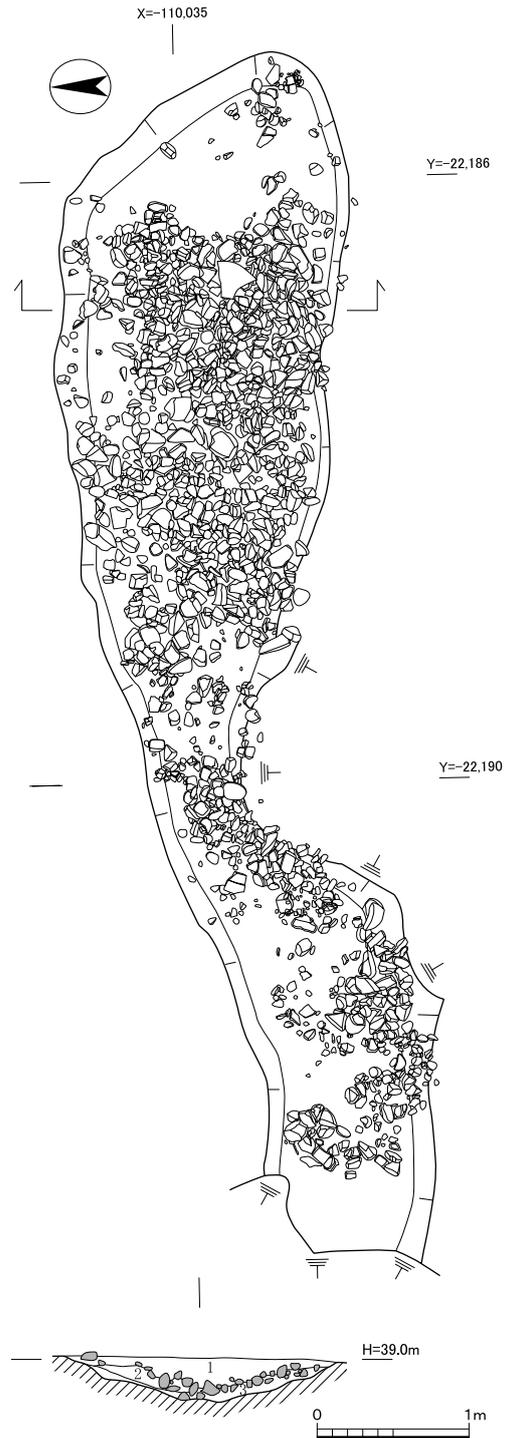
土坑527(図12、図版2-1) 調査区北西部で検出した。東西0.5m、南北0.4mを測り、緞銭565枚を埋納してあった西部と拳大の石を入れた東部集石部に分かれる。銭は緞銭状態で直接土坑に置かれて出土したが、容器などに入れた痕跡はなかった。

土坑17(図版2-3) 調査区中央北壁に沿って検出した東西1.4m、南北0.5m、深さ0.3mの土坑である。拳大の川原石と信楽焼播鉢などの破片が詰まっていた。地下に水を浸透させる排水施設である。出土土師器の年代は京都Ⅺ期古段階で江戸時代初頭である。

土坑19(図13、図版2-4) 拳大の川原石が詰まった東西8m、最大幅1.7m、深さ0.25mの集石遺構である。遺物の中に江戸時代前期の肥前磁器が出土している。性格は不明である。

土坑554 調査区中央南壁に沿って3.7m、幅0.8m分検出した集石遺構である。約0.3mの縦に並べた石と脇に横に並べた石がある。多くの石が抜き取られている。性格は不明である。

土坑539 中央南壁近くで検出した方形土坑で、東西幅1.2m、深さは1.2mである。西端は調査



- 1 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径20cm以下多量混、炭・焼土少量混
- 2 10YR3/4暗褐色砂泥、10YR5/6黄褐色砂泥ブロック中量混、礫径3cm以下少量混、炭・焼土少量混
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm以下微量混

図13 土坑19実測図 (1 : 50)

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代	土坑515・693、溝698	第4-2面
平安時代前期	土坑405・671	第4-1面
平安時代後期 ～鎌倉時代前半	土坑123・208、溝129	第3面
鎌倉時代後半 ～室町時代	地下室574・581・594・650・667・685、 土坑23・54・80・83・85・560、溝43、井戸64	第2面
戦国時代 ～近世初頭	土坑7・13・17・19・527・539・554	第1面

区外である。拳大の川原石と常滑甕の破片だけが詰まっていた。土坑17と同様、地下に水を浸透させる排水施設と考えている。

(3) 第2面 (図14、図版3)

第2面は鎌倉時代後半から室町時代の遺構群である。深さ約1.6～2m、東西幅2～5mの掘形を持つ6基の方形地下室を調査区の西半²⁾で検出した。しかし、南北幅は調査区が狭いため不明である。これらの地下室は、平安時代の西一行、北四門と北五門を踏襲したと考えられる境に接して南北に分かれて掘られていた。北側の北四門側で検出した地下室は地下室594だけである。他の5基は全て北五門側敷地内で重複して検出した。その中でも地下室581・650は東西に並び、北壁を北四・五門の敷地境に近接して掘り込んでいた。

地下室574(図15、図版6-1) 東西幅約5.3mを測る。今回検出した地下室の中では最大である。深さは約1.6mで、底には拳大の川原石が敷かれていた。また、北壁底に沿って等間隔ではないが約0.3m大の石が据えられており、内側の調査区南壁際底中央には東石と考えられる長軸0.45mの大きな花崗岩が据えられていた。埋土から京都Ⅷ期の遺物が出土しているため、今回検出した地下室の中では、最も新しい地下室である可能性が高い。

地下室594(図15) 調査区北西隅で検出した。推定される敷地境を0.5m南に越えて、南壁をほぼ垂直に1.1m掘り下げていた。南北幅は約0.9m分検出したが、北・西ともに北端が調査区外となるため規模は不明である。東端は近世の井戸のため潰されており、西端は町小路に面して掘られている。また、底には地下室574同様の拳大の川原石を全面に敷き、南壁直下に0.2～0.3mの石を据えていた。石敷き直上には焼土や炭が厚さ約0.1m被さっていたので、火災に遭遇して廃絶したものと考えられる。南側に接して平行に掘り込まれた地下室581とは重複しない。

地下室581(図16・17、図版4・5) 地下室594の南に接するように検出した。掘形の東西幅は4.6m、内側に木組みによる壁を構築する。木組み内側の東西幅は4.2mである。深さは約1.6mある。南北幅は南壁が調査区外となるが、2.5m分検出した。土層観察アゼを比較的攪乱が少ない中央の南北に設けたが、地下室が深くなったことから、途中で調査区南壁に移行させた。図16のA

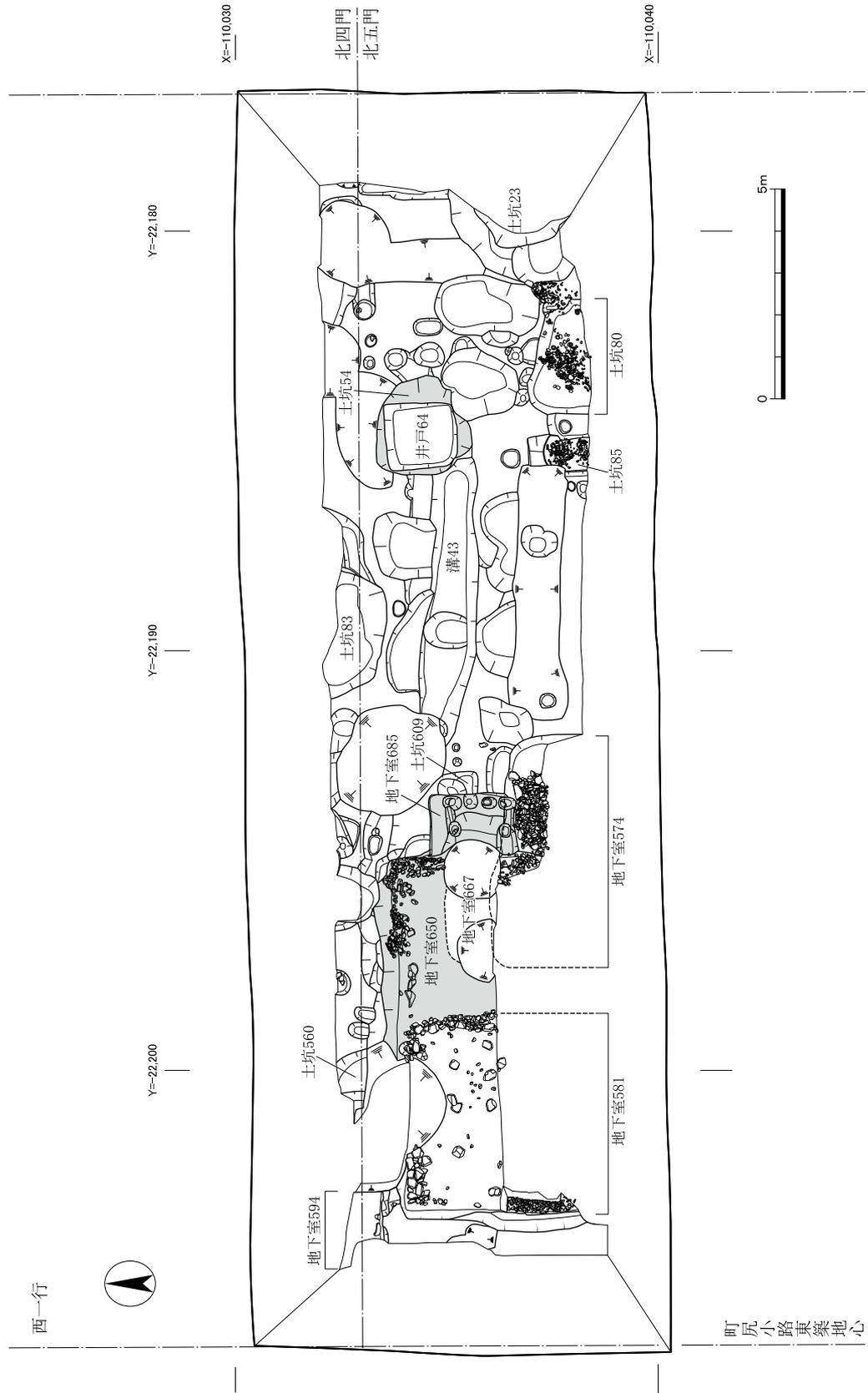
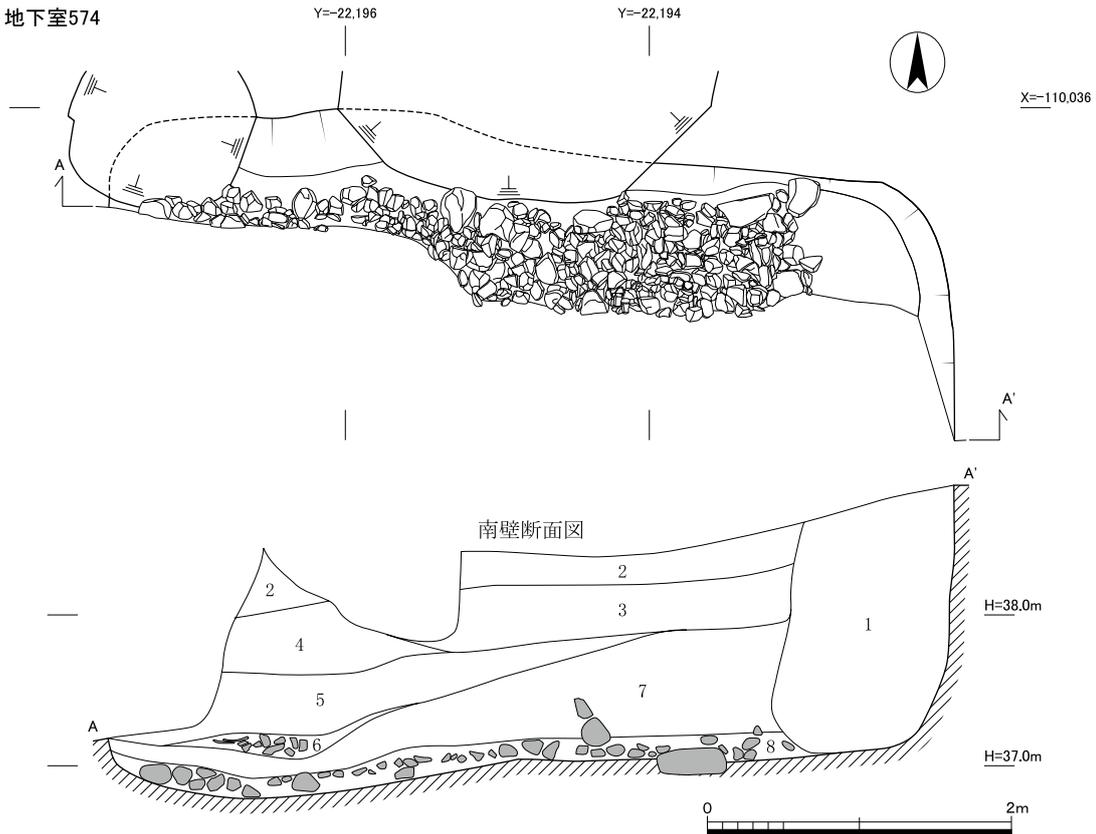


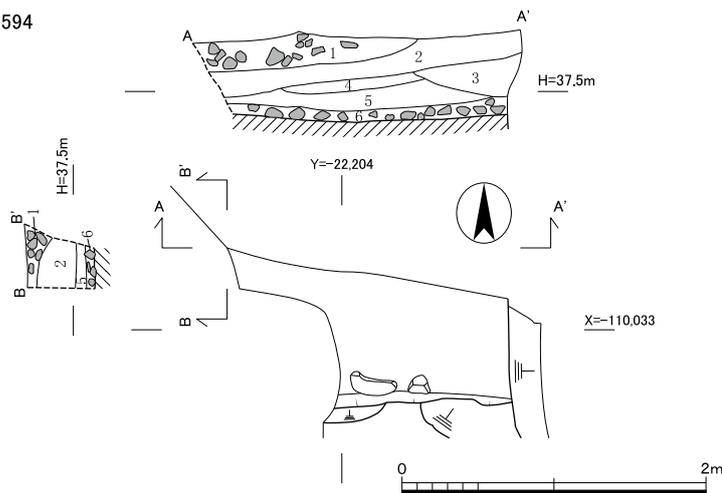
图14 第2面遺構平面图 (1 : 150)

地下室574



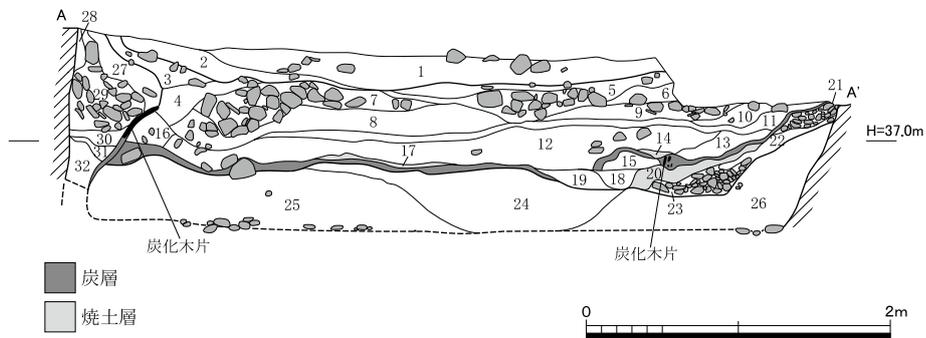
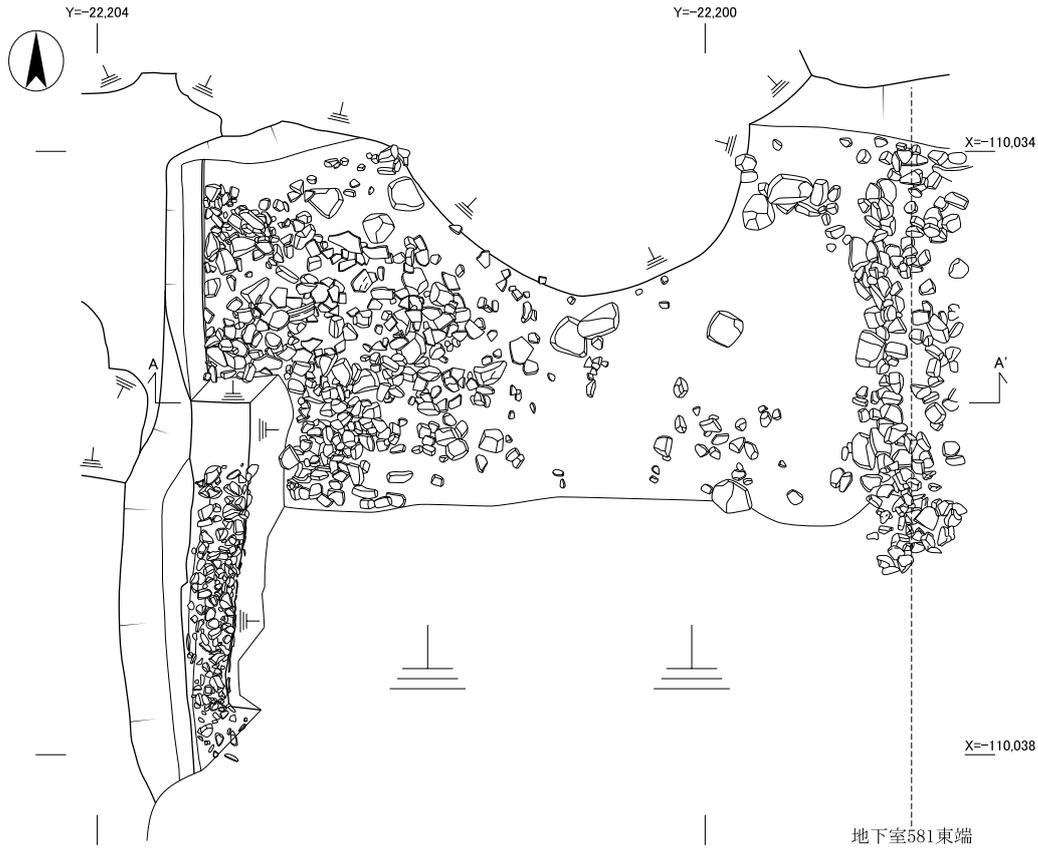
- 1 2.5Y4/1黄灰色泥土、2.5Y5/4黄褐色泥土ブロック混
- 2 10YR3/3暗褐色砂泥、2.5Y4/2暗灰黄色砂泥混、礫径3cm以下混、炭混
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫径11cm以下混、炭・焼土混
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥、礫径5cm以下微量混、炭・焼土混
- 5 10YR3/2黑褐色砂泥、2.5Y5/4黄褐色泥土ブロック中量混、礫径10cm以下少量混、炭・焼土混
- 6 10YR3/2黑褐色泥土、礫径5~25cm多量混
- 7 10YR3/2黑褐色砂泥、礫径20cm以下少量混、焼土混
- 8 10YR2/2黑褐色泥土、10YR6/2灰黄褐色砂多量混、礫径20cm以下多量混

地下室594



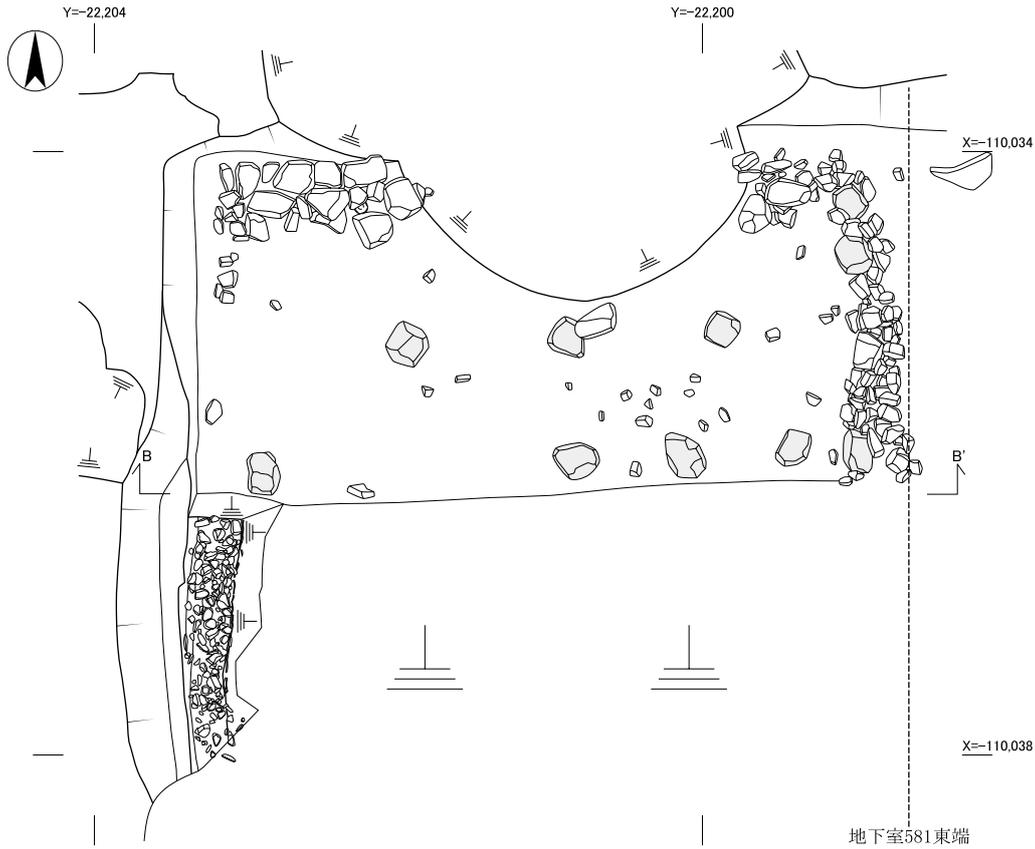
- 1 10YR2/3黑褐色砂泥、礫径10cm以下中量混、炭・焼土多量混
- 2 10YR2/3黑褐色泥砂、礫径5cm以下少量混、炭・焼土多量混
- 3 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径10cm以下微量混、炭少量混
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm以下少量混
- 5 7.5YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土多量混
- 6 10YR3/3暗褐色泥砂、礫径30cm以下・炭・焼土多量混
- 7 10YR4/4褐色砂泥、礫径15cm以下・炭・焼土中量混

图15 地下室574・594实测图 (1 : 50)

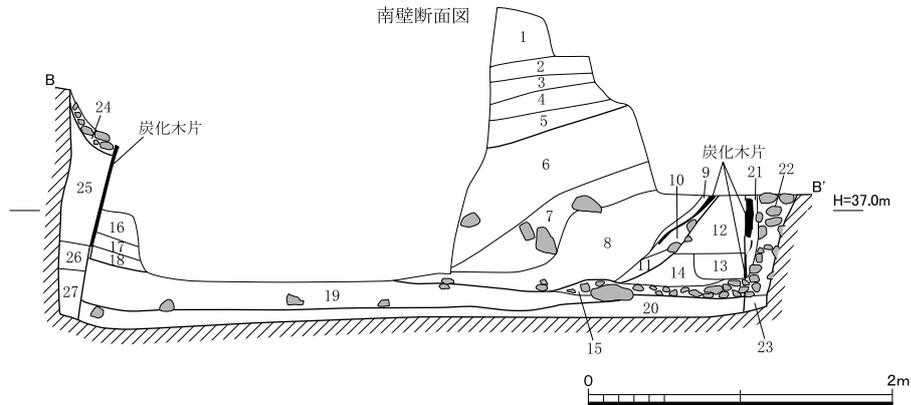


- | | | | |
|----------------------------|--------------------|------------------------|-------|
| 1 10YR3/2黒褐色砂泥、炭少量混、土師片中量混 | 最上層 | 17 5YR4/8赤褐色焼土 | 上層 |
| 2 10YR4/4褐色砂泥 | | 18 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | |
| 3 10YR3/3暗褐色砂泥、炭中量混 | 上層 | 19 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 | 下層 |
| 4 10YR3/3暗褐色砂泥 | | 20 5YR4/4にぶい赤褐色焼土層 | |
| 5 10YR2/3黒褐色砂泥、炭少量混 | | 21 7.5YR3/4暗褐色砂泥 | 縦板裏込め |
| 6 10YR5/6黄褐色砂泥 | | 22 10YR2/3黒褐色砂泥、土師器中量混 | |
| 7 10YR3/3暗褐色砂泥 | | 23 礫径20cm以下多量 | |
| 8 10YR3/2黒褐色砂泥、炭微量混 | | 24 10YR3/3暗褐色砂泥 | |
| 9 10YR3/4暗褐色砂泥 | | 25 10YR3/2黒褐色砂泥 | |
| 10 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、焼土中量混 | | 26 7.5YR2/1黒色砂泥 | |
| 11 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 | | 27 7.5YR3/4暗褐色砂泥 | |
| 12 2.5Y3/2黒褐色砂泥 | | 28 10YR3/3暗褐色砂泥 | |
| 13 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥 | 29 7.5YR4/3褐色砂泥 | | |
| 14 5YR4/8黄褐色焼土 | 30 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 | | |
| 15 7.5YR2/2黒褐色砂泥、土師片中量混 | 31 10YR7/6明黄褐色砂泥 | | |
| 16 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂 | 32 10YR4/4褐色砂泥 | | |

図16 地下室581実測図1 (1:50)



南壁断面図



- | | |
|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <ul style="list-style-type: none"> 1 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径5cm以下・炭・焼土少量混 2 10YR3/2黒褐色泥砂、礫径10cm以下・炭・焼土・土師器多量混(土師器・礫が主体) 3 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、礫径5cm以下・炭・焼土・土師器中量混 4 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫径10cm以下少量混、炭・焼土中量混、土師器多量混(土師器が主体) 5 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径3cm以下少量混、炭・焼土ごく少量混、土師器中量混 6 2.5Y3/2黒褐色砂泥、10YR4/4褐色泥土ブロック少量混、礫径10cm以下・炭・焼土少量混 7 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径20cm以下・炭・焼土少量混 8 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y5/2黄褐色砂泥ブロック中量混、礫径10cm以下・炭・焼土少量混 9 10YR5/4にぶい黄褐色砂、礫径3cm以下(～1cm主)中量混 10 7.5YR4/4褐色砂泥、礫径5cm以下・炭少量混 11 焼土(5YR4/6赤褐色泥砂～砂泥)、上部5cmはほとんど炭、礫径2cm以下少量混 | <ul style="list-style-type: none"> 12 7.5YR4/4褐色泥砂、礫径5cm以下少量混、炭径5cm混 13 10YR3/2黒褐色泥砂、10YR4/3にぶい黄褐色砂泥中量混、礫径3cm以下少量混、焼土(5YR4/6赤褐色砂泥)中量混 14 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径3cm以下・焼土少量混、炭中量混 15 礫径10cm以下(8～10cm主)多量、10YR3/2黒褐色泥砂中量混、炭・焼土混 16 10YR3/4暗褐色砂泥、礫径3～5cm少量混、炭中量混、焼土少量混 17 10YR3/2黒褐色砂泥～泥砂、炭多量混 18 ほとんど炭、10YR2/2黒褐色砂泥少量混、礫径1cm以下少量混 19 10YR3/2黒褐色泥砂、10YR5/4にぶい黄褐色泥砂～砂ブロック少量混、礫径10cm以下(3cm以下主)中量混、炭・焼土少量混 20 2.5Y3/2黒褐色砂泥～泥土、礫径～4cm少量混、炭中量混 21 10YR4/4褐色泥砂、炭・焼土多量混 22 礫径15cm以下多量、10YR3/3暗褐色砂泥少量混 23 2.5Y3/2黒褐色泥土、礫径2cm以下少量混、炭中量混 24 礫径10cm以下(5～10cm主)多量、2.5Y3/2黒褐色砂泥少量混 25 2.5Y3/2黒褐色砂泥、礫径2cm以下ごく少量混、炭・焼土少量混 26 10YR3/4暗褐色泥砂、礫径5cm以下(3～4cm主)多量混 27 10YR2/2黒褐色砂泥、礫径1cm以下・炭少量混 |
| <p>最上層</p> | <p>下層</p> |
| <p>上層</p> | <p>最下層</p> |
| | <p>縦板裏込め</p> |

図17 地下室581実測図2 (1:50)

- A'断面図は常滑甕破片が面上に散乱していた床面までを図化したもので、東石が据えてあった地山掘形底面までの埋土は図17の南壁B-B'断面図に書き入れた。この地下室は北側の地下室594と同じく火災を受けて廃絶しており、西壁と東壁の南半部で炭化した縦板木組み壁を検出した。炭化した板材が良好に残存していたのは西壁南半の火災層から上の部分で、厚さ6cm、幅7～14cmの羽目板を縦に並べて壁面を形成していた。西壁の炭化した壁面は全て内側に傾斜しており、崩壊途上で埋まった状態で検出した。火災層から下は炭化材と連続する腐食して細く萎縮した幅約1cmの縦板跡が床底まで垂直に0.41m残存していた。この縦板腐食痕は地下室北壁際から調査区南壁まで連続していた。縦板の外側には約0.15mの裏込め部があり、上層には川原石を充当していた。東壁部は西壁に比べ木組みの崩壊が激しく、残存状況は悪いが、調査区南壁には幅0.1mの炭化した縦板が0.7m垂直に立って残存していた。また、焼け落ちた上部の部材が内側へ倒れ込んだ痕跡がある。東側の幅約0.15mの木組み裏込めには、底まで川原石を充当していた。しかし、南壁で明瞭に観察できた東側木組み壁がA-A'断面では認められず、内側に倒れ込んだ炭化部材を検出した。また、A-A'断面では東壁掘形が東に向かって斜めに上がっており、調査区南壁B-B'付近と様相が異なっているが、この点については不明である。北壁は木組みの痕跡がなく既に崩落していたが、北壁際底に沿って、約0.2～0.3mの上面が平坦なあるいは偏平な石を同じ高さに並べて据え付けていた。また、最下面の掘形底面で、約0.2～0.3mの上面が平坦な東石を検出している。東壁際底には4個の東石を南北方向に検出しており、北から3個目の東石からは東西方向に約1m間隔で4個並ぶが、西端に東石はない。南端の東石列は東西方向に5個並ぶが、東から4個並ぶ東石間隔は北列より狭く、2m西延長の西壁脇に5個目の東石が据えられていた。これらの地下室

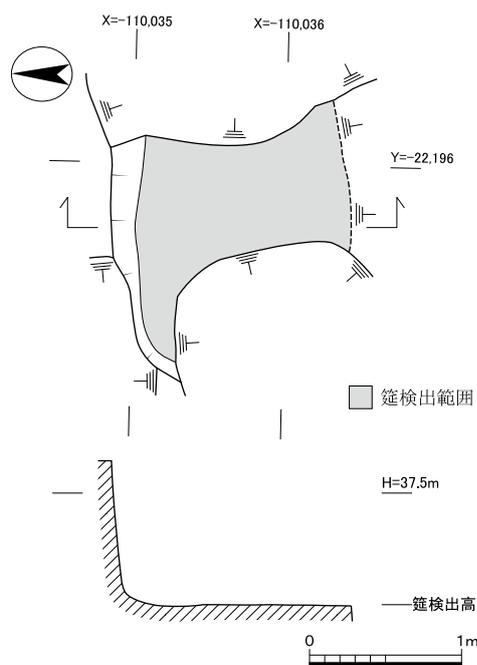
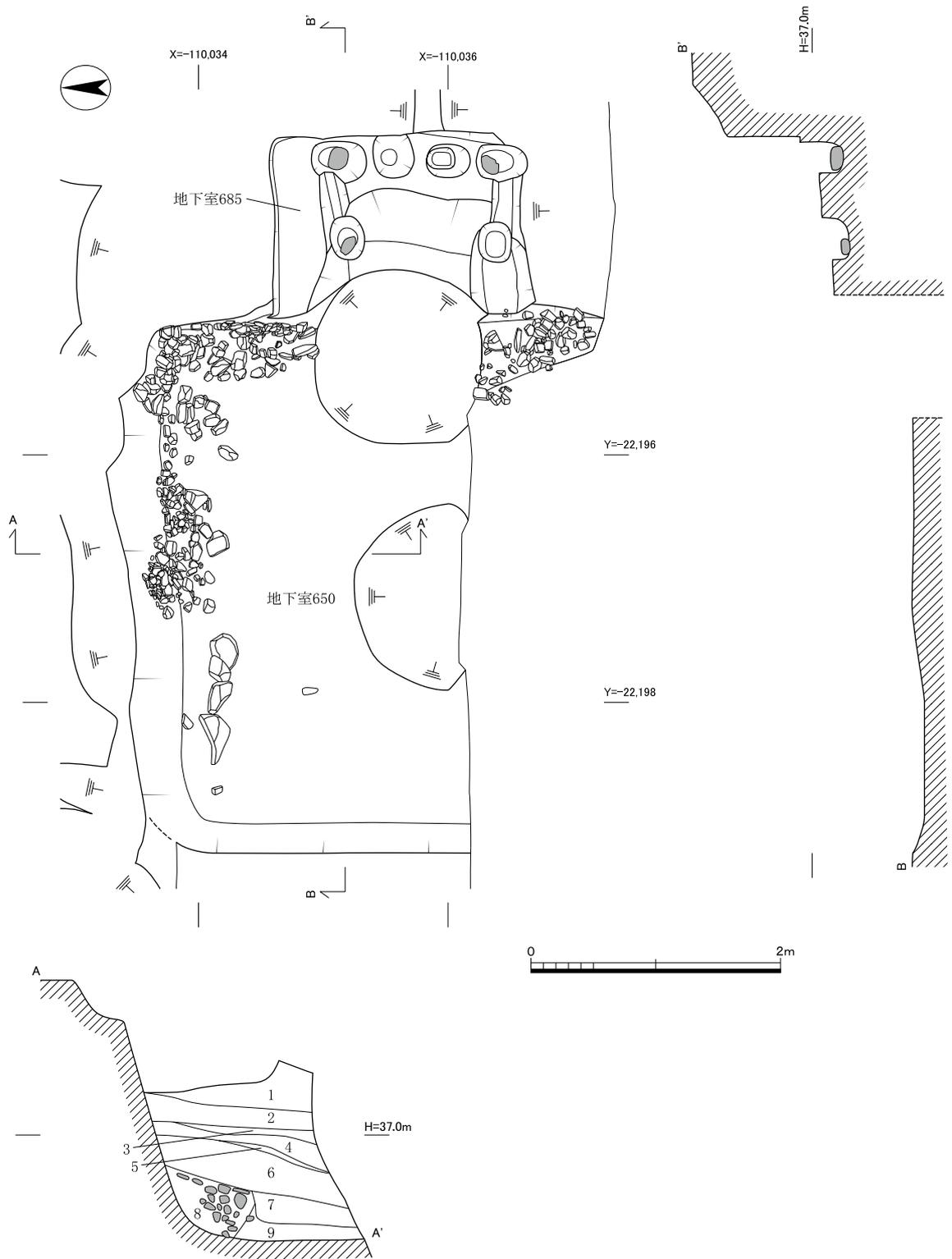


図18 地下室667実測図 (1:50)

内側で検出した東石のいくつかは上屋の床を支えるための東石の可能性が高く、地下室の間仕切りか、上部の建物の床を支える機能を兼ねていた可能性もある。東石が据えられた掘形底面(地山直上)から京都Ⅶ期中段階から新段階の土師器が出土しているので、南北朝時代の初頭頃に構築されたものと考えられる。地下室埋土は厚さ約0.1mの最下層とした黒褐色泥土が東石上端部まで堆積しており、その上面には北西部を中心に常滑大甕の破片を撒き散らした状態で検出した。その上に下層とした黒褐色泥砂が約0.2m溜まった状態で検出したが、その間にしっかりした面はなく、泥水などがしばらくは溜まっている状態であった。壁の炭化材が下層上面から上だけに見られ、下部は縦板跡が腐食した状態で検出したことから、火災に遭遇する前に溜まった層であり、地下室が使用されなかった状態が火災前にあったものと想定する。下層上面には焼け落ちた炭化部材と焼土からなる火災層がほぼ全面に被さった状態で堆積していた。また、火



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、10YR5/4にぶい黄褐色泥土ブロック少量混、礫径5cm以下少量混、炭・焼土少量混
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥～泥砂、礫径2cm以下微量混、炭・焼土微量混、南半は7.5YR3/2黒褐色砂泥多量混
- 3 7.5YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土少量混、礫径3cm以下少量混
- 4 7.5YR3/3暗褐色砂泥、礫径5cm以下少量混、炭少量混、境界に10YR4/3にぶい黄褐色砂泥うすく混
- 5 7.5YR2/2黒褐色砂泥～泥土、炭少量混
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥、10YR～2.5Y4/4褐色～オリーブ褐色砂泥多量混、2.5Y5/4黄褐色砂泥ブロック中量混、炭少量混
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色、2.5Y5/4黄褐色砂泥ブロック中量混、礫径10cm以下中量混、炭・焼土少量混
- 8 10YR3/2黒褐色泥土～砂泥、礫径15cm以下多量混
- 9 2.5Y4/2暗灰黄色、2.5Y5/4黄褐色砂泥ブロック中量混、礫径5cm以下少量混、炭・焼土混

図19 地下室650・685実測図 (1 : 50)

災層の上には遺構検出面まで灰や火を受けた京都Ⅶ期新段階の土師器皿を主体とする遺物を多く含む土で埋め戻されていた。なお、出土遺物は火災層より上を上層と最上層とし、火災層より下を下層と最下層とした。

地下室667(図18) 深さ1.0mの浅い小規模な素掘地下室で、最下層の約5cm程の厚さの黒褐色砂泥上面に筵跡と考えられる痕跡が残っていた。南半部は全て地下室574に切られている。また、東西端も近世の井戸によって掘り込まれて壊されているが、北壁の一部が残存する。東西約1.5m、南北約1.5m分を検出した。

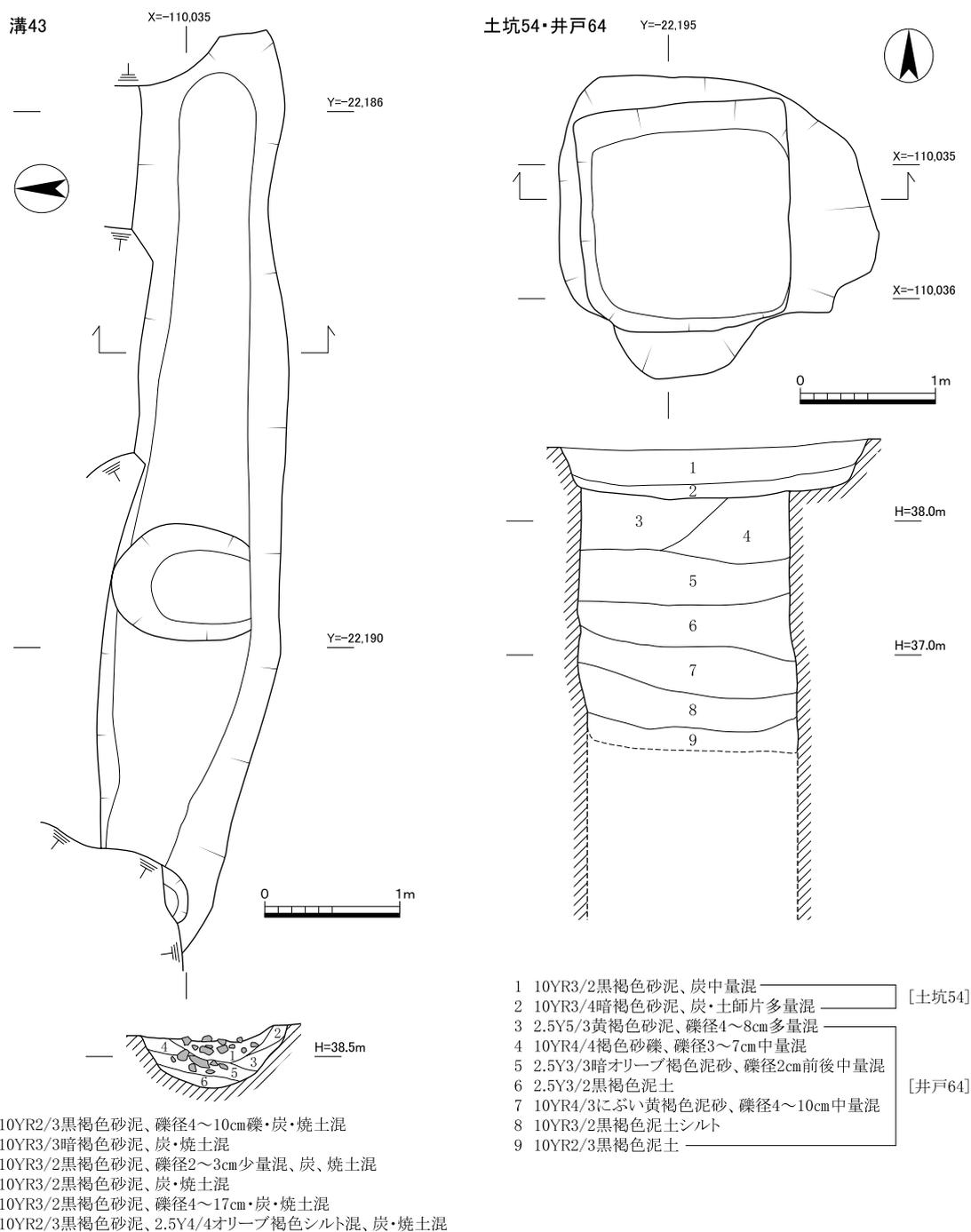


図20 溝43、土坑54、井戸64実測図(1:50)

地下室650 (図19、図版6-3) 地下室581の東側で検出した。東西幅約4.3m、深さ約2.3m。南壁は調査区南壁外となるため不明である。北壁掘形を西側の地下室581の北壁掘形延長線で揃えており、敷地境に接して設けられたものと考えられる。木組みと考えられる壁面は全て崩壊しており、攪乱などによって残存状態は悪いものの、壁脇底に集中して川原石が積み重なった状態で検出していることから、木組み壁面の裏込め石である可能性がある。地下室掘形の底は地下室581底より約0.1m深く、西壁は地下室581の掘形東壁によって壊されていた。西端部底に残存する川原石は、地下室581の東壁基礎に転用されていた。特に西半部に川原石を多く敷いていた痕跡が残る。また、北壁に沿って約0.3m大の上面が平らな石を4個並んでおり、木組み壁の土台を形成していた可能性がある。埋め土の下層は川原石を多く含む砂泥が主体で、裏込め石が崩落して積み重なった可能性がある。しかし、上層と東半部の埋め土には川原石の混入が比較的少ない。埋土出土の最新遺物から京都Ⅶ期に廃絶していると考えられる。

地下室685 (図19、図版6-2) 地下室650東側で検出した。東西1.4m、深さが1.6mの小規模な地下室で、壁際に底に礫石を入れた柱穴が並ぶ。南側が地下室574によって壊されているため正確な東西幅は不明である。西側の地下室650と連続する土で埋まっていたことから、同時期に廃絶した一連の



- 1 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、炭・焼土・土師片多量混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥、炭・焼土・土師片多量混
- 3 10YR3/3暗褐色砂泥、炭・焼土少量混
- 4 10YR3/3暗褐色砂泥、土師器・瓦多量混
- 5 10YR3/2黒褐色砂泥(粘質)、炭少量混
- 6 10YR3/2黒褐色砂泥(やや粘質)、炭・土師片中量混
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥、礫径11cm前後少量混、炭混

図21 土坑80実測図 (1:20)

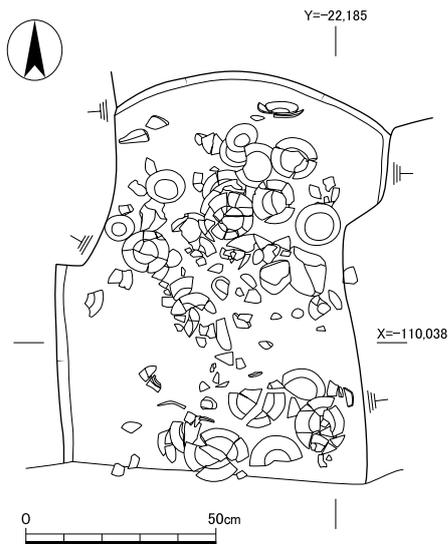


図22 土坑85実測図（1：20）

遺構と見なすことができる。小規模で浅いことや壁構造の違いから、地下室650の付属屋もしくは出入口であった可能性がある。

土坑560 調査区西寄り北端で検出した。14世紀後半（京都Ⅸ期新段階）の土器が溜まった深さ0.3mの土坑である。北端は調査区外となり、南と西は攪乱のため規模は不明である。

土坑23・83 土坑23は調査区南東角で検出した。南北2m、深さ約0.7m。土坑83は調査区中央部北壁際で検出した。東西3m、深さ約0.8m。いずれも不定形で塵穴と考えられる。時期は中世前半である。

土坑54（図20） 東西2.3m、南北2.3m、深さ0.4mを測る。埋土下層の暗褐色砂泥から京都Ⅹ期古段階の土器が多く出土した。

井戸64（図20） 土器溜土坑54の下面に16世紀前初頭（京都Ⅸ期新段階からⅩ期古段階）に埋められた一辺約1.6mの方形の掘形の井戸を検出した。この井戸は深いので、安全面を配慮して調査終了時に重機で掘り下げて円形石組み井戸であることを確認した。埋め戻し土がほぼ均一で水平堆積しているため、上部の石組みは抜き取られた後埋め戻された可能性が高い。また、掘形が方形であることから、方形木組み井戸を石組み井戸に組み替えた可能性もある。

土坑80・85（図21・22、図版7） 東部南壁に沿って2基の不定型な土器溜土坑を検出したが、南端は調査区外となるため不明である。東側の土坑80は深さ0.45m、東西2.9m、南北1.5m分検出した。西側の土坑85は深さ0.15mの浅い窪み状の土坑で、東西0.80m、南北1m分検出した。両土坑から出土した土器は多量であるが、ほとんどが完形品の土師器皿（京都Ⅷ期）で、14世紀後半代の土坑である。土坑80から混入品として緑釉を掛けた土製円塔（図32-148）が出土している。

溝43（図20） 調査区東半で検出した。東西6m、幅1.2m、深さ0.4mの東西方向の溝である。出土遺物から14世紀後半代の遺構である。

（4）第3面（図23、図版8）

第3面は平安時代後期から鎌倉時代前半の遺構群である。多数の柱穴を検出しているが、建物跡として復元できない。

溝129（図24） 調査区東半部で北四門と北五門を踏襲する境界推定線の約0.6m南に沿って東西4m、深さ約0.4m検出した。東でL字状に南に曲がり2.5m付近で途切れていた。断面が逆台形状で、両肩に板を張った痕跡がある。埋土に黒褐色のブロックなどを少量含んでおり、人為的に埋められた痕跡がある。溝から少量の平安京Ⅳ期からⅤ期の土師器片が出土している。

土坑208（図25） 径0.45m、深さ0.13mの円形土坑埋土上面に土師器皿を10枚以上重ねて置かれていた。上向きに重ねたやや小型の皿と伏せた状態の大皿がある。時期は平安京Ⅳ期からⅤ期で

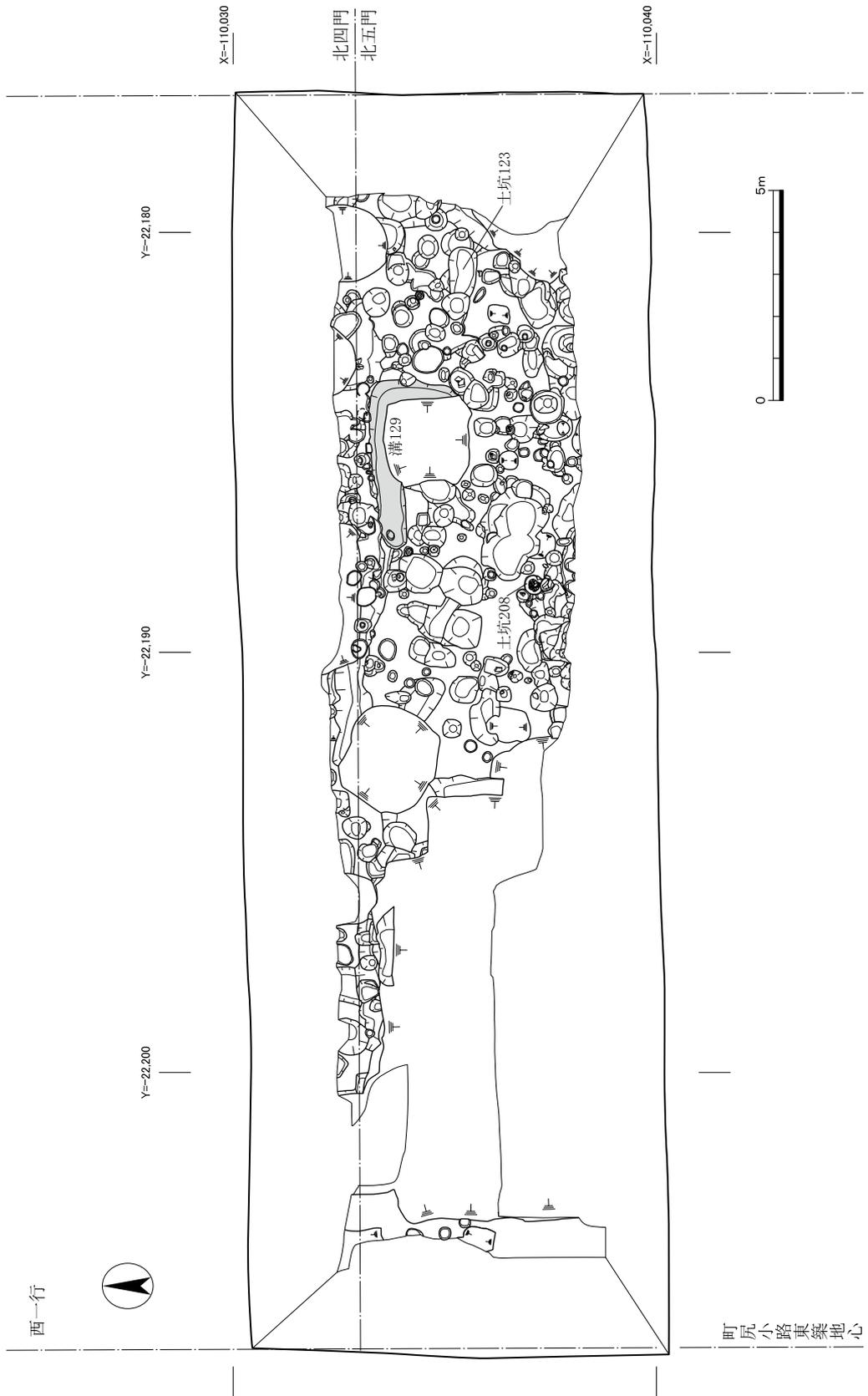
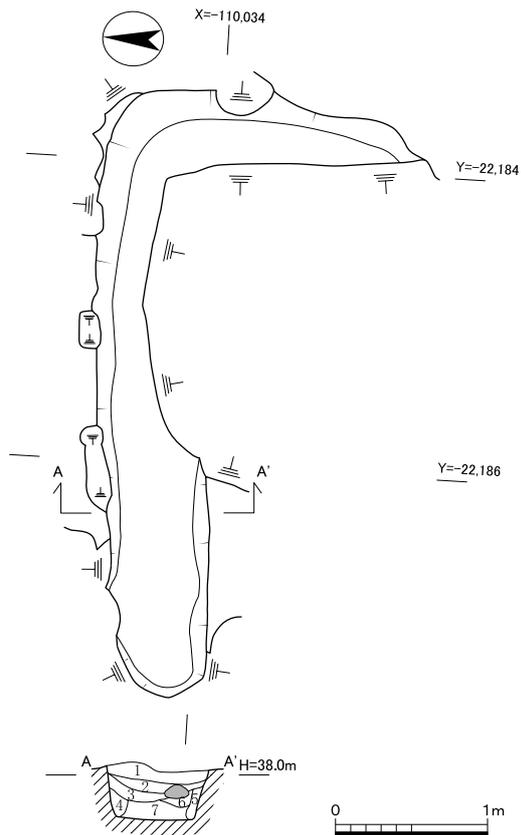
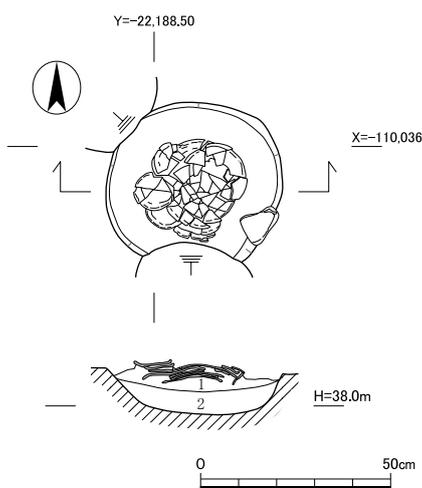


图23 第3面遺構平面図 (1 : 150)



- 1 2.5Y3/2~3/3黒褐色～暗オリーブ褐色砂泥、礫径5cm以下
中量混、炭混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥、炭混
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥、2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥ブロック中量混
- 4 2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂泥(下部では泥土)
- 5 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥土、2.5Y3/2黒褐色砂泥ブロック
少量混
- 6 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥、2.5Y3/2黒褐色砂泥～泥土ブロック
少量混
- 7 2.5Y4/4オリーブ褐色砂泥

図24 溝129実測図(1:50)



- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径0.5cm前後混
- 2 2.5Y3/2~3/3黒褐色～暗オリーブ褐色砂泥、
炭・焼土微量混

図25 土坑208実測図(1:20)

ある。

土坑123 東西1.5m、南北0.6m、深さ0.35mの楕円の土坑である。平安京V期新段階の土器が出土している。

(5) 第4面(図26・28、図版9)

第4面は地山層上面であるが、平安時代前期と弥生時代前期の遺構を重複して検出したので、平安時代前期を第4-1面、弥生時代を第4-2面として図示する。中央部に平安時代前期(平安京II期古段階)の土坑405・671などを検出した。さらに、土坑405の下層に畿内弥生第I様式の土器が多量に出土した土坑515と、約5m西から土坑693を検出した。また、調査区の西端北西角で畿内弥生第V様式の壺が出土した南北方向の溝698を検出した。

第4-1面(図26、図版9)

土坑405・671(図27、図版10-1・10-2) これらの土坑は浅く円形で、東西に並ぶ。平安時代前期(平安京II期古段階)の遺物が一括して出土した。東側の土坑405は東西0.7m、南北0.6m、深さ0.2mを測り、西側の土坑671は東西0.8m、南北0.8m、深さ0.2mを測る。

第4-2面(図28、図版9)

溝698(図29) 調査区北西部で検出した。幅0.8m、深さ0.4mの南北溝である。上面を地下室594に、南の大半が地下室581によって掘り込まれている。溝底から畿内弥生第V様式の壺が出土した。

土坑515(図29、図版10-3) 東西2.8m、南北3.5m、深さ0.5mを測る不定形な土坑である。畿内弥生第I様式の土器片が多量に出土した。5つの土坑が重複して掘り込まれて底が凸

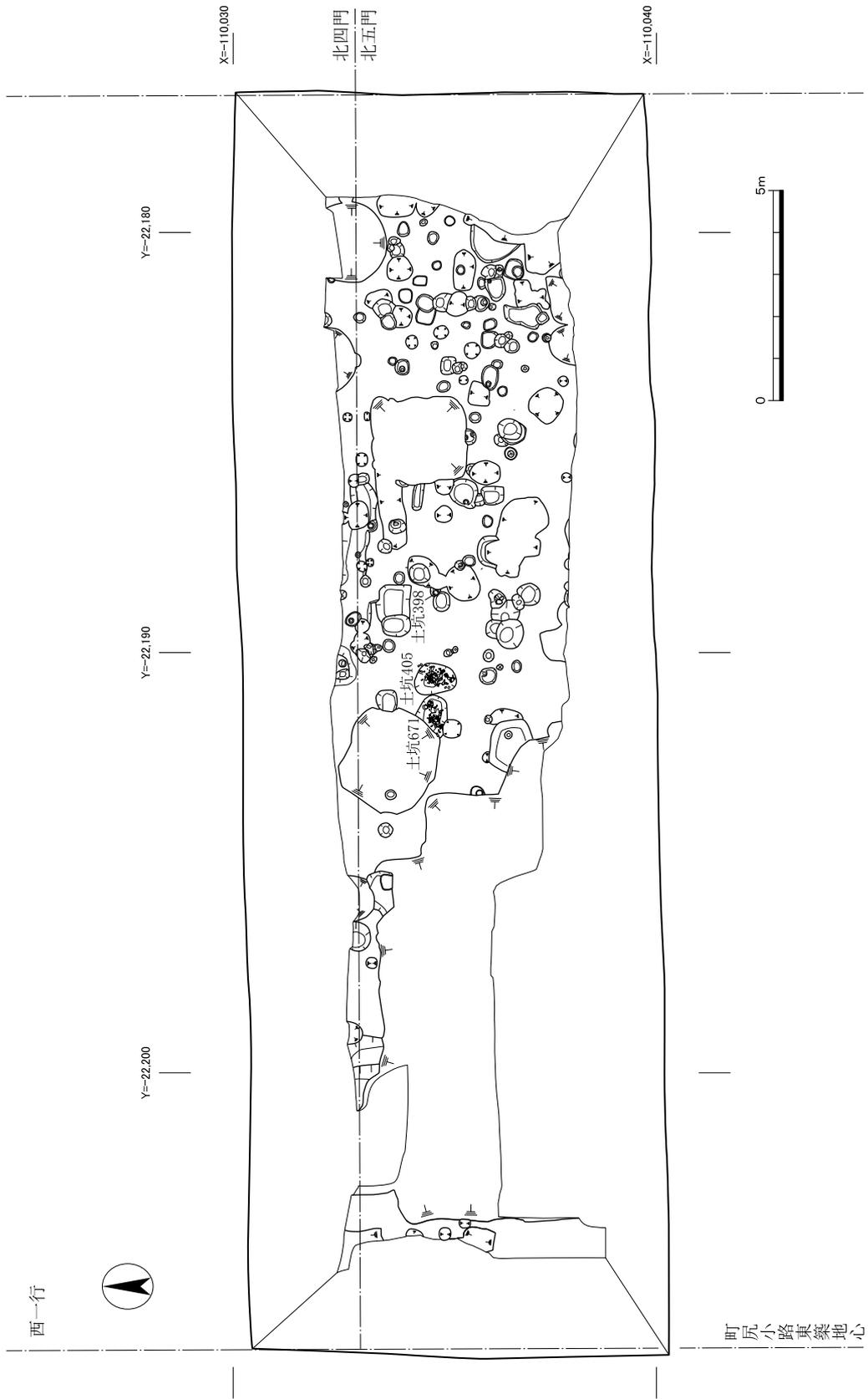


图26 第4-1面遺構平面図 (1:150)

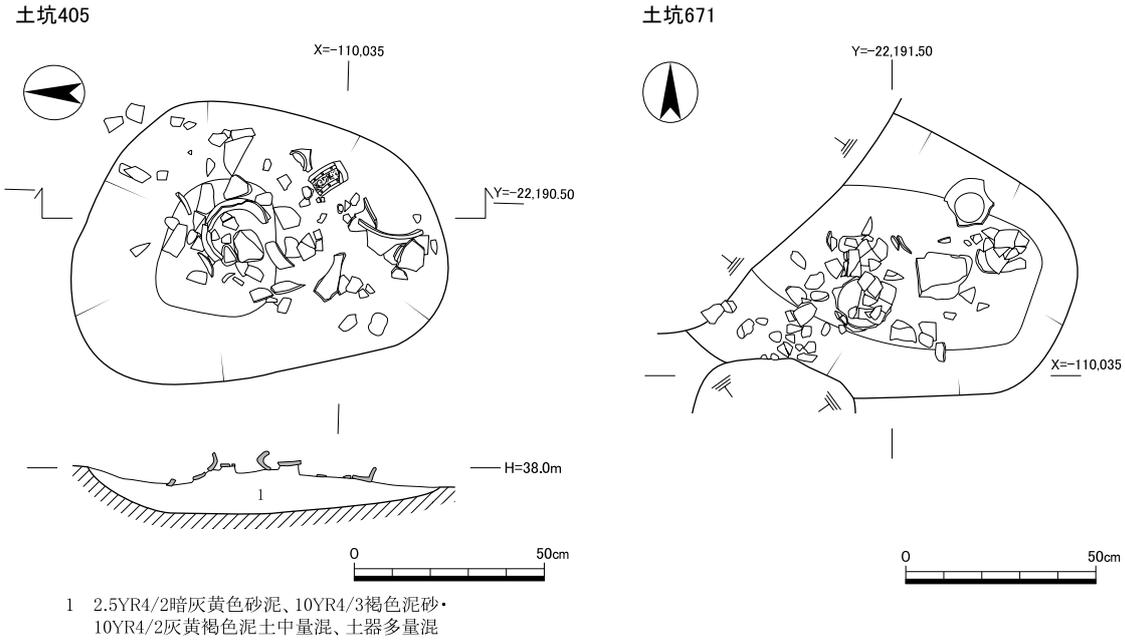


図27 土坑405・671実測図（1：20）

凹しているが、土器片が相互に接合したことから同一土坑とした。底から焼けた猪の骨を検出している。

土坑693（図29、図版10－4） 南西部を地下室650・685によって掘り込まれているが、楕円形で底が丸みを帯びている土坑である。東西1.4m、南北3.1m、深さ0.6mを測る。畿内弥生第I様式の土器が多量に出土したが、土坑515の土器片とは接合しない。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年
- 2) ここでは地面を方形、垂直に掘り込み、四周の壁を板材などで支え、底部に間柱を配した遺構を地下室とする。

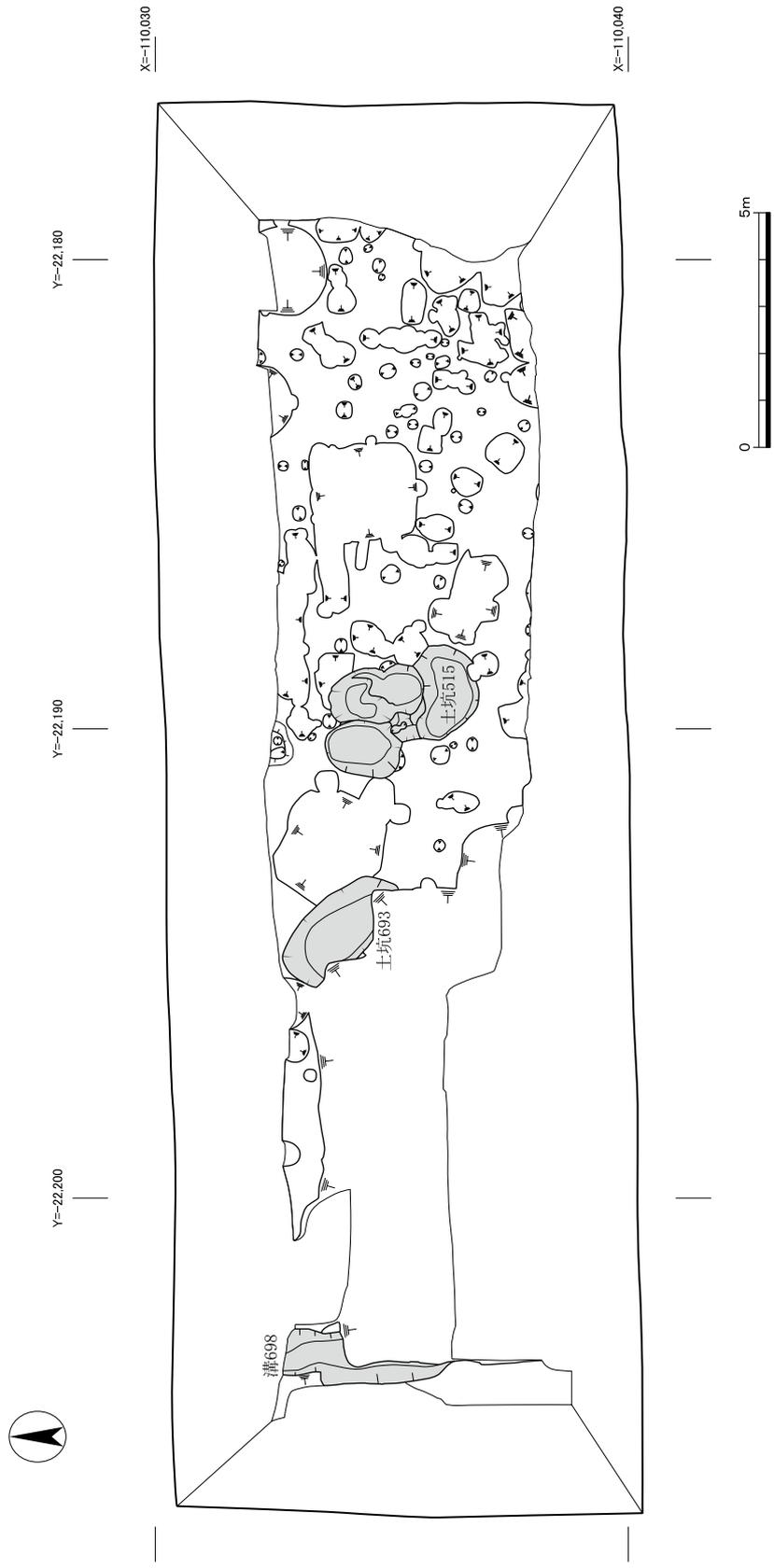
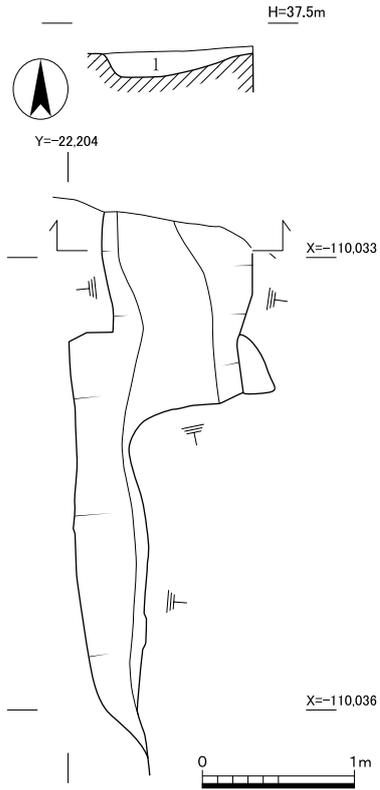


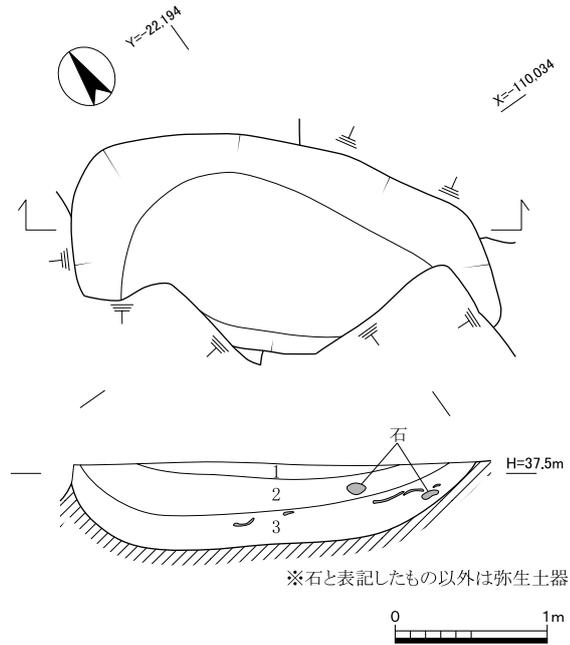
图28 第4-2面遺構平面図 (1 : 150)

溝698



1 10YR3/5暗褐色砂泥、径5cm以下の礫・炭少量混

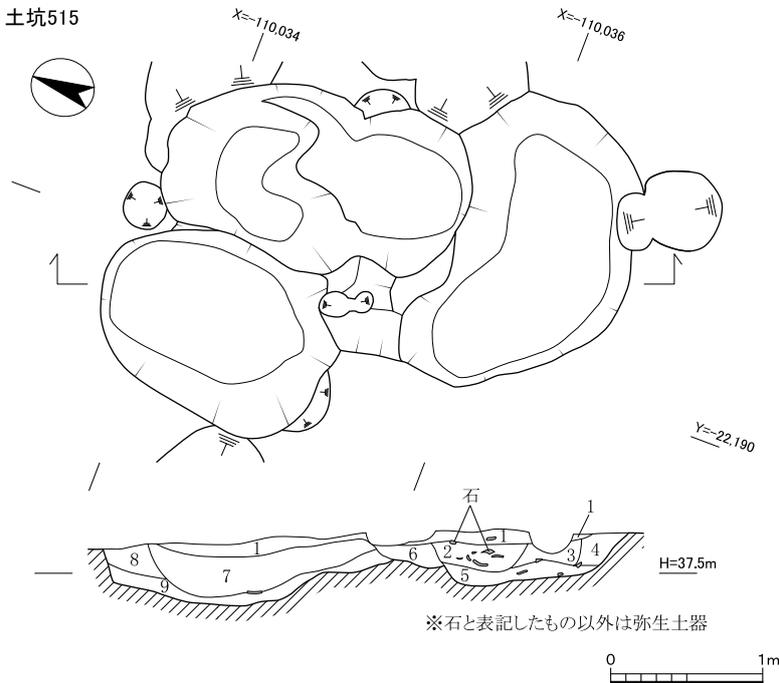
土坑693



※石と表記したものは弥生土器

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥、礫径3cm以下微量混
- 2 10YR4/3~4/4にぶい黄褐色~褐色砂泥、10YR3/2黒褐色砂泥中量混
- 3 10YR2/1~2/2黒色~黒褐色砂泥(粘質)、10YR3/2黒褐色砂泥少量混、炭混

土坑515



※石と表記したものは弥生土器

- 1 10YR3/2黒褐色砂泥(やや粘質)、炭・焼土微量混
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥(粘質)、炭・焼土・礫径5cm前後混
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥(粘質)、10YR3/4暗褐色粘土混、炭微量混
- 4 10YR3/2黒褐色砂泥
- 5 10YR2/1黒色泥土、焼土微量混
- 6 10YR3/3~3/4暗褐色泥土、礫径2cm以下・焼土微量混
- 7 10YR3/2黒褐色泥土、炭混
- 8 10YR3/2黒褐色砂泥、2.5Y5/3黄褐色泥土混
- 9 2.5Y3/2黒褐色砂泥

図29 溝698、土坑515・693実測図(1:50)

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土遺物には、畿内弥生第Ⅰ様式の土器があり、京都盆地の弥生時代の幕開けを告げる良好な資料となる。出土遺物は平安時代後期から遺物量が急激に増え、中世にピークを迎える。また、銭貨は最古が「開元通寶」(621年初鑄)で最新が「光順通寶」(1460年初鑄)からなる良銭のみの緡銭565枚が第1面土坑527から出土した。撰銭禁止令が頻繁に発せられた室町時代から近世に至る実態を示す資料となる。また、今回検出した地下室内からは、多量の土師器皿の他に瓦器銚子が41個体分出土した。

(2) 土器類

土坑13出土土器(図30、図版11) 1～8は赤色系土師器皿である。口径5.4～7.1cmで粗雑で、底が反り上がっているものが多い。9～15は白色系土師器皿である。9は口径9.8cmの小皿で、圏線が巡らない。10～15は圏線が巡る。口径は10.4～11.6cmである。編年¹⁾から江戸時代前期(京都Ⅺ期中段階)の土師器群に該当する。16は口径11.4cm、高さ6.5cmの肥前染付椀である。胴部外面に草花文を描く。内面に模様はない。高台は逆台形で、高台裏まで釉が掛かる。畳付けに砂が付着する。1630～40年代か。

土坑17出土土器(図30、図版11) 17は赤色系土師器皿で、口径6cmを測る。粗雑で底が反り上がっている。18～30は白色系土師器皿である。18は口径9.3cmの小皿で圏線が巡らない。19～30

表2 遺物概要表

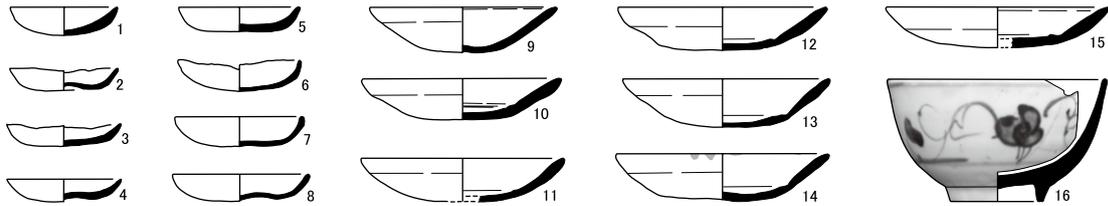
時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代	弥生土器、石器、骨		弥生土器43点、石器1点		
平安時代前期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦		土師器18点、須恵器1点、緑釉陶器4点、灰釉陶器2点、軒平瓦1点		
平安時代中期～鎌倉時代前半	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦		土師器16点、須恵器1点、土塔1点、軒丸瓦3点、軒平瓦2点		
鎌倉時代後半～室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、ガラス玉		土師器225点、瓦器54点、焼締陶器2点、輸入陶磁器13点、ガラス玉1点		
戦国時代～近世初頭	土師器、焼締陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器、銭貨		土師器44点、焼締陶器1点、輸入陶磁器1点、国産陶磁器1点、銭貨565点		
合計		236箱	1000点(17箱)	2箱	217箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より19箱多くなっている。
銭貨は、土坑527から一括出土した銭1～565をAランク、その他の銭566～704をBランクとした。

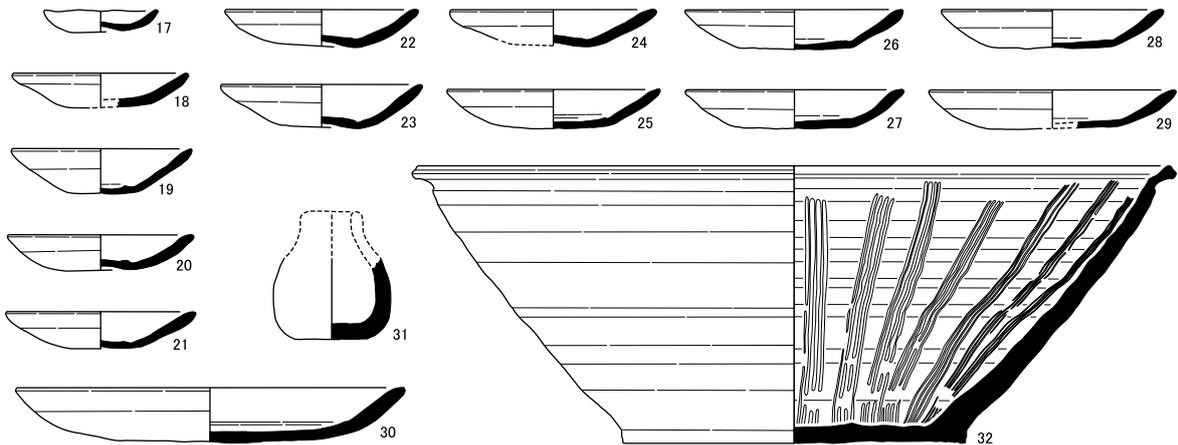
は圈線が巡る。19～28の口径は9.5～11.7cmで、29は13cmを測る。30は特に大きく口径20.5cmを測る。土師器編年では京都Ⅺ期古段階に該当する。31は土師器の壺か。口縁部を欠くため明確ではない。内面は指による成形痕が付く。橙色で胎土・焼成とも良い。32は信楽播鉢である。端部を外側に伸ばし先端をつまみ上げて「て」の字に作る。須恵質で硬質である。長石などを多く含み、表面は赤茶色を呈する。播り跡に胎土の暗灰色が露出していることから、鉄漿などを塗って焼いた可能性がある。4条の櫛目単位で播り目を引き、見込みには播り目を付けない。

土坑7出土土器(図30、図版11) 33～37は赤色系土師器皿である。口径5.9～7.4cmで、粗雑で

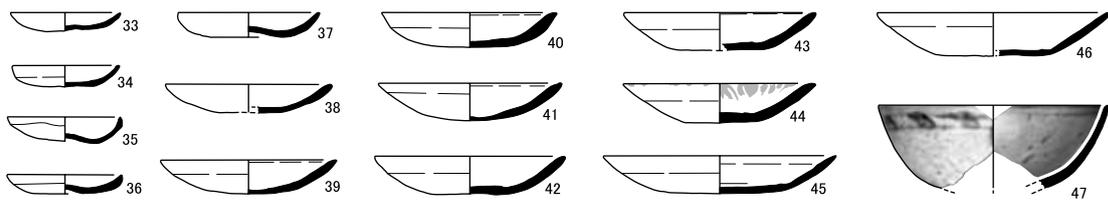
土坑13



土坑17



土坑7



土坑539

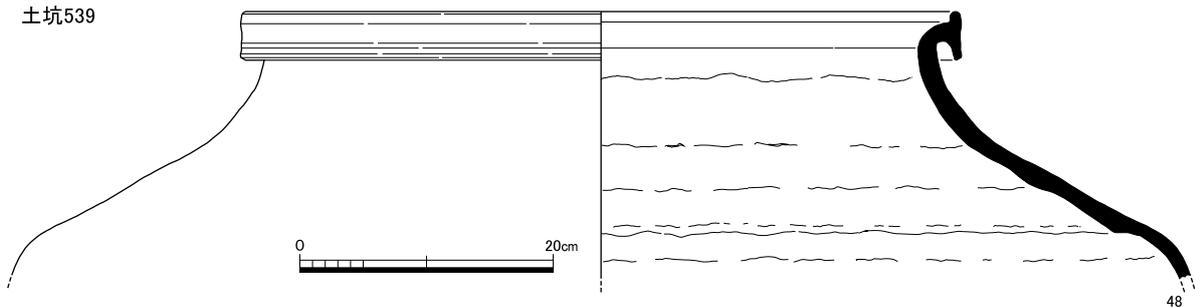


図30 土坑13・17・7・539出土土器実測図(1:4、48のみ1:6)

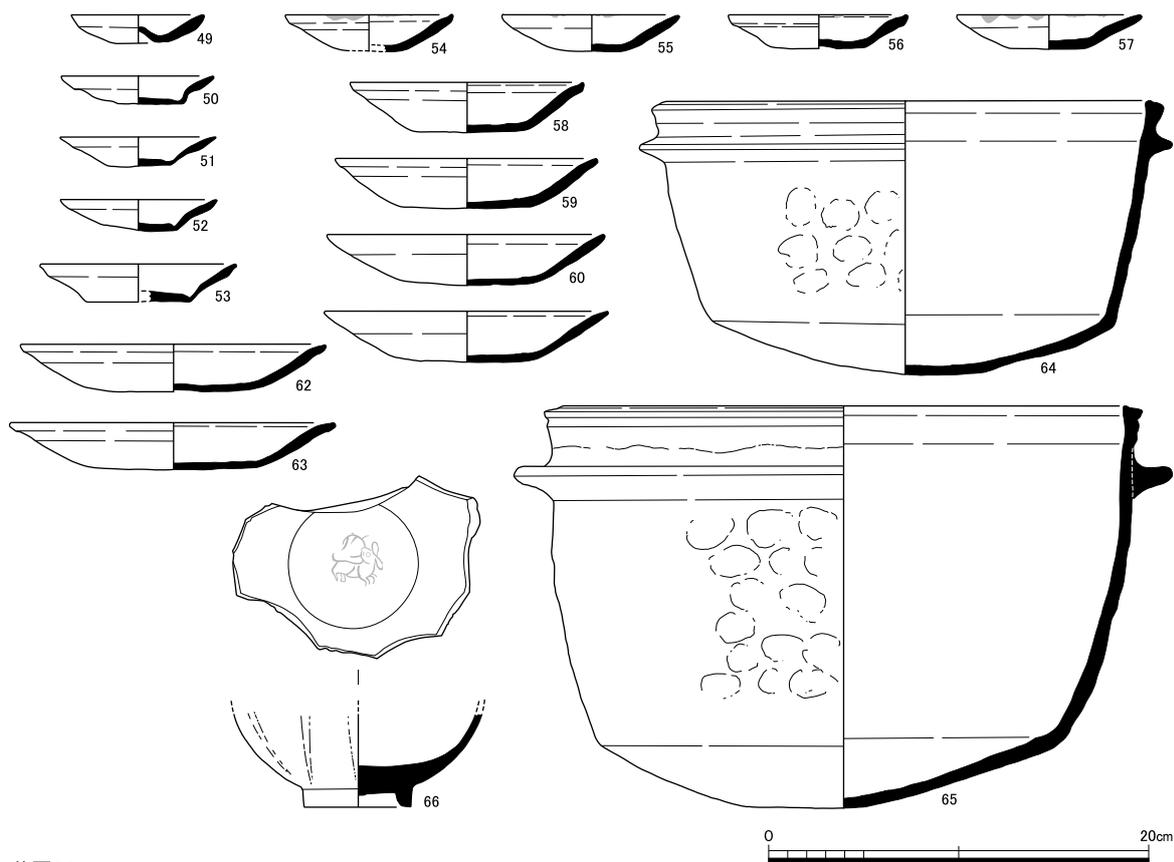
底が反り上がっているものが多い。38～46は白色系土師器皿である。38～41は口径8.8～9.6cmの小皿で圏線がない。42～46は圏線が巡る。42～44は口径は10.0～10.2cmで、圏線幅が短い。口縁を少しつまみ上げたものや煤が付着したのものがある。45・46はいずれも口径12.2cmである。編年から京都X期新段階の土師器群に該当する。47は胎土が粗くややピンク掛かった色を呈し、貫入の多い染付椀である。磁器でない可能性があり東南アジア産の輸入陶器か。

土坑539出土土器（図30） 48は第1面で検出した集石土坑539から出土した常滑大甕口縁部である。口縁をN字状に作るが、胴部表面にタタキの痕跡がない。水はけを良くするためか14世紀代の常滑大甕が割られて川原石と混ぜられてバラバラの状態に埋まっていたものである。

土坑54出土土器（図31、図版11） 49は口径7cmの白色系土師器へそ皿である。器高が低く1.5cmである。色がピンク掛かっている。50～53は赤色系土師器皿である。口径8.2cmの小と口径10.2cmの大がある。54～63は白色系土師器皿で大・中・小がある。小は口径8.8～9.6cm。中が口径12.2～14.8cm。口縁に煤が付着するものもある。大は口径16～17cmである。時期は京都X期古を想定できる。64・65は瓦器羽釜である。小型の64は完形で、径25.3cm、高さ14.5cmを測る。内面はナデで仕上げるが、炭素は使用のためか飛んでいる。外面には使用痕である煤が付着する。大型の65は径29cm、高さ21.3cmである。底部は下方へ丸く突出する。鏝部は台形に近い逆三角形を呈し、突出幅が大きい。鏝部から口縁にかけて凹線を二重に巡らす。下段の凹線は明瞭ではない。いずれも外面は指によるオサエとナデによる調整を施す。66は輸入青磁椀で、胎土は灰掛かった白色。釉はモスグリーンである。内面にウサギが葉を啜って見返る陰刻スタンプを施している。胴部外面にやや粗い蓮弁文を篋で施す。削り出し高台で、高台畳付け内側と高台裏中心に釉が掛かる。15～16世紀の製品であろう。

井戸64出土土器（図31、図版11） 67～69は赤色系土師器皿である。口縁が外反し、底と胴部立ち上がり部が薄い。口径6.8～7.6cmを測る。70～72は白色系土師器へそ皿である。口径6.4～7cmで、へその突起も低く、ピンク掛かった橙色で赤色系に近い。73～84は白色系土師器皿である。口径8.2～8.4cmの小、口径9.8～10.2cmの中、口径11.4～14.8cmの大とに分かれる。小の口縁に煤が付着するものがある。土器編年から、1500年前後の京都IX期新段階からX期古段階の半ばを想定できる。85・86は同型の瓦器小型三足釜である。85の口径は内法で6.2cm、体部高さ4.5cm。86の口径は内法6cm、体部高さ4.8cmである。鏝部上につまみ上げて内傾する肩部を付ける。いずれも炭素が飛び、足を欠いている。小型三足釜は京都VI期新段階からVIII期中段階までの出土類例は多く、鏝上の肩から口縁にかけて長く内傾して立ち上がり凹線を3条ほど巡らす。ここでは肩部が退化してつまみ上げだけになっているのが特徴である。87・88は瓦器鑲付茶釜である。内傾する口縁径より外に張った胴部径が大きい。小型の87は断面が円盤状で、鏝の先端がやや上方に向いた丸底の茶釜である。口径内法6cm、高さ5.2cm、鏝径12cmを測る。炭素は飛んでいるが、実用品か祭祀用であるかは不明である。88は口径内法14.2cm、高さ12.2cmの大型茶釜である。鏝がなく、87より底が平らである。胴部は外面に指オサエの痕跡がある。口縁は内傾する肩部に2条の凹線を巡らし、端部を丸く収める。火底に圧痕が残る。胴部内面に横方向のナデもしくはカキメを施す。炭素

土坑54



井戸64

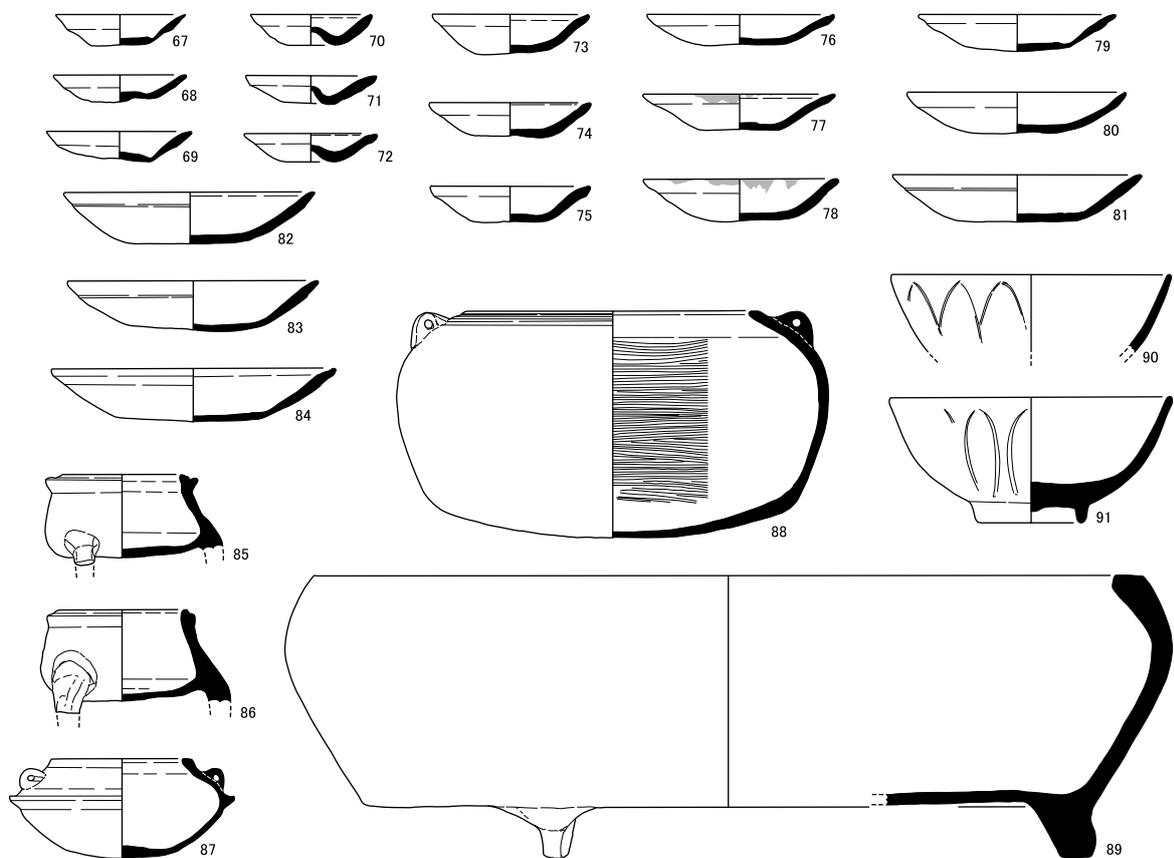


图31 土坑54、井戸64出土土器实测图（1：4）

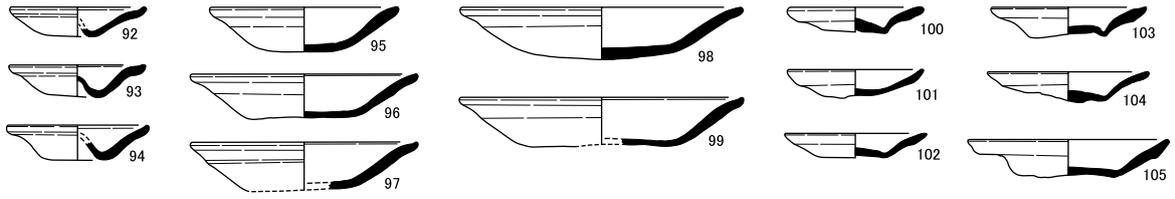
の飛びが激しく淡白色である。胴部外面に煤が付着している。89は円形三足奈良火鉢である。口径44cm、高さ15cmを測る。胴部上方で胴が外に張り口縁ですぼめている。口縁上に平らな面を作る。器表が荒れているが、口縁面と胴部にミガキの痕跡がある。その他のスタンプなどの装飾はない。底面は平らで指によるナデ跡が残る。その後離砂が付着する。足は粘土塊をなで付けて付着させている。内面ナデ仕上げ。全面に炭素が付着する。90・91は輸入青磁椀である。両者の作風は同じで、胴部外面に篋による蓮弁文を巡らす。90は口径14.8cm。高台部が残る91は口径14.8cm、高さ16.8cmを測る。91の高台の作りは土坑54出土の青磁とほぼ同じで、豊付内側まで釉が掛かる。高台裏中心にも釉を塗っており、高台内側脇は重ね焼きのため釉を削り取っている可能性がある。高台裏中心釉部に重ね焼きの際に付着した砂と道具の痕跡が残る。内面見込みのロクロ目は「の」の字回りで、ロクロが左回りであることを示す。また、内面に重ね焼きの痕跡はない。

土坑560出土土器（図32、図版11） 土器溜土坑から出土した一括遺物である。92～94は白色系土師器へそ皿で、やや橙色の焼き上がりとなっている。口径7.2～7.5cmを測る。95～99は白色系土師器皿で、橙色の焼き上がりとなっている。口径の違いから小の口径10.0cm（95）と、中の口径12.0cm（96・97）と、大の口径14.9～15.0cm（98・99）に分類できる。100～105は赤色系土師器皿である。口径の違いから口径7.2～7.5cmの小、口径8.2～8.5cmの中、口径10.0cmの大に分類できる。土師器編年から、15世紀末の京都Ⅸ期新段階に位置づけることができる。

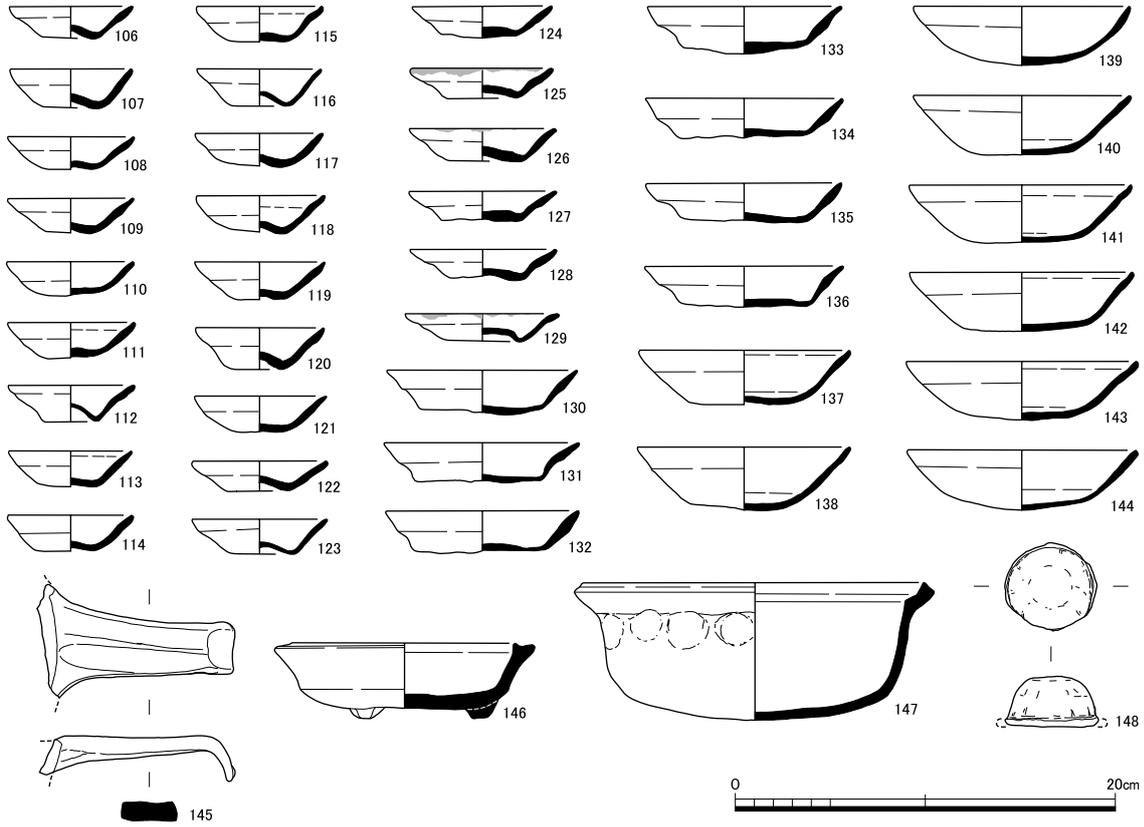
土坑80出土土器（図32、図版11） 土器溜土坑から出土した一括遺物である。106～123は白色系土師器へそ皿である。口径6.6～7cmで、へそ皿と皿小と区分できないものがある。124～136は赤色系土師器皿で、口径7.3～8.0cmの小と口径10～10.4cmの大とに分かれる。口縁が外反し、底と胴部立ち上がり部が薄い。129のように、へそ皿のように盛り上がっているものもある。137～144は器厚が薄い白色系土師器皿である。口径は11～12cmである。土師器皿は全て15世紀前半の京都Ⅷ期の様相を呈している。145は瓦器銚子の把手である。長さ約10cmを測る。表面には炭素が付着する。把手端部を2cmほど下に曲げている。東半部から出土した瓦器銚子はこの1点にとどまる。146は蓋を被せるための返りを口縁内側に突起させる素焼三足香炉である。胎土、器表とも黄橙色であるが、瓦器が火を受けて炭素がとんだ可能性がある。口径13.7cm、高さ4.6cmを測る。器厚が全体に厚く、胎土はやや粗くクリーム色である。内面と胴部は横ナデで仕上げている。足もナデ付けである。147は瓦器鍋である。口径19.1cm、高さ7.3cmを測る。口縁は厚く外反させて、内側に蓋を被せるためのやや不明瞭な凹みをめぐらす。口縁部と内面はナデ仕上げ。胴部外面には大きな単位の指オサエの痕跡が残る。底部と胴部を丸く収めて作る。底部外面に圧痕がある。底外面以外は炭素が付着する。京都産か。148は濃い色調の緑釉を掛けた土製円塔である。焼成は良好である。径4.8cm、高さ2.7cmを測る。底面は平らで一部に釉が掛かる。底部縁端部はほとんど破損している。土製円塔は六勝寺関係から多く出土しており、平安時代末期から鎌倉時代に作成されたと考えられているので混入品である。

土坑85出土土器（図32、図版12） 土器溜土坑から出土した一括遺物である。149～152は白色系土師器へそ皿である。口径6.5～6.8cm。へその突起が緩いものがある。153～157は白色系土師

土坑560



土坑80



土坑85

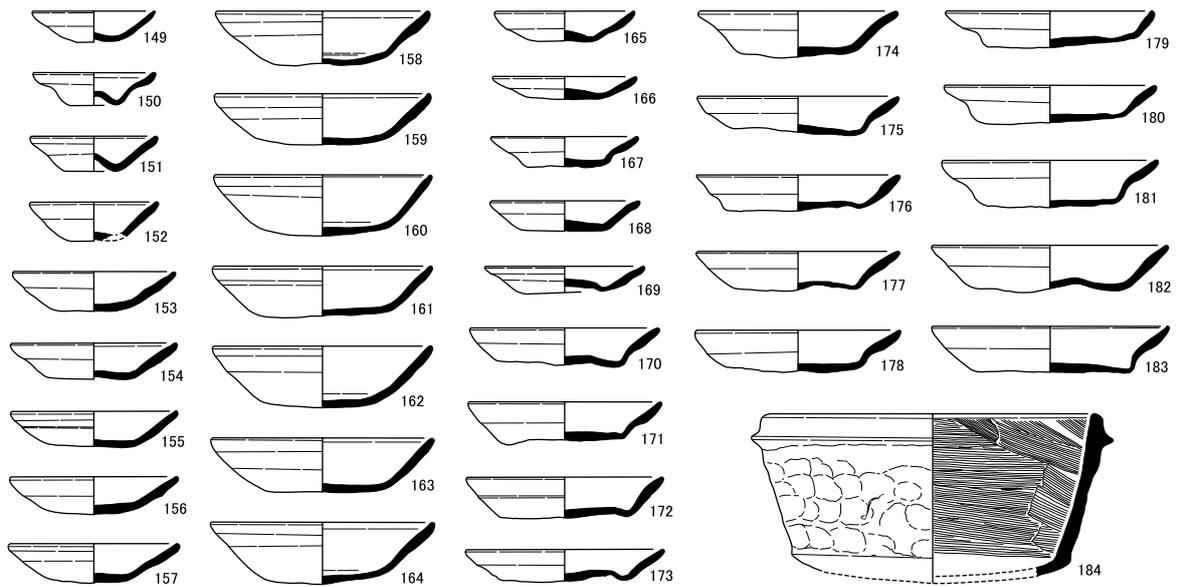


图32 土坑560·80·85出土土器实测图(1:4)

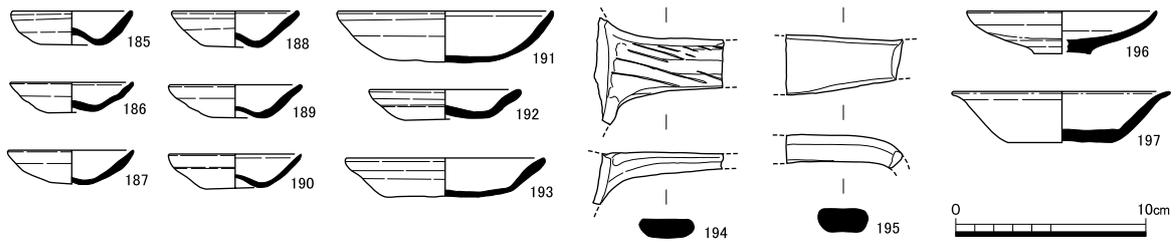


図33 地下室574出土土器実測図（1：4）

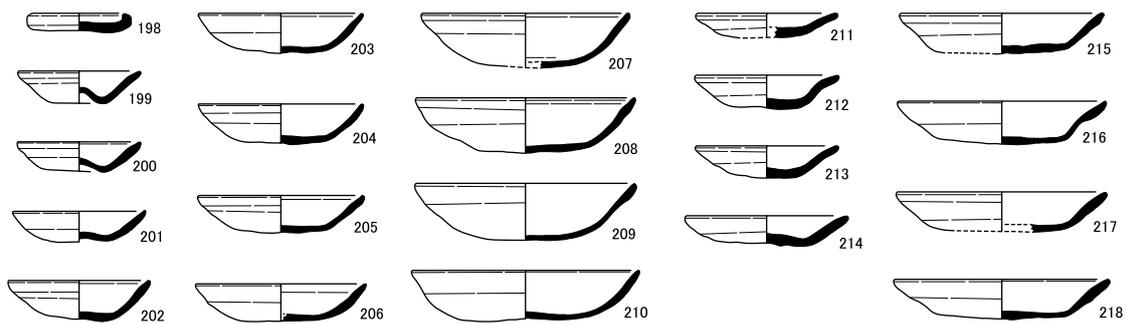
器皿小である。口径8.6～9.0cmである。158～164は白色系皿大である。口径は11.3～11.8cmである。165～183は赤色系土師器皿で、口径7.4～8.4cmの小と口径10～12.5cmの大がある。口縁が外反し、底と胴部立ち上がり部が薄い。時期は京都Ⅷ期である。184は胴部上方に鏝を巡らす瓦器羽釜である。口径17cm、復元高9cmである。鏝部断面は三角形で突起は小さい。胴部はやや上に開く。底は平らに作り、胴部と底との接合点に括れが付く。底部に圧痕があり、その上に煤が付着する。内面は横方向のハケメもしくはカキメを施し、外面は指によるオサエとナデによる調整を施す。内面と外面の鏝下まで炭素が吸着する。京都産か。

地下室574出土土器（図33） 185～190は径6.4～7.0cmの白色系土師器へそ皿である。191は径11.5cmの白色系土師器皿大である。192は口径8.0cmの赤色系土師器皿小である。193は口径10.5cmの赤色系土師器皿大で、京都Ⅷ期に属す。地下室の中では一番新しい。194と195は瓦器銚子の把手である。194の把手上面に斜め方向のカキメを施す。196は径10.5cm、高さ2.4cmの平底高台の輸入白磁皿である。口縁部が立ち上がる。釉は灰色。胎土はやや薄い灰色である。197は径11.5cm、高さ2.9cmの口禿の輸入白磁皿である。端部が外反する。無高台平底で釉は灰色。胎土はやや薄い灰色である。

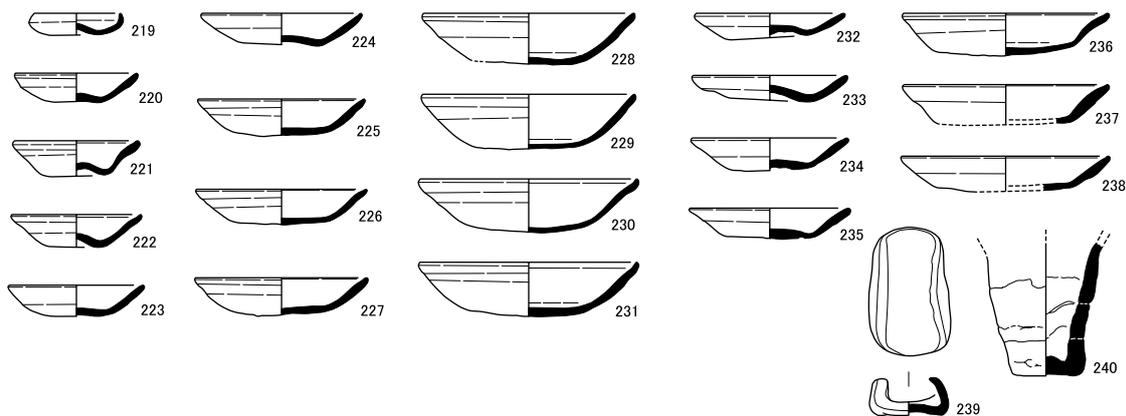
地下室581出土土器（図34～36、図版12・13） 罹災した地下室581からは多量の土器が出土した。火災層下に形成された火災前の堆積層を、地下室北西隅部床面直上で出土した赤色系土師器を主体とする土師器群と、その上に形成された常滑の甕が破棄された面までの堆積層から出土した遺物を最下層遺物として取り上げた。その上に堆積した火災で廃絶するまでに堆積した層から出土したものを下層遺物とした。火災後の火災処理層と考える埋土は上下2層に分けて取り上げた。最上層は地下室内にレンズ状に堆積しており土坑577として取り上げた。また、土坑577下の火災層直上までの堆積層を地下室581上層として取り上げた。なお、火災層より上の埋土は焼土を多く含み、遺物も罹災によって変色しているものが多い。なお、地下室581の全ての層から酒器である瓦器銚子と瓦器杯²⁾などが出土している。

最初に火災後最上層（土坑577）出土土師器（198～218）から見ていく。198は白色系土師器の口径5.5cmのコースター型皿である。199～202は径6.4～7.5cmの白色系土師器へそ皿である。口径の大きいものほどその突起が小さくなる傾向がある。203～206は口径8.7～9.0cmの白色系土師器皿小である。207～210は口径11.0～12.0cmの白色系土師器皿大である。211～214は口径7.5～8.6cmの赤色系土師器皿小である。215～218は口径10.8～11.4cmの体部立ち上がり部が薄い赤色系土師器皿大である。時期は京都Ⅶ期新段階に属する。

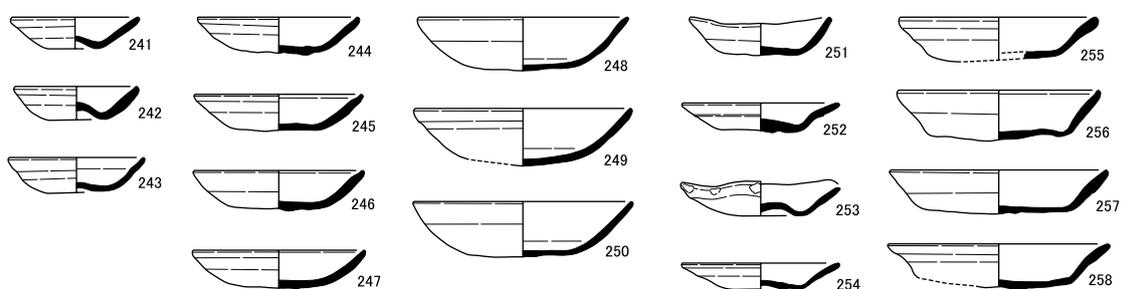
最上層



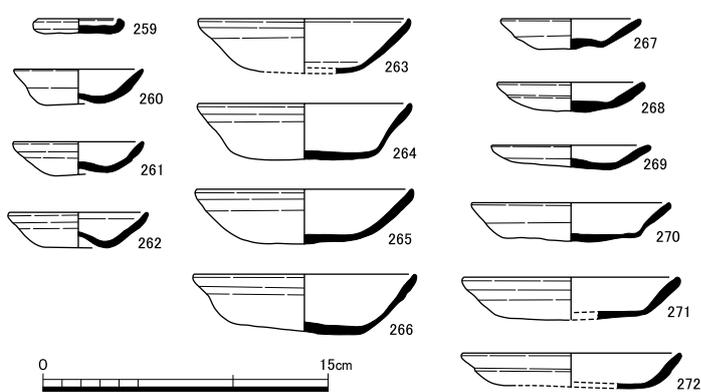
上層



下層



最下層



床直上

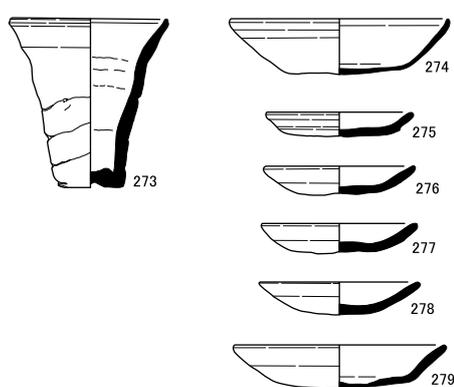


图34 地下室581出土土器实测图1 (1 : 4)

219～240は火災層直上の地下室581上層の土師器群である。219は白色系土師器の口径4.5cmのコースター型皿である。へそ皿と区別が付きにくい特殊な器型で、コースター型の最終段階か。220～223は口径6.5～7.2cmの白色系土師器へそ皿である。へその突起が大きいものと小さいものがある。224～227は口径8.5～9.1cmの白色系土師器皿小である。228～231は口径11.2～11.6cmの白色系土師器皿大である。232～235は口径7.9～8.5cmの赤色系土師器皿小である。236～238は径10.9～11.0cmの赤色系土師器皿大である。その他、特殊な器型に239の耳皿と240の円筒状の土師器がある。239の耳皿は長軸6.8cm、高さ2.0cmで、両端を折り曲げて作る。胎土と焼成・色調からは白色系土師器か。240は上部を欠いているが、地下室最下層で口縁部まで残存する同一の器形273が出土している。口縁部に向けて喇叭状に広がり、内面底に粘土紐を底部から右側に回して巻き上げた痕跡が残る。体部も粘土紐を巻き上げただけの部厚く粗い作りである。にぶい橙色で近世の塩焼き壺の製法に似るが、用途などは不明である。

241～258は地下室581の火災層直下の下層から出土した土師器群である。241～243は径6.8～7.2cmの白色系土師器へそ皿である。244～247は口径8.5～9.1cmの白色系土師器皿小である。248～250は径11.1～11.6cmの白色系土師器皿大である。251～254は口径7.5～8.3cmの赤色系土師器皿小である。形に歪みがあるものが多い。255～258は口径10.5～11.7cmの赤色系土師器皿大である。時期は京都Ⅶ期新段階に属する。

259～272は地下室581の最下層から出土した土師器群である。259は口径4.8cmの白色系土師器コースター型皿である。260～262は口径6.8～7.4cmの白色系土師器へそ皿である。263～266は口径11.2～11.8cmの白色系土師器皿大である。267～269は赤色系土師器皿小で、口径7.4～8.4cmである。270～272は口径10.5～11.6cmの赤色系土師器皿大である。時期は京都Ⅶ期新段階に属する。273は口径8.4cm、高さ8.9cmで、喇叭状に広がる口縁部まで残存する。上層で同形式のものが出土しているが、273は器表が真っ黒に焦げる。瓦器の可能性も残るが土師器として分類した。

274～279は地下室581の北東角で地山の床直上から出土した最も古い土師器群である。赤色系土師器が主で、白色系土師器は274の口径11.6cmの皿大しか計測可能なものはない。赤色系土師器皿は275～278の口径7.8～8.5cmの小と、279の口径11.2cmの大に分類できる。これらの土師器群は京都Ⅶ期中段階まで上がる可能性があり、京都Ⅶ期中段階から新段階と考えたい。

以上によって地下室581の埋土から出土した土師器は、地山床直上の土師器群が京都Ⅶ期中段階に遡る可能性がある他は全て京都Ⅶ期新段階に属し、火災後と火災前とでもほとんど時期差がないことが明らかとなった。京都Ⅶ期新段階の時期幅はほぼ30年で、このことは地下室が成立して程なく火災に遭遇し、京都Ⅶ期新段階までに埋めもどされたことを示唆している。

図35の280～297は地下室581から出土した瓦器銚子である。2つの注ぎ口と端部が下方に曲がる把手がセットで、鍋状の体部口縁は液体が溢れないように内側に返しを付けているのが特徴である。火災層下から出土したものと、火災処理も兼ねて埋め戻された火災層上から出土したものと分けて掲載する。火災層上の遺物はほとんどが火を受けており、表面の炭素が飛んで土師器との区別が付きにくいものも多い。280は最上層から出土した完形の瓦器銚子である。口径13cm、高さは

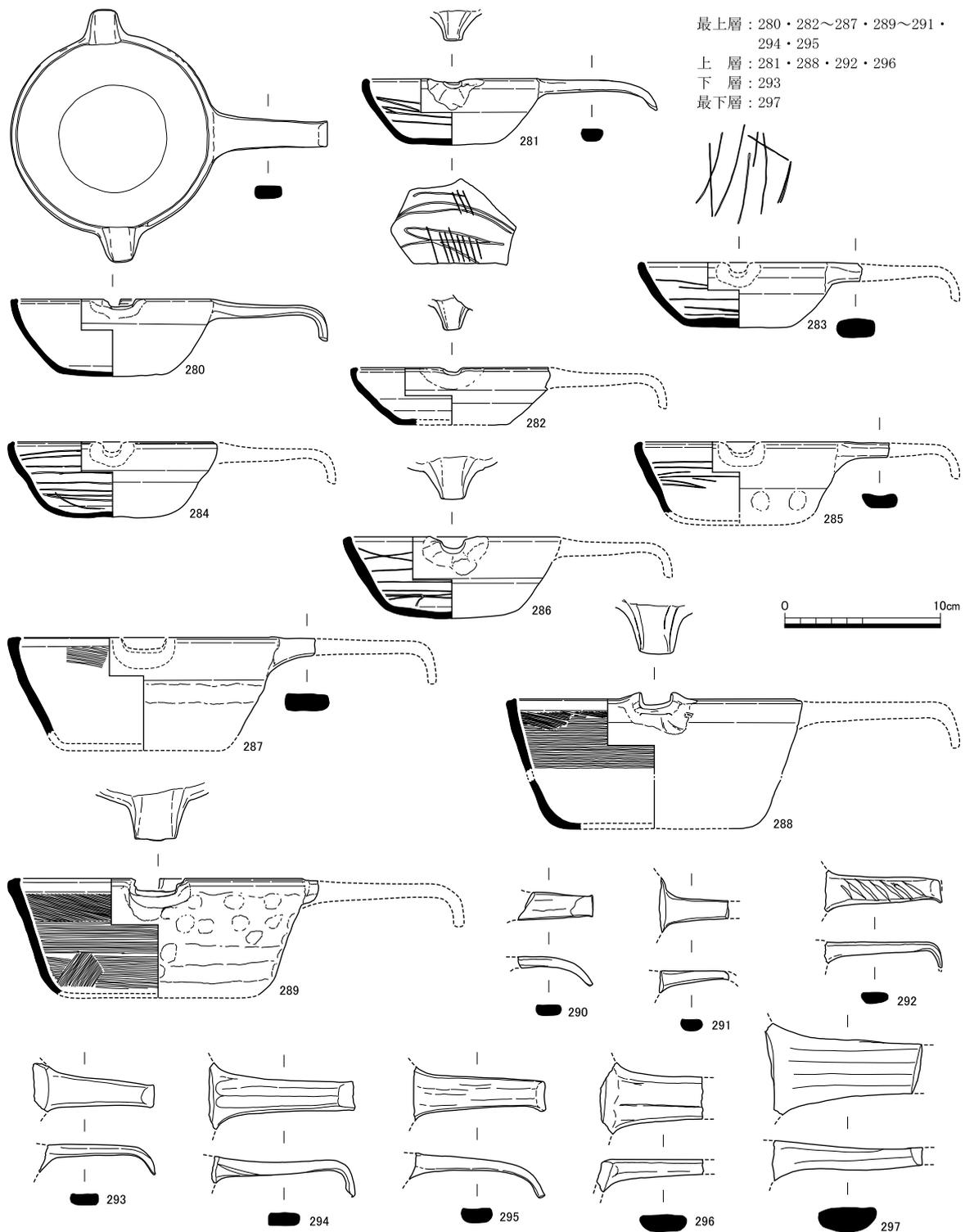


図35 地下室581出土土器実測図2 (1:4)

5 cmである。口縁に2つの注ぎ口を付ける。把手は長さ7.3cmで端部が下に曲がる。この個体は炭素が付着している。他の銚子は大きさは口径11.5～19.3cm、高さは3.7～8.1cmまであり、大と小とに分かれる。小の280・282は内面ナデ調整のみであるが、他の小は内面に粗いミガキがある。大の287～289にはミガキがなく、内面を横方向のナデで調整している。290～297は銚子の把手部分である。短く細いものから長く太いものまで様々である。293が下層、297が最下層から出土して

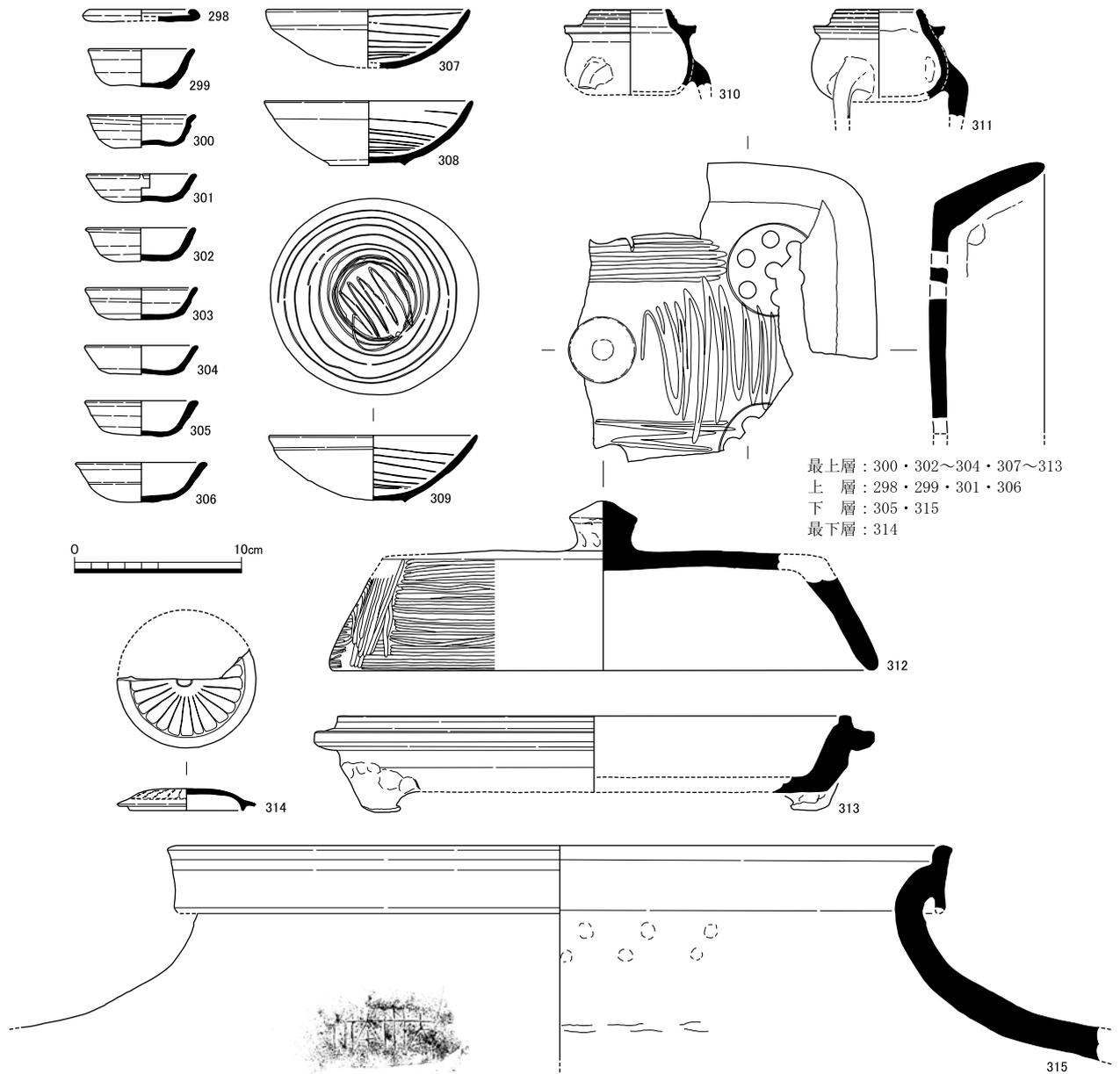


図36 地下室581出土土器実測図3 (1:4)

いるので、火災前から使用されていたと考える。上層出土の292には把手の上面に斜め方向のカキメを施す。『和名類聚抄』に「銚子、佐之奈遍、俗云、佐須奈倍」とあるのが初見で、寺島良安の『和漢三才図絵』では『和名類聚抄』をひいて「銚子有両口及柄、官家醋酬必用之、則禮式用長柄銚子」とある。古くは平安時代後期から鎌倉時代にかけて制作されたとされる『鳥獸戯画・甲本』（高山寺蔵）に殿様蛙と兎に担がれた酒甕の後に兎が出土品とよく似た長柄銚子を肩に掛けて行進している様が描かれている。銚子は中世の絵巻物の酒宴・祭事場面に多く描かれているが、土器製か金属製か漆器か不明な場合が多い。瓦器製の銚子は中世の京内からも散在して出土しているが、これだけまとまって出土したのは京内では初めてである。銚子は本来液体を温める器具であり、金属製から漆器に移行したとされているが、『和漢三才図絵』では「佐須奈倍」を「さしなべ」と読んでおり、今日の両口で把手の付く行平鍋と類似する。しかし、現在残る神社や冠婚葬祭例では鉄

器で土瓶のような弦のついた片口の^{ひさげ}偏提で酒を熱してから漆器の銚子に入れて各の杯に注ぐのが本式だとされている。また、内面にミガキがあるものから考えて見えることを意識しているものと考えられる。片口の偏提は出土せず、鍋・釜同様の瓦器であることから、瓦器銚子を直接火にかけたことも考えられる。なお、火災によって橙色に変色しているのは最上層から出土した283・285・286・287・289・291と上層から出土した288・292・296で、下層および最下層から出土した293・297の炭素は吸着したままで火災の影響は見られない。

図36は地下室581から出土した銚子以外の瓦器類とその他の器種である。298～306は瓦器小型皿類である。298は最上層から出土した口径7.0cm、高さ0.7cmの瓦器コースター型小皿である。火災によって炭素が飛んでいる可能性が高い。299～306は口径6.4～7.9cm、高さ1.7～2.4cmの瓦器小皿である。ナデで調整するがミガキは皆無である。300・302・303・304は最上層、301・306は上層から出土し、305は下層から出土した。最上層から出土した303と304は炭素が飛んでいる。307～309は最上層から出土した瓦器椀である。口径は12.2～12.6cm、高さは3.6～4.5cmを測る。307には高台がない。全体に炭素が付着し内面に粗いミガキを施す。310と311は最上層から出土した瓦器小型三足羽釜である。いずれも底部と脚部を欠いている。310の内法口径は4.9cmで、311の内法口径は5.2cmである。鏝上の内傾する肩に三段の凹凸を巡らし、肩部が長いのが特徴的である。311は橙色に変色している。312・313は最上層から出土した瓦器手焙りである。蓋（312）は長軸32.9cm、短軸約22.0cmの横長方形で中心上に宝珠つまみが付く。上面四方隅に径5.5cmの円を描き、その中に7つの円形穴を穿っている。蓋は側面と上面に横方向のミガキを施す。身（313）は長軸33.6cm、短軸は欠落のため不明であるが、蓋に合わせた横長方形で、端部に蓋の受け口を設ける。四隅に四脚の足がつく。炭素が飛んで淡黄色に変色している。314は最下層上面で出土した径8.3cm、高さ1.5cmの輸入青白磁合子蓋である。表に型押し菊花文、裏に身を受ける返りを付ける。返り部分を除いて全釉である。315は最下層上面で出土した口径約47cmの常滑甕である。端部をT字状に作る。胴部に刻み目の入ったタタキの痕跡がある。この個体の他に内面が黒くくすんだ破片が多くあることから、少なくとも2個体分はあると考える。

地下室594出土土器（図37、図版13） 316・317は瓦器小型皿である。316は口径6.6cm、高さ

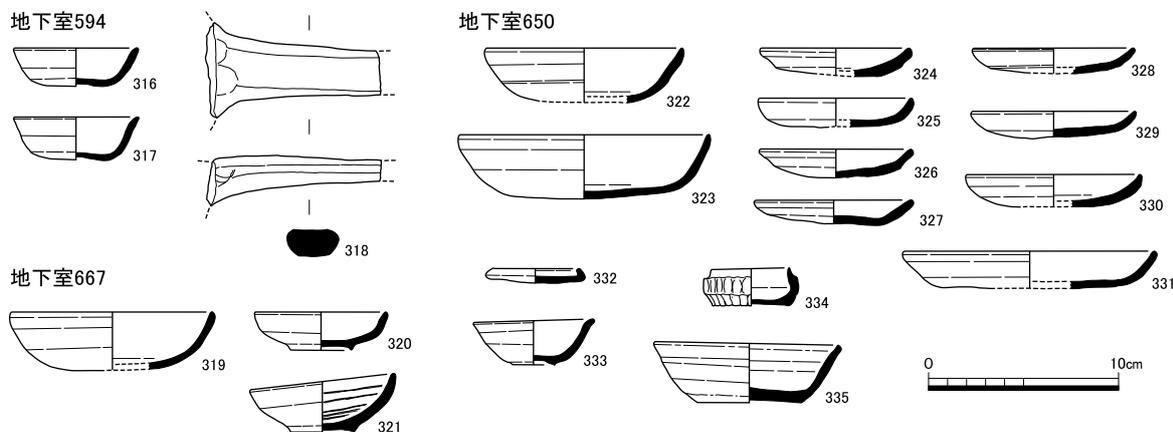


図37 地下室594・667・650出土土器実測図（1：4）

2.0cmである。317は口径6.6cm、高さ2.3cmである。ナデ調整でミガキはない。318は瓦器銚子の把手である。罹災した焼土が底に溜まっていたので地下室581と同時代の可能性がある。

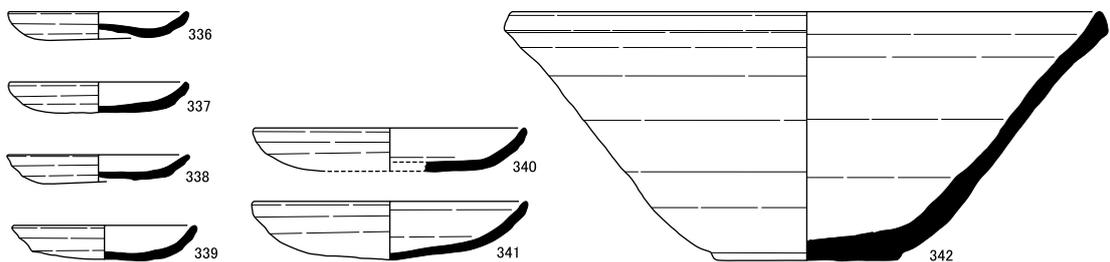
地下室667出土土器（図37） 319は白色系土師器皿大である。口径は10.8cmである。320・321は瓦器小型皿である。両者共に逆三角形の小さな高台が付く。320は口径7.0cm、高さ3.2cmで、口縁部が腰から立ち上がる。ミガキの痕跡はなくナデ調整である。321は口径7.7cm、高さ約3.3cmであるが、歪みが大きい。内面に粗いミガキの痕跡が認められる。

地下室667からは常滑の体部などが出土しているが、実測可能なものはない。切り合いから京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属す地下室650より新しく、京都Ⅷ期古段階の地下室574より古いと考えている。

地下室650出土土器（図37、図版13） 322は口径10.5cmの白色系土師器皿中である。323は口径13.0cmの白色系土師器皿大である。324～330は径8.0～9.3cmの赤色系土師器皿小である。331は口径12.0cmの赤色系土師器皿大である。京都Ⅵ期新段階からⅦ期古段階に属す。今回の地下室群では最も古いと考える。332は瓦器コースター型小皿である。ナデ調整でミガキの痕跡はない。口径5.2cm、高さ0.8cmを測る。333は瓦器小皿で逆三角形の高台が付く。口径6.4cm、高さ2.4cmを測る。口縁部がやや外反する。近代以降の猪口と形が似ている。334は口径4.1cm、高さ2.0cmの輸入青白磁合子身である。腰から底までと蓋合わせ口の部分は釉薬を掛けない。335は口径10.0cm、高さ3.1cmの口禿・平底の輸入白磁皿である。釉は灰色。胎土はやや薄い灰色である。露胎部分は茶褐色を呈している。

土坑123出土土器（図38、図版13） 土師器皿は大小に分かれる。色調はやや白い橙色である。小の336～339は口径9.4～9.7cmを測る。口縁部を1段のナデで作る。大の340・341は口径14.5cmと14.5cmの皿（杯）である。口縁を2段のナデで作り、端部を少し立ち上げる。時期は平安京Ⅴ期新段階に属す。342は東播系須恵質の捏鉢である。平高台で、口径32.7cm、高さ13.2cmを測る。胎土は粗く、色調は灰色である。内面は滑らかで使い込まれている。

土坑123



土坑208

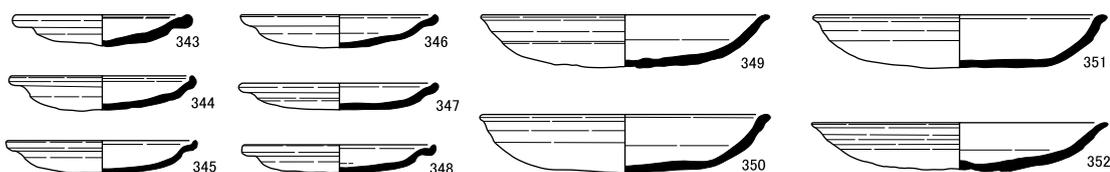
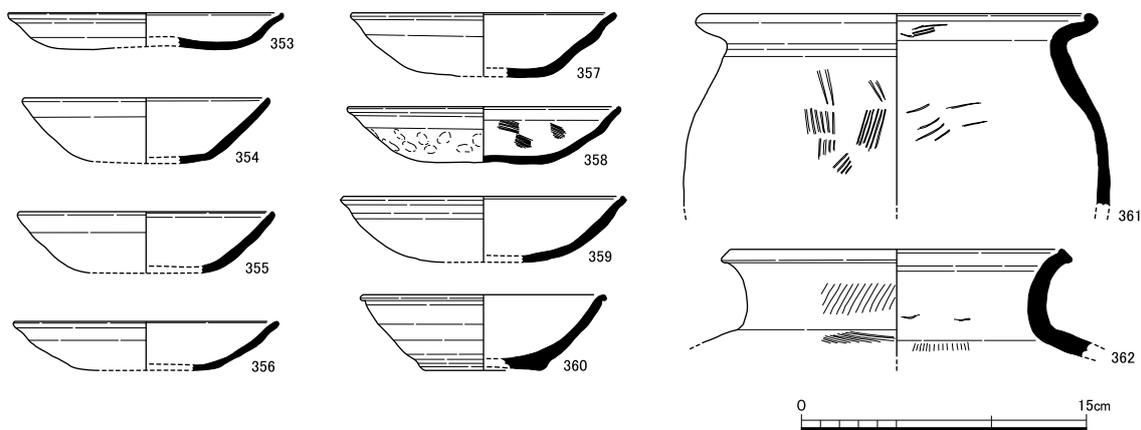


図38 土坑123・208出土土器実測図（1：4）

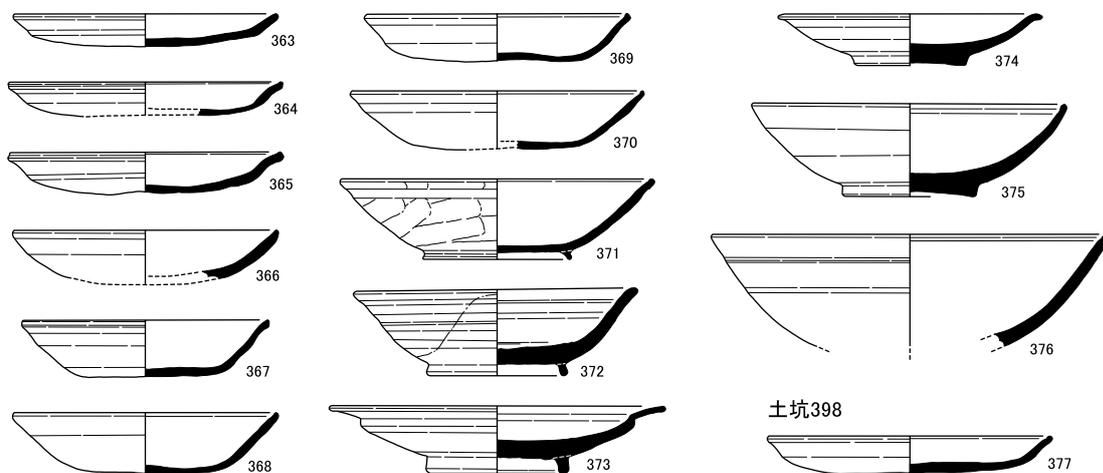
土坑208出土土器（図38、図版13） 土師器皿は大小に分かれる。色調は白っぽい橙色である。小の343～348は口径9.4～12.0cmの土師器皿である。器厚がやや厚く端部を「て」の字状に作る。大の349～352は口径14.9～15.4cmの皿（杯）である。口縁を2段に作り、端部をやや外反させている。時期は平安京Ⅳ期中段階に属す。

土坑405出土土器（図39） 353は土師器皿である。口径14.5cmで、ナデによって外反させて端部をつまみ上げて作る。胎土は密で雲母が多く混入している。焼成は良好で器表は赤っぽい。355～358は土師器碗で、口径13.0～14.4cmを測る。ナデによって外反させて端部をつまみ上げて作る。胎土は密で雲母が混入している。焼成は良好で器表は赤っぽい。359は土師器杯で、口径15.0cmを測る。時期は平安京Ⅱ期古段階である。360は緑釉陶器碗である。口径13.0cm、高さ4.0cmを測る。胎土はクリーム色である。高台を平底にし、端部を外反させて玉縁状にする。体部は内面外面ともミガキを施す。釉は淡い黄緑色で、高台裏まで釉を施す。洛北産。361は土師器甕である。口径21.2cm。口縁部は急激に外反させ端部を上に戻して突起を作る。体部外面に条線紋タタキが残る。362は須恵器甕。胎土は茶褐色で焼成が甘い。外反させて端部内側をつまみ上げ、斜めの端面を作る。頸部と胴部に斜線状のタタキの痕跡が残る。内面に斜線状のオサエ工具の跡が残る。時期は9世紀前半代（平安京Ⅱ期古段階）である。

土坑405



土坑671



土坑398



図39 土坑405・671・398出土土器実測図（1：4）

土坑671出土土器（図39、図版13） 363～365は土師器皿である。口径14.0～14.5cmを測る。366～369は土師器椀で、口径13.0～14.5cmである。370は土師器杯で口径15.5cmである。371は口径16.6cm、高さ4.3cmの高台付土師器杯で、体部外面をケズリによって調整している。胎土に雲母が少量混じり、他の土師器より赤みが強い。372は灰釉陶器椀である。口径15.0cm、高さ4.6cmを測る。釉は高台部を除く全体に掛かるが、自然釉の可能性が高い。重ね焼きの際に最上部に置かれたものと思われる。高台は断面台形の貼り付け輪高台である。373は灰釉陶器段皿である。口径17.7cm、高さ3.6cmを測る。内面に重ね焼きの際の高台跡が残る。釉が口縁部に掛かるが、自然釉の可能性が高い。高台は断面台形の貼り付け輪高台である。372・373は猿投付近で生産されたものか、やや粗い作りである。374は緑釉陶器皿である。口縁12.9cm、高さ2.7cmを測る。やや内弯する平高台で、高台を削り出して作る。375・376は緑釉陶器椀である。375は口径16.4cm、高さ4.9cmである。削り出して作られた高台は平高台で、高台裏がやや内弯している。376は口径21cmを測るが高台部が欠けている。体部は両面にミガキ、胎土・焼成・調整・釉調ともに洛北産で、土坑405の緑釉陶器群と同じである。時期は平安京Ⅱ期古段階に属す。

土坑398出土土器（図39） 377は土坑398に1枚だけ伏せて置かれていた口径14.9cmの土師器皿（杯）である。色調はやや白い橙色である。時期は平安京Ⅱ期古段階に属する。

溝698出土土器（図40） 378は甕。口縁端部を内上方へつまみ上げる。胴部は刷毛調整で中に刺突文を施す。

土坑515出土土器（図41・42、図版14・15） 壺、壺蓋、甕、甕蓋、鉢の器種がある。胎土には、多量の石粒や粗砂を含んでいる。遺物の保存状態が悪く、調整は不鮮明なものが多い。382・383は広口壺の口縁部。383は口縁部内外面にヨコ方向のヘラミガキを施す。386・387・389は大型の広口壺。386・387は頸部が太く大きく、胴部との区分が不鮮明である。386は器体成形段階の段差の痕跡をわずかに留めている。口縁端部および内面の一部に朱の痕跡が認められる。387は口縁端部に1条のヘラ描き沈線をめぐらし、頸部に1条の削り出し凸帯をめぐらす。386・389は内外面ヨコ方向のヘラミガキを施す。口頸部ヨコ方向、胴部タテ、斜め方向のヘラミガキを施す。390は壺体部に重弧文とみられるヘラによる線が描かれている。379は低い笠形を呈し、乳頭状のつまみが付く壺蓋。周縁に2孔1対の孔を2箇所につ。内外面ヘラミガキ。380・381は笠状を呈する甕蓋。381はつまみ部がわずかに環状に凹む。内外面ヘラミガキを施す。384・385は甕。倒鐘形の体部を呈し、口縁部は如意形口縁である。端部に2個1対の刻み目を施す。385は口縁端部に刻み目を施し、口縁部下に2条のヘラ描き沈線をめぐらし、沈線間に刺突文を施す。388は大型の甕。口縁端部に刻み目を施す。成形時の段の痕跡を残す。391～407は底部。ヘラミガキ調整が認められるものを壺（391・394・396・397・399・402・403・406）とした。他は甕、鉢とした。399は底部にかすかに木葉痕が認められる。407は土製紡錘車。径2.6cm、厚さ0.8cm、孔径0.6

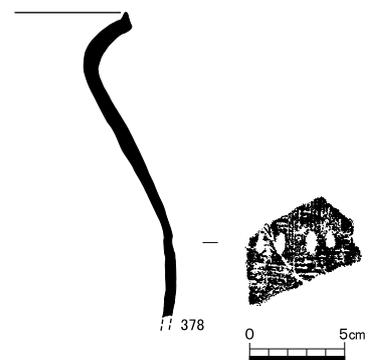


図40 溝698出土土器実測図
(1:4)

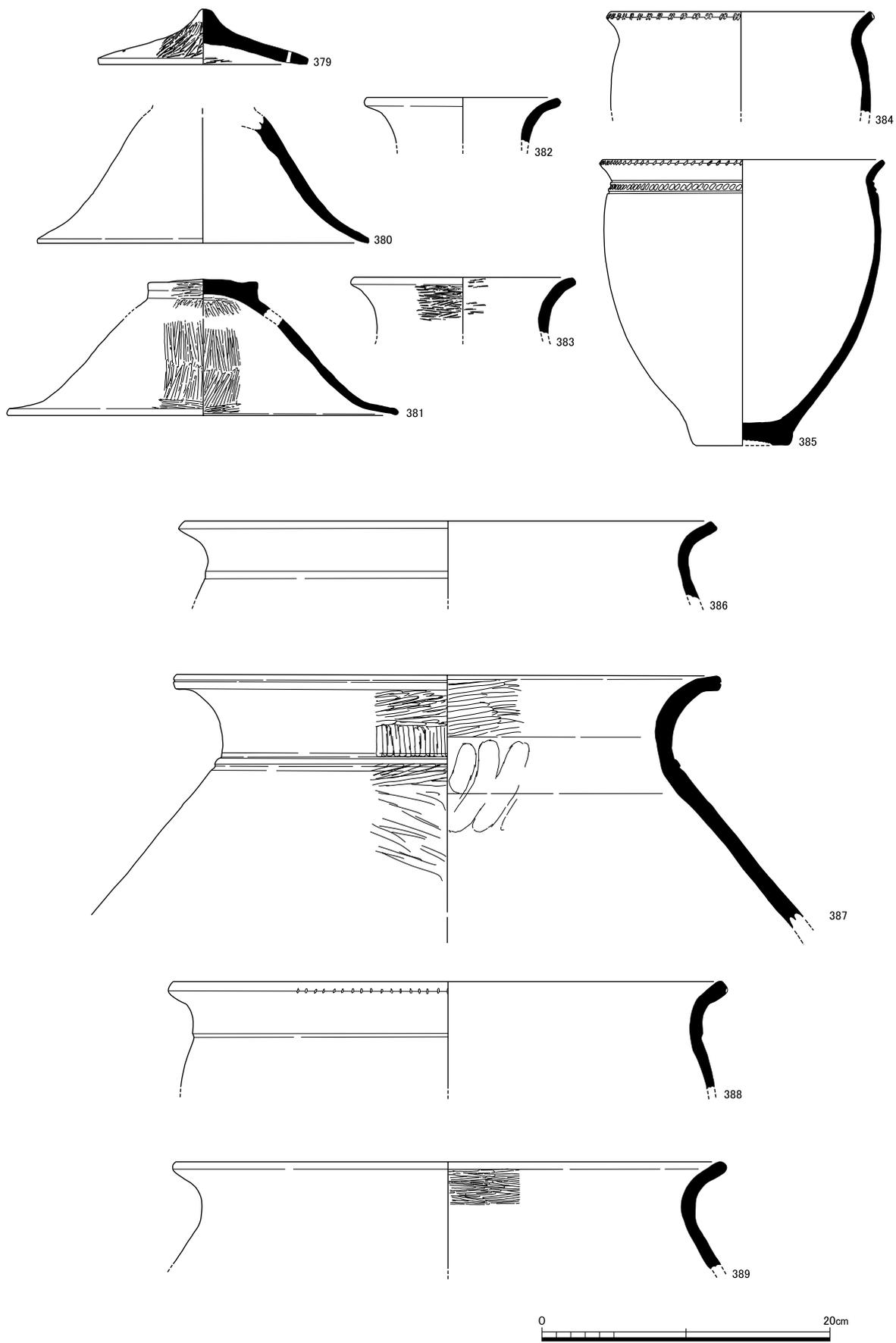


图41 土坑515出土土器实测图1 (1:4)

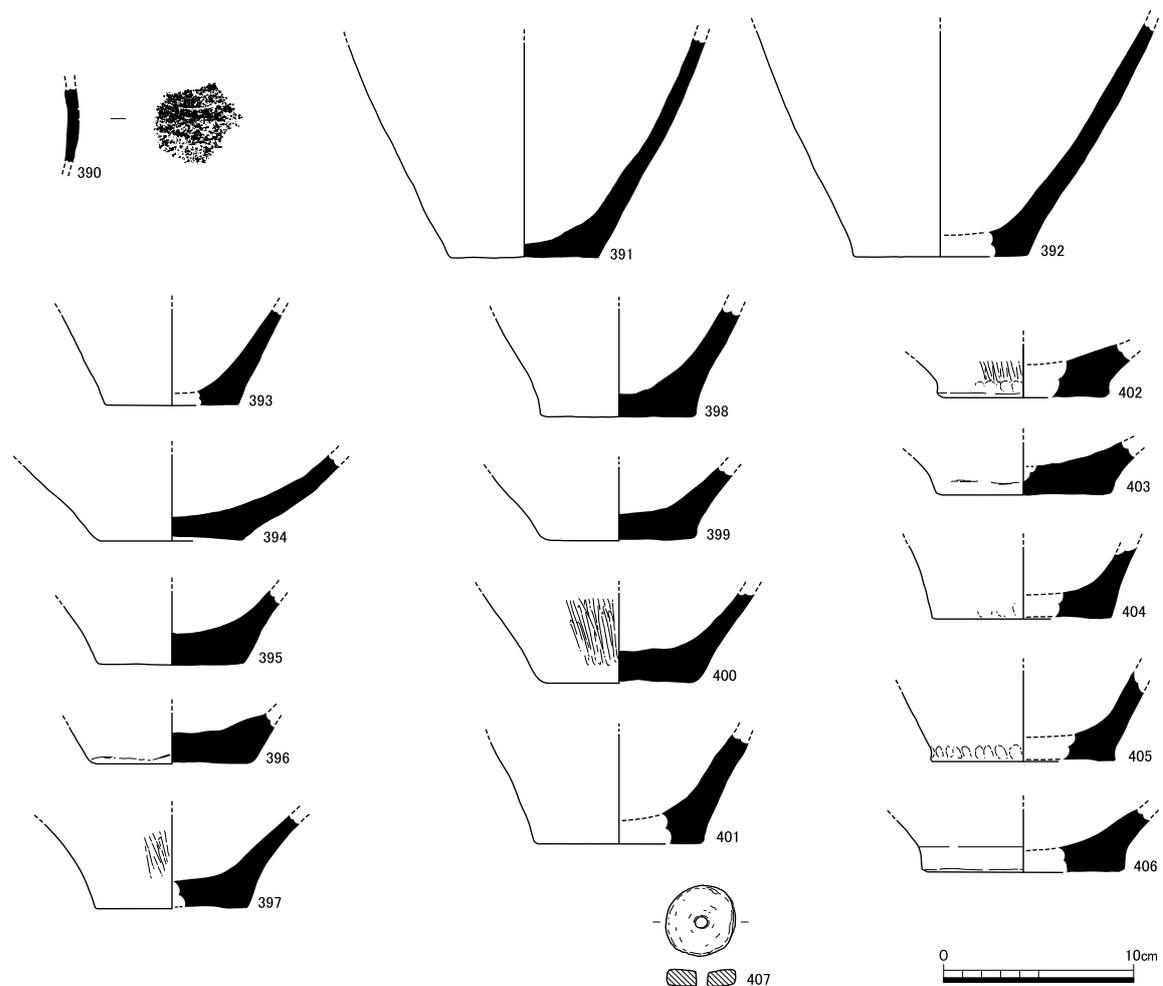


図42 土坑515出土土器実測図2 (1 : 4)

cmを測る。

土坑693出土遺物(図43、図版16) 壺、壺蓋、甕、鉢の器種がある。胎土は土坑515と同様である。414は広口壺の口縁部である。口縁部界に成形段階の粘土帯の接合段差がわずかに認められる。内外面ヘラミガキ調整。419は大型の広口壺。口縁端部に1条のヘラ描き沈線がめぐる。412は、低い笠形の壺蓋。内外面ヘラミガキを施す。415・417は如意形口縁に倒鐘形の体部をもつ甕。415は口縁端部に刻み目を施し、口縁部下2条の沈線文をめぐらす。417は口縁端部に刻み目を施し、口縁部下に2条の沈線文と刺突文をめぐらす。413・416・418は鉢。口縁端部に刻み目を施し、口縁部下に1～2条の沈線文がめぐるもの(413・418)と口縁部は無文で2条の沈線文がめぐるもの416がある。420は口径44cmを超える大型の鉢で、口縁部と体部の界に段の痕跡が残る。内外面ヘラミガキを施す。408・409は甕底部。410・411は壺底部。421は磨製石斧。刃部は欠損している。

土坑515・693出土遺物は壺、甕、鉢、蓋などによって構成されている。広口壺口頸部界に認められる成形段階の段差は顕著ではなく、痕跡をとどめる程度である。広口壺や大型の甕、鉢がある。甕胴部の丸いふくらみも認められない。以上のような要素がみてとれることから、弥生時代前期の中段階に位置付けられよう。

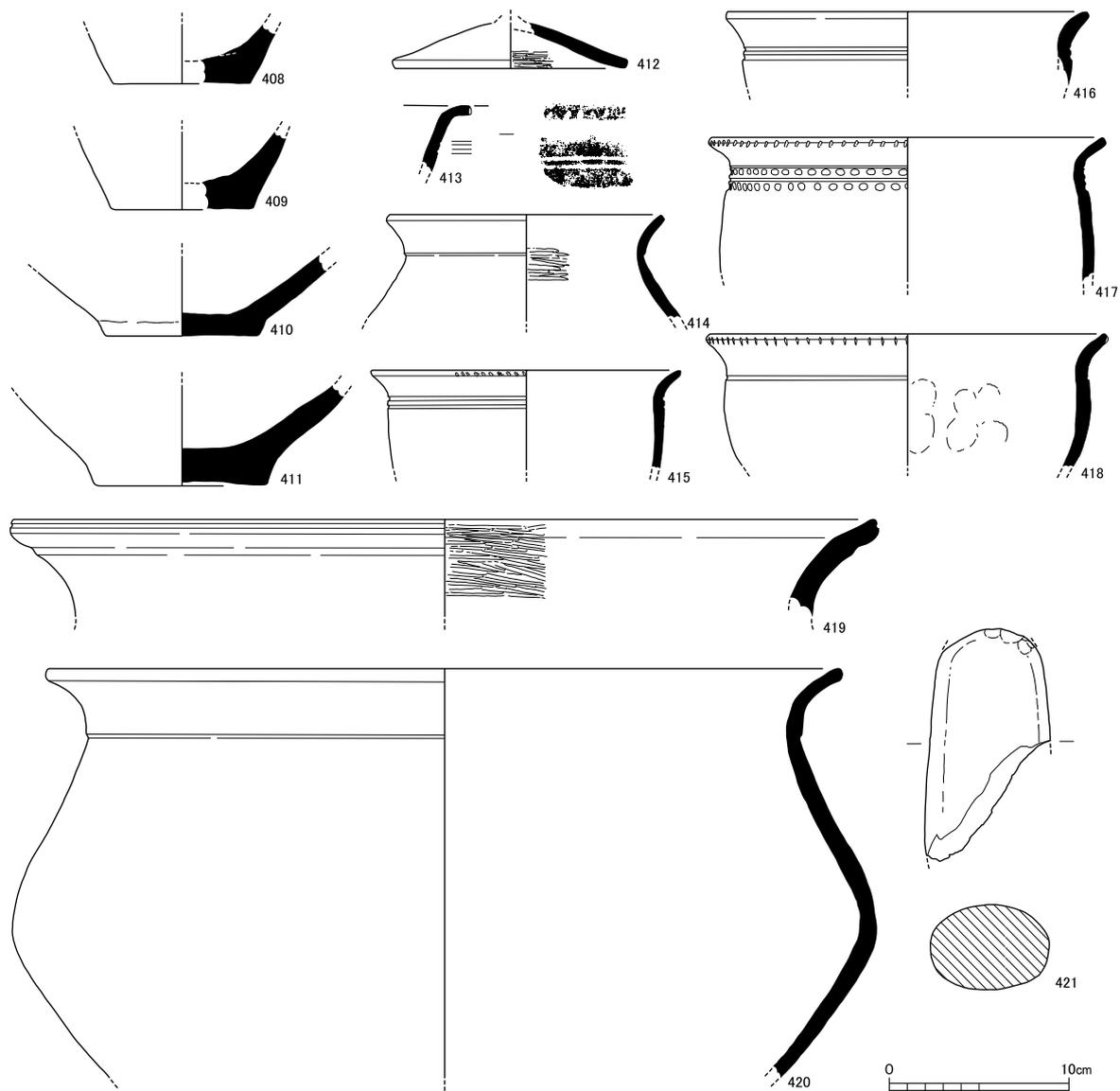


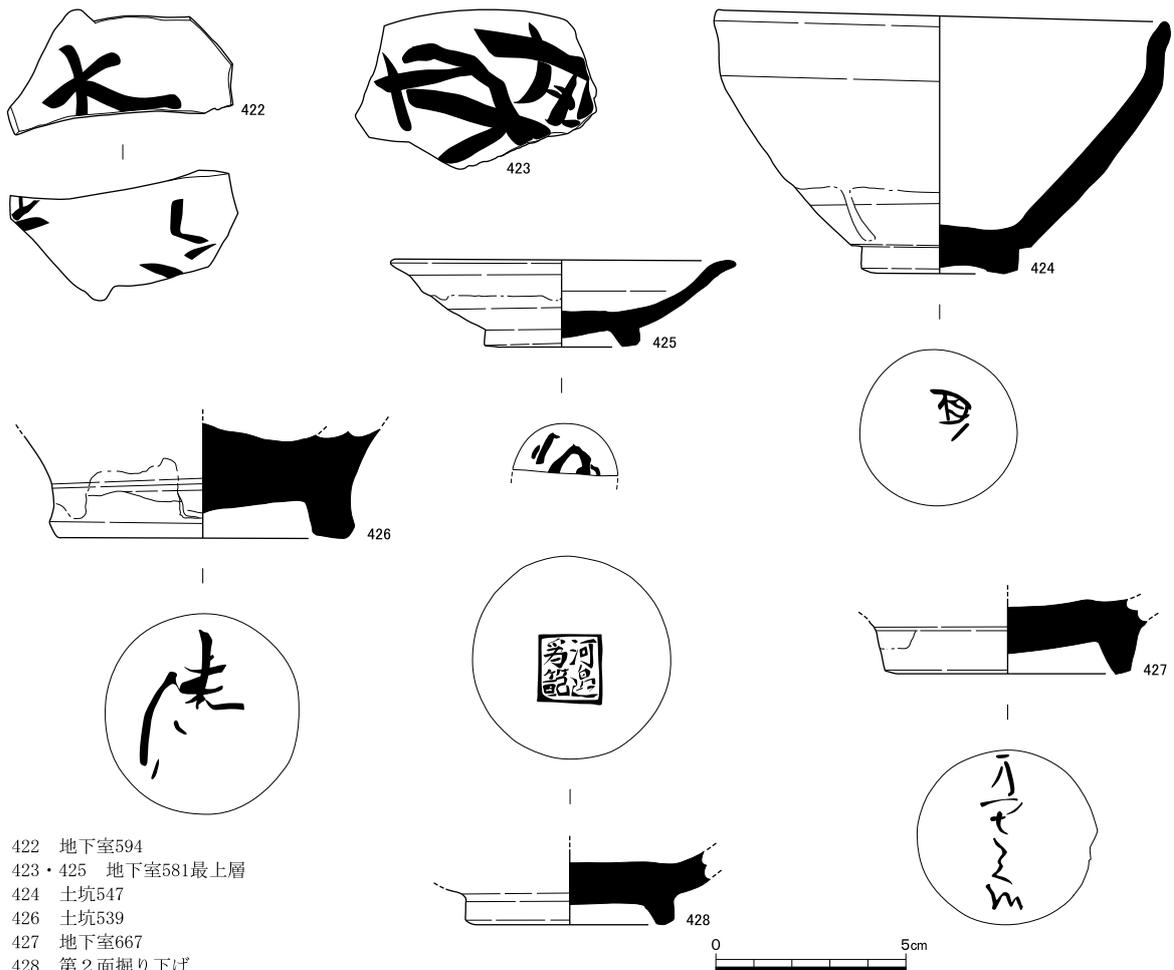
図43 土坑693出土遺物実測図（1：4）

墨書土器類と印刻土器（図44） 墨書土器が出土しているが、土師器皿（422）に「大」の字が読める他は全て読めない。

422は地下室594から出土した。白色系土師器皿大の内面に「大」と墨書されている。裏面にも墨書があるが判別不明。

423は地下室581最上層から出土した。白色系土師器皿大（京都Ⅶ期新段階）の外面にいくつかの字が墨書されている。判別不明で習書か。

424は第2面で検出した京都Ⅸ期の土坑580から出土した輸入天目茶椀である。径11.9cm、高さ6.8cmを測る。口縁は鼈口で内傾化してやや外反する。端部は尖っている。胎土は淡灰色で密である。腰から下の素地表面は淡い橙色である。褐釉の上から黒釉を二重に掛けている。内面の一部と茶溜部に釉薬が点状に剥離した部分があり、一見油滴天目に見える。高台脇を水平に削り高台を作る。高台底は左回りのケズリによる浅い凹みを設ける。高台底に墨書1文字があるが判別不能。



- 422 地下室594
 423・425 地下室581最上層
 424 土坑547
 426 土坑539
 427 地下室667
 428 第2面掘り下げ

図44 墨書土器・印刻土器実測図（1：2）

425は地下室581最上層から出土した径9.0cm、高さ2.3cmの輸入白磁皿である。胎土はやや粗い灰白色である。口縁は外反させ、内面見込み部に重ね焼きのための輪状の釉剥ぎ取りを施す。高台底に墨書1文字があるが判別不能。

426は第1面土坑539から出土した高台径8.2cmの輸入白磁壺底部である。胎土は灰白色で密である。深い高台底に墨書が1文字あるが判別不能。

427は地下室667から出土した高台径6.5cmの輸入白磁椀である。内面見込み部に重ね焼きのための輪状の釉剥ぎ取りを施してある。高台底に墨書がある。仮名であるが判別不明。

428は第2面掘り下げ中に出土した高台径5.5cmの輸入青磁椀である。胎土は灰色で釉は淡い青緑である。内面見込みに「河邊為範」の印刻を施す。中国本土や太宰府などで同タイプの「河濱遺範」の刻印は多く出土しており、故事を記したものとされている。

(3) 瓦類 (図45)

平安時代前期から後期にかけての瓦が出土しているが少量である。

429は土坑405から出土した平安時代前期の唐草文軒平瓦である。胎土は密で、淡灰色である。焼成も硬く、表面には燻し銀の光沢がある。曲線顎であるが顎裏もケズリによって整形している。

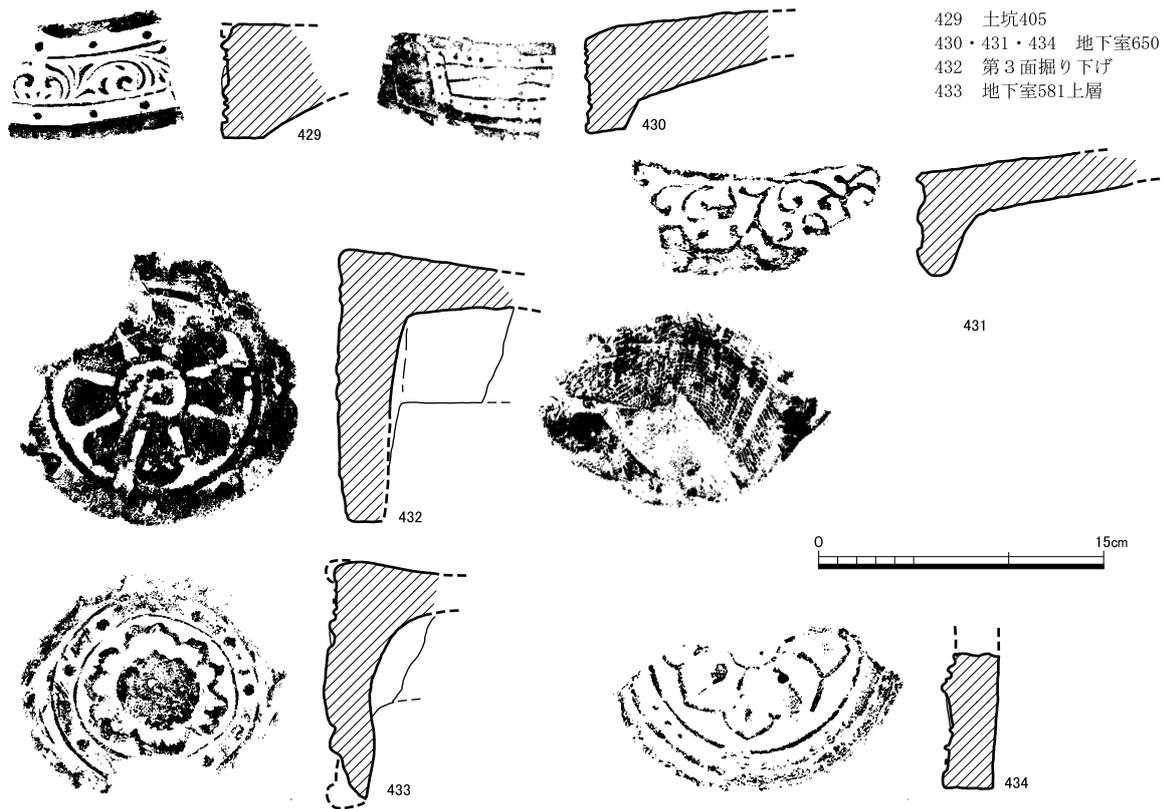


図45 軒瓦拓影・実測図（1：4）

西賀茂角社産か。

430は地下室650埋土から出土した段顎の軒平瓦である。胎土は粗いが焼成は硬い。暗灰色である。退化した唐草文で筈が瓦当部とずれている。時期は11世紀代か。

431は地下室650埋土から出土した折り曲げ技法による唐草文軒平瓦である。胎土は粗く、焼成も甘い。褐色化した灰色である。平安時代後期の山城栗栖野産である。

432は1本作り蓮華文軒丸瓦である。胎土は粗く、焼成も甘い。全体に暗灰色である。瓦当部は不鮮明で、中心飾りの字は読めない。瓦当裏面は粗い布で型を覆っているが布に絞り込みはない。丸瓦部はヘラで瓦当裏まで半裁している。時代は平安時代中期である。

433は地下室581埋土から出土した蓮華文軒丸瓦である。瓦当は楕円形で横幅が膨らんでいる。胎土は密であるが、焼成は甘い。時代は平安時代中期である。

434は地下室650埋土から出土した蓮華文軒丸瓦である。胎土は暗灰色で長石を多く含む。焼成も硬い。蓮華文を陽線で表し、2本の圈線内に3個単位で珠文を巡らす。産地は不明である。

（4）銭貨（図51・52、表3～5）

第1面土坑527から最古銭が「開元通寶」（初鑄621年）から最新銭が後黎の「光順通寶」（初鑄1460年）までの銭、565枚が緋で括られたブロックごとにまとまった状態で出土した³⁾。図50・51は出土した銭の拓影を種類別に並べた。A～Gのアルファベトを付けて各ブロックごとに取り上げた。内訳は7ブロックで、A：95枚、B：62枚、C：91枚、D：97枚、E：97枚、F：88枚、G：35

枚であった。DとEが各97枚で、BとGの合計が97枚であることから、BとGは本来は接合して一本をなしていたものと考えられる。このことから省百法によって縉97枚が百文として通用していたものと考えられる。ただし、重量で計量されていたとすれば腐食して割れた計量不可能な部分を除けば合計が1,818.7 gあり、当時の単位である半貫（五百文=五百匁、江戸時代初期の半貫は1,868 g）に近い。計量貨幣として機能していた可能性が残るが、97枚が百文の単位となっていれば、600文に該当し97枚に満たないものは削平によって失われた可能性が大きい。検出状況から全ての銭が一本の縉で繋げてあったのか、別個の縉銭であったのか不明である。しかし、縉跡の藁は残存しており、単位ごとに結び目を付けて折り曲げて入れた可能性も残る。この土坑直下第2面で1500年直前（京都IX期新段階）の土器溜土坑560を検出したので、16世紀以降から「寛永通寶」が铸造されるまでに埋められた銭である。銭は図50・51にあるように50種出土しており、重量と直径がほぼ揃った精銭ばかりである。詳しくは付章1を参照されたいが、銭の組成も16世紀代とされる全国的規模で編年された埋納銭の出土状況と一致する。

（5）その他の遺物（図46）

ガラス玉（図46） 地下室581埋土から出土した径0.5cm、厚さ0.4cmのガラス玉で、約0.2cmの孔が貫通する。色はやや緑掛かった青色である。表面が磨りガラス状に風化している。重量は0.113 gで、比重が3.53であることから鉛ガラスであることが判明した。用途・製作時期共に不明である。

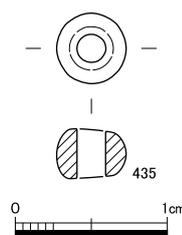


図46 地下室581出土
ガラス玉実測図（2：1）

註

- 1) 土器編年は、小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年を基準とした。
- 2) 酒器に関しては、鈴木則夫『日本の美術・酒器』至文堂 1985年が詳しい。
- 3) 銭に関しては、永井久美男編『中世の出土銭』兵庫埋蔵銭調査会 1994年、永井久美男編『日本出土銭総覧』兵庫埋蔵銭調査会 1996年などを参照した。

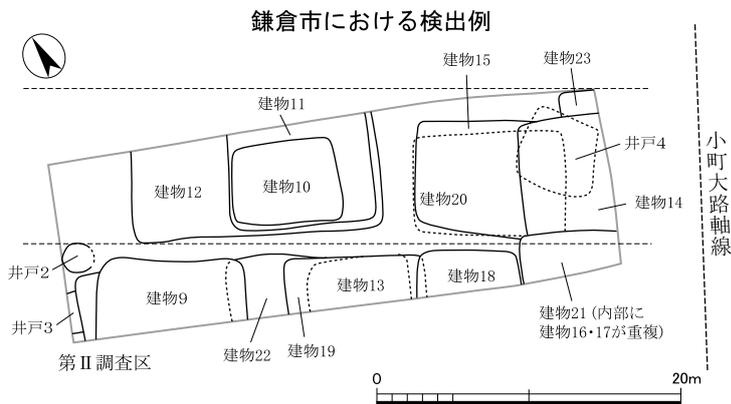
なお、撰銭が頻発する原因に関しては、東 洋一「渡来銭と真土」『研究紀要』第10号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2007年にその一端を述べておいた。

5. まとめ

今回出土した畿内弥生第Ⅰ様式の土器は、京都盆地内では最古の一群と認識され、従来の京都盆地における弥生文化の受容を考える場合重要な手がかりとなる資料である。調査地近辺の地山面は周囲より標高が高く、水はけも良い地勢にある。詳細な検討が必要であるが、当地は京都盆地において弥生時代の村落が最も早く成立した場所の一つであると考えられる。

平安時代については、9世紀後半代の遺構も2基検出したが、10世紀代の遺構・遺物をほとんど検出していないので、その間の状況は不明である。しかし、11世紀代から12世紀初頭（平安京Ⅳ期からⅤ期古段階）にかけて急激に土師器の出土量が増大し、遺構数も多くなる。史料では『本朝世紀』に久安元年（1145）三月十三日「三条町焼亡」（『史料 京都の歴史』第4巻）とあり、この頃町屋群が形成されていたものと思われる。

また、第2面で町小路に面する中世前半の地下室を6基検出したことは大きな成果である²⁾。中世の地下室は、京都におけるこれまでの調査で5基が報告されている。中世地下室の検出例が約500基に達する鎌倉においては、主に物流集散地であった浜辺や庶民居住地域で集中して検出されている。通りに面して直角に仕切られた敷地境に地下室が重複して掘り込まれる鎌倉での地下室の在り方は今回の調査で検出した地下室群と類似している³⁾。



※「小町一丁目333番2地点遺構概念図」（鈴木弘太「中世鎌倉の倉庫」『中世人のたからもの』高志書院、2011年）を一部改変し製図して使用した。

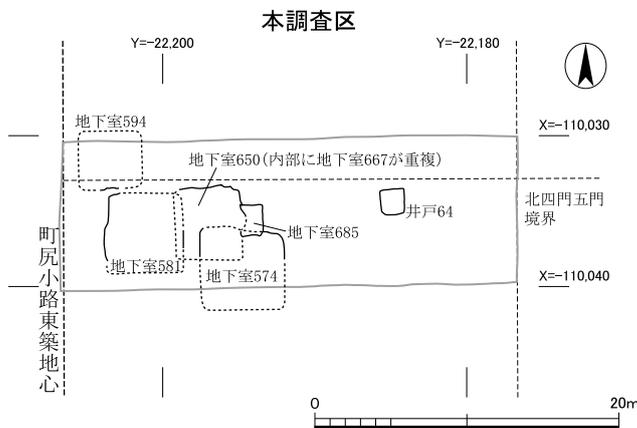


図47 鎌倉・京都地下室列比較概念図（1：500）

今回検出した地下室581は、罹災した炭化部材が良好に残存しており、分厚い羽目板を縦に並べて木組み壁を形成する壁構造であることが判明した。木組み壁裏込めに多量の川原石を入れていることや空間が広く深いのが特徴的で、地下室全面に焼土の他に炭化した構造材と考えられる太い部材が被さっていた。このことから、土台木や棧だけでは壁の荷重を支えることは不可能で、梁や桁で内側に崩れようとする力を構造材で咬まし、現在の土留支保工と同じような内圧で受ける工法であった可能性が高い。また、今回の調査では罹災によって炭化した部材を除いて、有機物である土台

部材などは検出できなかったが、壁際に扁平な石を列状にほぼ同じ高さで並べており、これが土台を形成していたものと思われる。

今回検出した地下室群は出土遺物から鎌倉時代後期（京都VI期）に形成され室町時代前期（京都VIII期）には廃絶していたことが明らかになった。

町小路に面した地下室581と川原石を敷いた地下室594は火災によって廃絶しており、両方の埋土の中から火を受けて表面に付着した炭素が消滅した瓦器銚子が出土している。このことから南北平行に並ぶ両地下室は同時期の火災によって廃絶した可能性がある。この地下室の上屋構造は不明であるが、通りに面していることや、床内側の束石の存在から天井には床が張られていたことが想定できる。

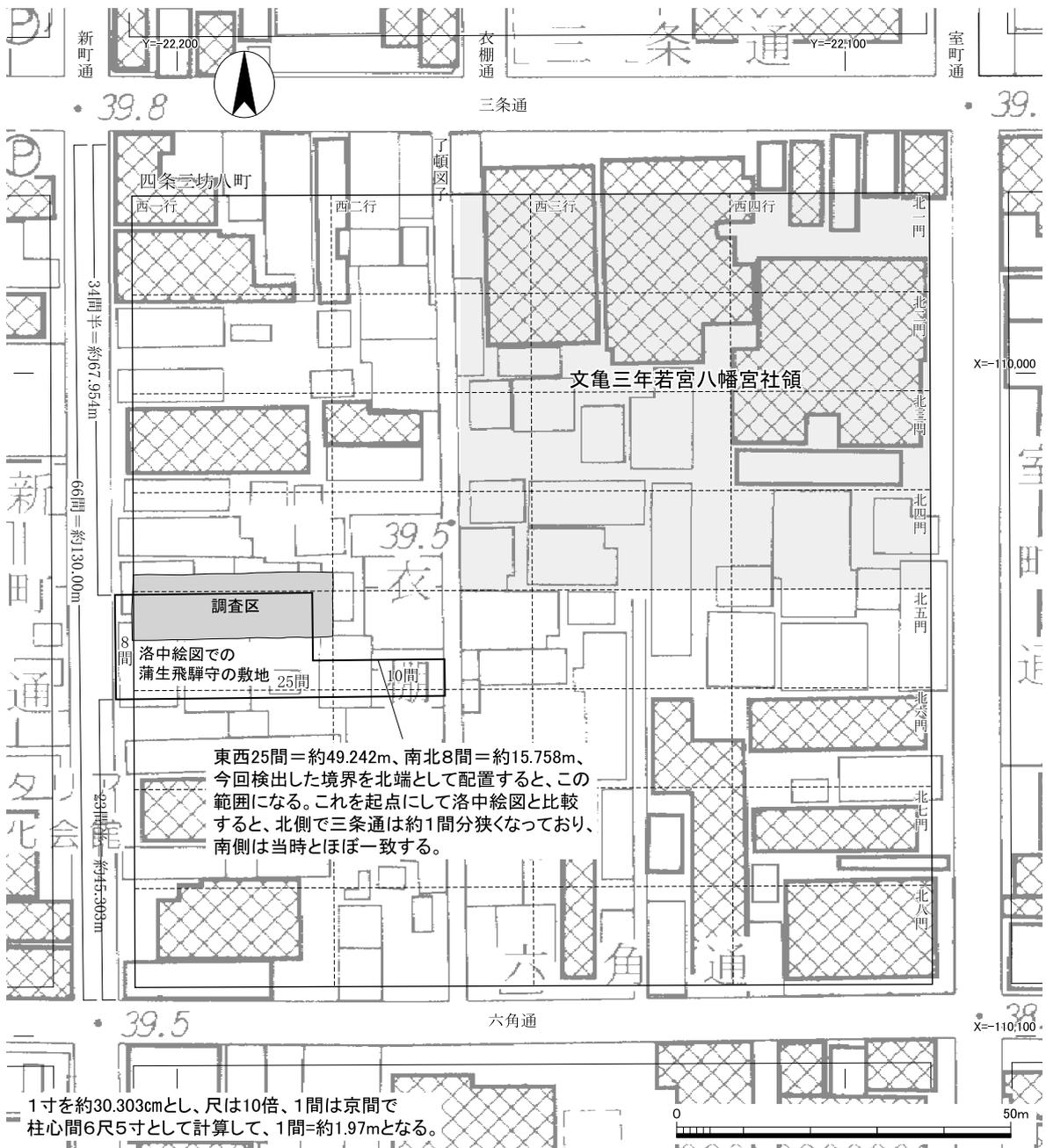


図48 八町四行八門内における位置関係（1：1,000）

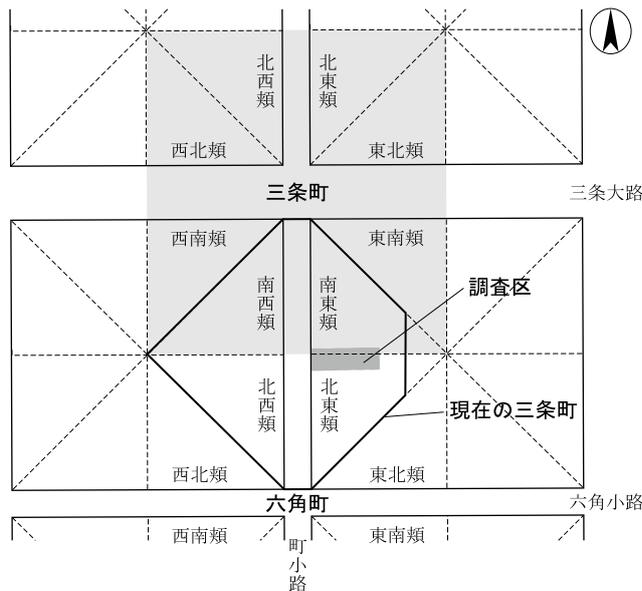


図49 応仁・文明の乱前と現在の三条町比較概念図

地下室581下層上面から少なくとも2個体分の常滑甕破片が破棄された状態で出土した。また、常滑甕破片がほとんどの地下室から出土している。地下室581からは瓦器銚子が30個体以上出土しており、一世帯の持ち物とは考えられない量であることから、酒屋であった可能性もある。しかし、酒屋・土倉分布位置を示す最も古い応永三十三年（1426）『北野神社酒屋交名』（『史料 京都の歴史』第4巻）に調査地に該当する記載はない。また、応仁元年（1467）の『日吉社未日右方御酒一膳神神交名帳』に「古々女 三条町南東類」

（『真乗院文書』『史料 京都の歴史』第4巻）とあるが、三条大路・町小路の交差点を南に下がった東側を示すだけで、正確な場所を特定できない。いずれにせよ今回検出した地下室の廃絶期が14世紀半ばを降らないこともあり文献に記載される酒屋には該当しない。

なお、図47・48で示すように、今回の調査で検出した地下室や溝129などは平安時代の1戸主の班給単位である西一行北四門・北五門敷地境推定線付近を境に掘り分けられており、鎌倉時代に降っても条坊制の地割りを踏襲していた可能性がある⁴⁾。また、三条室町に位置した六条八幡社領はその最後の記録として残る「文亀三年（1503）十月五日」の安堵状に「六条若宮八幡宮領三条室町南西類屋地貳拾五丈室町面貳拾丈（中庇有之）」（『若宮八幡宮文書』京都府立総合資料館蔵の写真帳参照）とあり、南北が四門と五門の境界線から北に二十丈（60m）で丁度半町幅であった。この半町中心ラインはほぼ今回検出した中心ラインの延長線に該当する。また、当初二十七丈であった東西幅が、二十五丈に減少しており、東西は二十五丈（75m）で西端が丁度今日まで残る「了頓図子」東側と一致するので、このときに図子が開かれた可能性がある。寛永十四年『洛中絵図』記載の数値に拠れば図48にあるように蒲生家間口「八間」（約15m76cm）の北端がほぼ地下室の境に一致し、そこから北「三拾四間半」が現在の三条通南端に一致する。また、蒲生家間口南端から南に「二拾三間」がほぼ現在の六角通北端となっており、江戸時代以降は道幅等の変化は少なかったと考えることができる。

なお、付章1で明らかになったように第1面で検出した土坑527出土銭構成が、精銭だけで構成され、全国的に15世紀第3四半期のものを中心に出土していることが判明した。また、付章2の動物遺体の分析によって弥生時代前期に猪を食していたことを発見できたことは大きな成果である。また、12世紀以降、六角町が「六角町生魚供御人」の集住地区であることが明らかになっており、今回検出した魚介類分析結果との関連で興味深い⁵⁾。

調査にあたっては、井上成哉氏（三条町会長）、吉田孝次郎氏（祇園山鉾連合会理事長）、後藤正

雄氏（八幡山保存会会長）のお世話になった。また、高橋昌明氏（神戸大学名誉教授）、鋤柄俊夫氏（同志社大学文化情報学部教授）、井上幸治氏（京都市歴史資料館）のご教示を得た。なお、種麴製造元として京都で唯一残った株式会社菱六研究室の菊島直氏からは麴室や麴菌培養について、および麴菌残存の可能性についての貴重なご意見をいただき、本書に反映させた。記して感謝する次第である。

註

- 1) 『史料 京都の歴史』第4巻 市街・生業 平凡社 1981年
- 2) 地下室に関しては次の文献を参照した。

齋木秀雄「方形堅穴建築址の構造」「庶民の建物・方形堅穴建築址の性格」『よみがえる中世3』平凡社 1989年

馬淵和夫『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社 1994年

『中世都市鎌倉を掘る』日本エディタースクール出版部 1994年

河野真知朗『中世都市鎌倉・遺跡が語る武士の都』講談社 1995年

斉藤研一「描かれた暖簾、看板、そして井戸」『中世人の生活世界』山川出版 1996年

山本雅和「中世京都のクラについて」『研究紀要 第8号』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年

鈴木弘太「中世『堅穴建物』の検討」『日本考古学 第21号』日本考古学協会 2006年

鈴木弘太「中世鎌倉の倉庫」『中世人のたからもの』高志書院 2011年

鋤柄俊夫「館の蔵と都市の蔵」『中世人のたからもの』高志書院 2011年
- 3) 鎌倉で検出される最も一般的な地下室の工法は「堅穴を掘り、内部に木組みを据えて、外周を埋め戻した土圧によって壁を固定し、地下空間を作り出す」（河野真知朗『中世都市鎌倉・遺跡が語る武士の都』講談社 1995年）とされる工法で、地下室581と類似している。また、有機部材の残存状況がよい鎌倉でも「壁周囲の土台木の下にあたる部分に鎌倉石を敷き並べ」（同上）ていることが多いので、それらの石列が壁組の土台木を乗せる台石である可能性がある。地下室の機能については鎌倉では「大きく作られた地下空間なのに居住用の施設（とくに火処）が見当たらないことは、この構築物が一時的に何かを収納しておく『倉庫』としての性格を示しているだろう」（同上）とする見解が一般的である。
- 4) 京都では少なくとも鎌倉時代までは四行八門制が機能していた。例えば五味文彦『体系日本の歴史5 鎌倉と京』（小学館 1988年）によれば鎌倉の「今小路ちかくの御成遺跡は道路にそって庶民の小屋とみられる生活遺跡があり、その背後には築地に囲まれた武家屋敷が立地する構造をとっている。こうした住まいかたは、じつは京都にたいへんよく似ている。一例を『古今著聞集』からあげると、『或ひらあした名僧ありけり。地を一戸主もちたりけり。それに人をすえて地子を取り侍けるが、打口一丈あまりに、あるふる尼公をすえたり。』とみえる。鎌倉でも戸主という屋地の丈量の単位が導入されており、一戸主とは、口五丈（約15メートル）、奥十丈のことである。・・鎌倉でも戸主を単位に宅地を班給されていた御家人や僧が、庶民に道ぞいの地を貸していた」とされる。鎌倉時代前半の京都と鎌倉は博多を除いて中世唯一の都市であり武家法・公家法共に相互に影響し合っていた。鎌倉の都市計画においても若宮大路を朱雀大路に見立て、街区の班給制度も保奉行を置いた行政単位も京都を

模範にしていた。逆に京都も鎌倉幕府成立以降かなりの数の武家が大番役として下京を中心に在京しており、検非違使庁の保奉行を置き共に京都の治安にあたった。六波羅探題を京の東に置き下京の中心に若宮八幡宮を勧進したのも武家政権の対京都政策の現れであろう。

図49は、応仁・文明の乱の前の三条町と現在の両側町としての三条町との比較概念図である。この図では了頓図子開通の問題は別考を必要とするので省いてある。

なお、京都における武家の守護神としての「若宮八幡宮」の所領が下京に集中していたことは大村拓生「六条八幡領からみた室町期京都」（『中世京都首都論』吉川弘文館 2006年）が詳しい。

- 5) 豊田 武『座の研究』吉川弘文館 1982年など参照

付章1 出土銭貨について

竜子正彦

(1) はじめに

今回出土した銭貨は、一括で出土したものと個別分散して出土したものがある。一括で出土した銭貨の埋納方法は不明だが、緡を刺した状態で検出していたものを、A～Fの7分割として取り上げた。個別分散していたものはそれぞれの場所
で取り上げた。点数は一括出土銭については565枚、個別出土銭は139枚。銭種は判明しているもので一括出土銭は50種、個別出土銭は29種（輪銭を含む）である。

表3 土坑527出土銭比率表

銭種	初鑄	西暦(年)	個数	比率(%)
開元通寶	唐 武徳4年	621	46	8.1%
貞元重寶	唐 貞元2年	759	1	0.2%
宋通元寶	北宋 建隆元年	960	2	0.4%
太平通寶	北宋 太平興國元年	976	4	0.7%
淳化元寶	北宋 淳化元年	990	5	0.9%
至道元寶	北宋 至道元年	995	13	2.3%
咸平元寶	北宋 咸平元年	998	22	3.9%
景德元寶	北宋 景德元年	1004	24	4.2%
祥符元寶	北宋 大中祥符元年	1009	66	11.7%
祥符通寶	北宋 大中祥符元年	1009	62	11.0%
天禧通寶	北宋 天禧元年	1017	29	5.1%
天聖元寶	北宋 天聖元年	1023	22	3.9%
明道元寶	北宋 明道元年	1032	3	0.5%
景祐元寶	北宋 景祐元年	1034	1	0.2%
皇宋通寶	北宋 寶元元年	1038	28	5.0%
至和元寶	北宋 至和元年	1054	2	0.4%
嘉祐元寶	北宋 嘉祐元年	1056	2	0.4%
嘉祐通寶	北宋 嘉祐元年	1056	3	0.5%
治平元寶	北宋 治平元年	1064	7	1.2%
治平通寶	北宋 治平元年	1064	1	0.2%
熙寧元寶	北宋 熙寧元年	1068	25	4.4%
元豐通寶	北宋 元豐元年	1078	60	10.6%
元祐通寶	北宋 元祐元年	1086	24	4.2%
紹聖元寶	北宋 紹聖元年	1094	11	1.9%
元符通寶	北宋 元符元年	1098	4	0.7%
聖宋元寶	北宋 建中靖國元年	1101	6	1.1%
大觀通寶	北宋 大觀元年	1107	17	3.0%
政和通寶	北宋 政和元年	1111	14	2.5%
宣和通寶	北宋 宣和元年	1119	4	0.7%
建炎通寶	南宋 建炎元年	1127	1	0.2%
淳熙元寶	南宋 淳熙元年	1174	2	0.4%
紹熙元寶	南宋 紹熙元年	1190	3	0.5%
慶元通寶	南宋 慶元元年	1195	1	0.2%
嘉泰通寶	南宋 嘉泰元年	1201	1	0.2%
開禧通寶	南宋 開禧元年	1205	1	0.2%
嘉定通寶	南宋 嘉定元年	1208	4	0.7%
紹定通寶	南宋 紹定元年	1228	2	0.4%
端平元寶	南宋 端平元年	1234	1	0.2%
皇宋元寶	南宋 寶祐元年	1253	2	0.4%
景定元寶	南宋 景定元年	1260	1	0.2%
咸淳元寶	南宋 咸淳元年	1265	1	0.2%
正隆元寶	金 正隆2年	1157	4	0.7%
大定通寶	金 大定18年	1178	5	0.9%
大中通寶	明 至正21年	1361	1	0.2%
洪武通寶	明 洪武元年	1368	13	2.3%
永樂通寶	明 永樂6年	1408	3	0.5%
朝鮮通寶	朝鮮	1423	2	0.4%
宣德通寶	明 宣德8年	1433	2	0.4%
紹平通寶	後黎 紹平元年	1434	2	0.4%
光順通寶	後黎 光順元年	1460	1	0.2%
不明	—	—	4	0.7%
總數			565	100%

(2) 一括出土銭 (図50・51、表3・5)

一括出土銭は土坑527から緡銭を折り畳まれるような状態で出土した。一括出土銭の7分割したそれぞれの枚数はA：95枚、B：62枚、C：91枚、D：97枚、E：97枚、F：88枚、G：35枚であった。銭種・銭種ごとの枚数・銭種の割合は表3で、銭一枚ごとの銭種・大きさは表5で示した。

銭種は唐銭2種47個(8.3%)、北宋銭27種461個(81.6%)、南宋銭12種20個(3.5%)、金銭2種9個(1.6%)、明銭4種19個(3.4%)、朝鮮銭1種2個(0.4%)、安南後黎銭2種3個(0.5%)あり、北宋銭が8割以上を占めている。最古銭は唐(621初鑄)の開元通寶で、最新銭は安南後黎(1460初鑄)の光順通寶である。埋納時期については最新銭の光順通寶から15世紀の第3四半期が推定される。

(3) 個別出土銭 (表4・6)

個別出土銭は各種遺構やその他の場所で1箇所から1枚から多くて16枚を取り上げた。銭種・銭種ごとの枚数・銭種の割合は表4で、銭

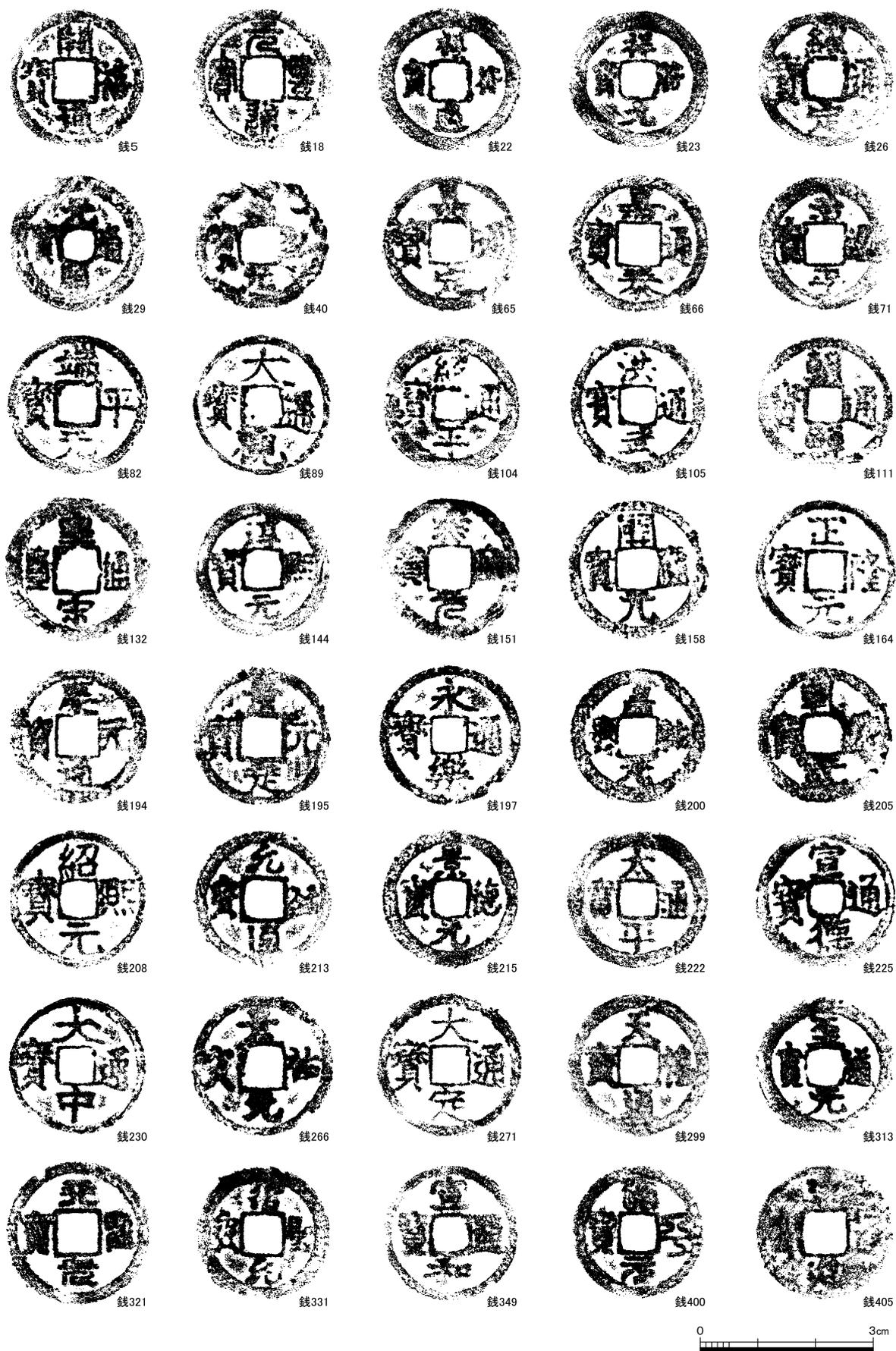


图50 土坑527出土錢拓影1 (1 : 1)

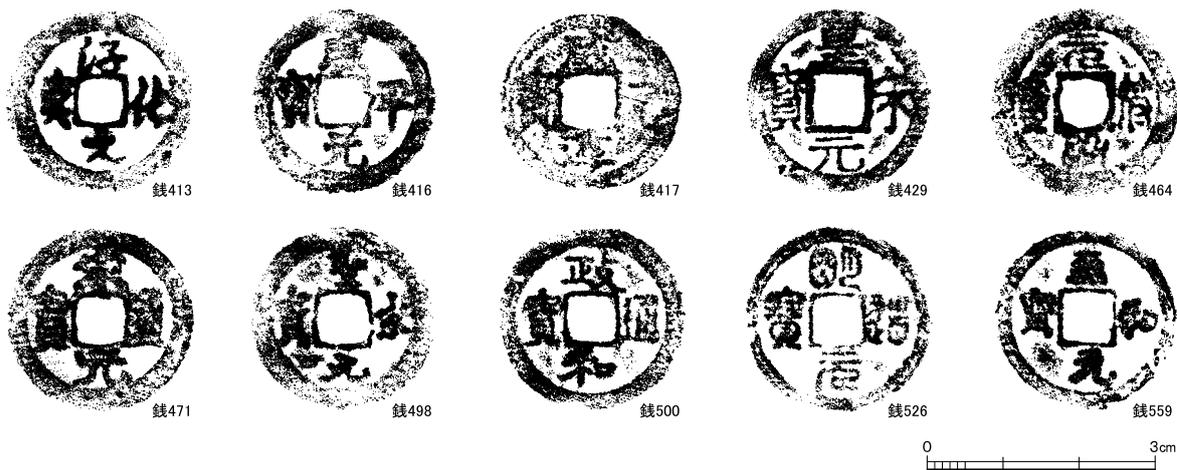


図51 土坑527出土銭拓影2 (1 : 1)

一枚ごとの銭種・大きさ・出土遺構は表6で示した。地域・時代別は唐銭1種9枚(6.5%)、北宋銭23種95枚(68.3%)、南宋銭2種2枚(1.4%)、明銭2種5枚(3.6%)あり、その他に輪銭が1種1枚(銭685)あり、不明のものは27枚であった。北宋銭が7割近くを占めている。また北宋銭の一部に外縁部が欠損した小型銭が3枚(銭583・585・657)含まれている。最古銭は唐(621初鑄)の開元通寶で、最新銭は明(1408初鑄)の永樂通寶である。

(4) 小結

今回の一括出土銭は数量的に565枚と、他で報告されている一括出土銭あるいは備蓄銭などと比較すると少量ではあるが、銭種数・銭種構成などをみると十分に分析に耐えうるものと考ええる。また、個別出土銭には輪銭や外縁部の欠損した粗悪銭もあるが、一括出土銭ではそれが見られないので、一括出土銭には何らかの人為的な選別が働いていた可能性が指摘できる。

表4 個別出土銭比率表

銭種	初鑄	西暦(年)	個数	比率(%)
開元通寶	唐 武徳4年	621	9	6.5%
太平通寶	北宋 太平興国元年	976	1	0.7%
咸平元寶	北宋 咸平元年	998	3	2.2%
景德元寶	北宋 景德元年	1004	4	2.9%
祥符元寶	北宋 大中祥符元年	1009	5	3.6%
祥符通寶	北宋 大中祥符元年	1009	1	0.7%
天禧通寶	北宋 天禧元年	1017	1	0.7%
天聖元寶	北宋 天聖元年	1023	7	5.0%
景祐元寶	北宋 景祐元年	1034	2	1.4%
皇宋通寶	北宋 寶元元年	1038	15	10.8%
至和元寶	北宋 至和元年	1054	1	0.7%
至和通寶	北宋 至和元年	1054	2	1.4%
嘉祐元寶	北宋 嘉祐元年	1056	1	0.7%
嘉祐通寶	北宋 嘉祐元年	1056	7	5.0%
治平元寶	北宋 治平元年	1064	2	1.4%
熙寧元寶	北宋 熙寧元年	1068	8	5.8%
元豐通寶	北宋 元豐元年	1078	13	9.4%
元祐通寶	北宋 元祐元年	1086	6	4.3%
紹聖元寶	北宋 紹聖元年	1094	4	2.9%
元符通寶	北宋 元符元年	1098	4	2.9%
聖宋元寶	北宋 建中靖国元年	1101	2	1.4%
大觀通寶	北宋 大觀元年	1107	2	1.4%
政和通寶	北宋 政和元年	1111	3	2.2%
宣和通寶	北宋 宣和元年	1119	1	0.7%
淳熙元寶	南宋 淳熙元年	1174	1	0.7%
嘉定通寶	南宋 嘉定元年	1208	1	0.7%
洪武通寶	明 洪武元年	1368	2	1.4%
永樂通寶	明 永樂6年	1408	3	2.2%
不明	—	—	28	20.1%
総数			139	100%

表5 土坑527出土錢一覽表

番号	分割記号	錢種	書体	重量	直径	厚さ	備考	番号	分割記号	錢種	書体	重量	直径	厚さ	備考
錢1	A-1-1	景德元寶		2.566	23.50	0.83		錢71	A-7-3	治平通寶	真書	2.697	23.74	0.95	
錢2	A-1-2	熙寧元寶	篆書	3.456	24.35	1.14		錢72	A-7-4	太平通寶		2.977	24.60	1.07	
錢3	A-1-3	大觀通寶		3.864	24.74	1.53		錢73	A-7-5	祥符元寶		3.655	24.72	1.36	
錢4	A-1-4	淳化元寶	真書	2.822	24.96	1.17		錢74	A-7-6	景德元寶		2.994	23.02	1.04	
錢5	A-1-5	開禧通寶		3.166	24.22	0.99		錢75	A-7-7	祥符通寶		2.592	24.21	0.98	
錢6	A-1-6	皇宋元寶		3.671	24.34	1.49		錢76	A-7-8	咸平元寶		3.891	24.30	1.33	
錢7	A-1-7	咸平元寶		3.500	24.00	1.26		錢77	A-7-9	至道元寶	真書	3.880	24.83	1.34	
錢8	A-1-8	熙寧元寶	篆書	3.789	24.40	1.36		錢78	A-7-10	熙寧元寶	真書	4.421	24.10	1.38	
錢9	A-1-9	祥符通寶		3.138	23.60	0.97		錢79	A-7-11	元祐通寶	真書	3.104	24.00	1.12	
錢10	A-1-10	祥符元寶		3.610	25.17	1.37		錢80	A-7-12	祥符元寶		3.320	24.60	1.20	
錢11	A-1-11	天禧通寶		2.964	25.56	0.92		錢81	A-7-13	祥符元寶		3.476	24.77	1.11	
錢12	A-1-12	開元通寶		2.992	25.31	1.08	2ヶ所欠	錢82	A-7-14	端平元寶		3.810	24.70	1.28	
錢13	A-1-13	熙寧元寶	真書	3.378	23.91	1.23		錢83	A-7-15	景德元寶		2.853	24.10	1.16	
錢14	A-2-1	祥符通寶		2.986	23.84	1.18	一部欠	錢84	A-7-16	開元通寶		3.024	24.83	1.16	
錢15	A-2-2	祥符通寶		3.308	25.26	1.41	一部欠	錢85	A-7-17	天聖元寶	真書	3.262	24.80	1.15	
錢16	A-3-1	元豐通寶	真書	3.522	25.18	1.23		錢86	A-7-18	祥符通寶		3.890	24.62	1.39	
錢17	A-3-2	開元通寶		3.318	24.97	1.03		錢87	A-7-19	祥符通寶		3.205	24.30	0.95	
錢18	A-4-1	元豐通寶	篆書	3.223	24.73	1.13		錢88	A-7-20	開元通寶		3.340	24.97	1.40	
錢19	A-4-2	天禧通寶		2.952	23.98	0.98		錢89	A-7-21	大觀通寶		2.935	24.61	1.34	
錢20	A-4-3	元祐通寶	篆書	2.852	24.77	0.93	一部欠	錢90	A-7-22	嘉定通寶		2.482	24.31	0.89	背九、一部欠
錢21	A-4-4	天禧通寶		3.206	24.44	1.16		錢91	A-7-23	治平元寶	真書	3.114	24.17	1.17	
錢22	A-4-5	祥符通寶		2.961	25.31	1.05		錢92	A-7-24	咸平元寶		2.412	23.85	0.90	一部欠
錢23	A-4-6	祥符元寶		3.301	24.56	1.16		錢93	A-8-1	天禧通寶		3.420	25.51	1.23	
錢24	A-4-7	祥符元寶		3.114	25.65	0.95		錢94	A-8-2	大觀通寶		3.180	23.99	1.29	
錢25	A-4-8	皇宋通寶	篆書	2.783	23.96	0.92		錢95	A-9-1	天聖元寶	篆書	2.967	24.82	1.03	
錢26	A-4-9	紹定通寶		3.763	24.08	1.37	背二	錢96	B-1-1	元豐通寶	真書	3.482	23.49	1.18	
錢27	A-4-10	元祐通寶	篆書	3.694	24.56	1.21		錢97	B-1-2	景德元寶		3.587	25.36	1.19	
錢28	A-4-11	元祐通寶	篆書	3.716	24.33	1.20		錢98	B-1-3	開元通寶		2.419	23.40	1.09	
錢29	A-4-12	光順通寶		3.164	23.99	1.17		錢99	B-1-4	大觀通寶		3.370	24.23	1.32	
錢30	A-4-13	祥符通寶		3.926	24.85	1.32		錢100	B-1-5	永樂通寶		3.122	25.46	1.31	
錢31	A-4-14	元祐通寶	真書	3.122	23.22	1.18		錢101	B-1-6	祥符元寶		3.767	24.66	1.29	
錢32	A-5-1	天聖元寶	篆書	2.962	24.35	1.26		錢102	B-1-7	元豐通寶	真書	2.762	24.58	1.10	
錢33	A-5-2	開元通寶		3.117	23.20	1.15		錢103	B-1-8	祥符通寶		3.106	25.62	1.05	一部欠
錢34	A-5-3	元豐通寶	真書	3.531	23.92	1.20		錢104	B-1-9	紹平通寶		3.299	24.48	1.04	
錢35	A-5-4	皇宋通寶	篆書	2.761	23.60	1.01		錢105	B-1-10	洪武通寶		3.724	24.05	1.47	一部欠
錢36	A-5-5	至道元寶	行書	3.168	24.72	0.99		錢106	B-1-11	祥符通寶		2.859	24.07	1.18	一部欠
錢37	A-5-6	祥符通寶		2.255	24.48	0.95		錢107	B-2-1	皇宋通寶	真書	2.705	24.22	1.51	一部欠
錢38	A-5-7	大觀通寶		2.961	24.70	1.16		錢108	B-3-1	祥符元寶		3.193	24.92	1.35	
錢39	A-5-8	景德元寶		2.761	25.33	1.00		錢109	B-3-2	祥符通寶		2.934	24.66	1.07	
錢40	A-5-9	嘉祐通寶	真書	3.679	24.55	1.14		錢110	B-3-3	祥符元寶		3.754	24.63	1.40	
錢41	A-5-10	洪武通寶		3.229	23.83	1.08		錢111	B-3-4	朝鮮通寶		3.044	23.96	1.33	
錢42	A-5-11	治平元寶	真書	4.322	22.87	1.60		錢112	B-3-5	皇宋通寶	真書	2.878	23.70	1.51	
錢43	A-5-12	元豐通寶	篆書	3.633	25.11	1.32		錢113	B-3-6	祥符元寶		3.173	24.83	1.25	一部欠
錢44	A-5-13	大定通寶		3.628	25.62	1.43	一部欠	錢114	B-4-1	元符通寶	篆書	3.487	24.55	1.10	一部欠
錢45	A-6-1	元豐通寶	篆書	3.517	24.22	1.17	背十	錢115	B-4-2	祥符元寶		2.961	24.10	1.02	一部欠
錢46	A-6-2	嘉定通寶		3.787	24.28	1.17		錢116	B-4-3	元祐通寶	真書	4.635	24.76	1.59	
錢47	A-6-3	開元通寶		3.813	24.73	1.34		錢117	B-4-4	紹聖元寶	篆書	2.038	23.03	0.96	一部欠
錢48	A-6-4	天禧通寶		2.934	24.16	0.99		錢118	B-4-5	祥符通寶		3.109	24.97	1.44	
錢49	A-6-5	祥符元寶		3.010	24.42	0.99		錢119	B-4-6	祥符元寶		2.836	24.48	1.02	
錢50	A-6-6	洪武通寶		2.605	23.29	1.09		錢120	B-4-7	熙寧元寶	真書	3.869	24.60	1.22	
錢51	A-6-7	皇宋通寶	篆書	3.385	25.32	1.29		錢121	B-4-8	至道元寶	草書	3.045	25.30	1.11	一部欠
錢52	A-6-8	祥符通寶		2.895	24.90	1.29		錢122	B-4-9	祥符元寶		1.959	23.59	-	
錢53	A-6-9	元豐通寶	真書	2.941	24.17	1.27		錢123	B-5-1	祥符元寶		2.146	-	-	B-4-10含む
錢54	A-6-10	天禧通寶		2.940	24.48	1.12		錢124	B-5-2	不明		3.128	23.99	1.26	不明？少片
錢55	A-6-11	開元通寶		2.687	24.35	1.15		錢125	B-5-3	朝鮮通寶		3.184	24.08	1.29	
錢56	A-6-12	祥符通寶		3.498	24.73	1.36		錢126	B-6-1	開元通寶		3.459	25.58	1.53	
錢57	A-6-13	開元通寶		3.655	24.61	1.15		錢127	B-6-2	大觀通寶		3.704	24.87	1.32	一部欠
錢58	A-6-14	開元通寶		3.603	24.50	1.32		錢128	B-6-3	治平元寶	篆書	2.999	23.86	0.99	
錢59	A-6-15	熙寧元寶	篆書	3.569	23.63	1.24		錢129	B-7-1	開元通寶		3.043	25.00	1.22	一部欠
錢60	A-6-16	不明		3.151	23.75	1.13		錢130	B-7-2	祥符通寶		3.343	24.39	1.38	
錢61	A-6-17	大觀通寶		3.767	25.03	1.50		錢131	B-7-3	元祐通寶	真書	2.870	22.92	1.26	
錢62	A-6-18	開元通寶		2.135	24.63	0.79		錢132	B-7-4	皇宋通寶	真書	3.890	25.20	1.36	
錢63	A-6-19	天聖元寶	篆書	2.963	25.03	1.21		錢133	B-7-5	紹聖元寶	真書	3.369	24.04	1.38	
錢64	A-6-20	祥符通寶		2.964	24.86	1.05		錢134	B-7-6	紹聖元寶	真書	2.724	24.47	1.13	
錢65	A-6-21	嘉定通寶		3.018	24.15	1.12	背十三	錢135	B-7-7	元豐通寶	真書	2.663	23.72	0.96	
錢66	A-6-22	嘉泰通寶		3.105	24.66	1.14	背三	錢136	B-7-8	大定通寶		2.608	24.91	1.13	
錢67	A-6-23	皇宋通寶	真書	3.493	24.48	1.22		錢137	B-7-9	咸平元寶		3.045	23.34	1.13	文字順変異
錢68	A-6-24	元祐通寶	篆書	2.507	23.91	0.91		錢138	B-7-10	皇宋通寶	真書	2.946	25.20	1.47	一部欠
錢69	A-7-1	元豐通寶	真書	2.901	22.45	1.27		錢139	B-8-1	天聖元寶	真書	2.834	25.34	1.31	一部欠
錢70	A-7-2	景德元寶		3.348	24.58	1.15		錢140	B-8-2	紹熙元寶		3.147	24.23	1.28	背五

番号	分割記号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	備考	番号	分割記号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	備考
銭141	B-8-3	元豊通寶	篆書	4.145	24.88	1.56		銭212	C-6-7	紹聖元寶	篆書	2.535	24.02	0.94	
銭142	B-8-4	祥符元寶		3.050	24.64	1.23		銭213	C-6-8	元祐通寶	真書	2.991	24.04	0.94	
銭143	B-8-5	祥符通寶		1.783	23.62	0.92	一部欠	銭214	C-6-9	聖宋元寶		3.763	25.04	1.28	一部欠
銭144	B-8-6	淳熙元寶		3.277	23.95	1.28	背十二	銭215	C-6-10	景德元寶		3.122	24.63	1.08	
銭145	B-8-7	元豊通寶	真書	3.674	23.76	1.31		銭216	C-6-11	元豊通寶	篆書	3.664	23.64	1.30	
銭146	B-8-8	政和通寶	篆書	4.007	25.08	1.20		銭217	C-6-12	祥符元寶		3.314	25.25	1.26	
銭147	B-8-9	熙寧元寶	真書	3.481	24.01	1.25		銭218	C-6-13	天禧通寶		2.990	24.32	1.16	
銭148	B-8-10	開元通寶		3.061	25.30	1.22		銭219	C-6-14	咸平元寶		3.978	24.78	1.27	
銭149	B-8-11	祥符元寶		2.755	23.94	1.28	一部欠	銭220	C-6-15	祥符元寶		2.885	24.29	1.04	
銭150	B-8-12	紹熙元寶		2.499	24.20	1.27	背二	銭221	C-6-16	政和通寶	真書	3.367	25.54	1.18	
銭151	B-8-13	熙寧元寶	篆書	3.556	25.23	1.56		銭222	C-7-1	太平通寶		3.137	24.75	1.13	
銭152	B-9-1	嘉祐元寶	真書	2.672	23.15	1.12		銭223	C-7-2	元豊通寶	篆書	3.247	24.60	1.25	
銭153	B-9-2	元豊通寶	篆書	2.765	23.78	1.13		銭224	C-7-3	皇宋通寶	真書	2.354	24.49	1.03	一部欠
銭154	B-9-3	祥符通寶		2.891	25.38	1.22		銭225	C-7-4	宣德通寶		3.738	25.02	1.43	
銭155	B-9-4	祥符元寶		3.536	24.88	1.38		銭226	C-7-5	紹平通寶		3.210	24.27	1.23	
銭156	B-9-5	元豊通寶	篆書	2.608	23.56	0.91		銭227	C-7-6	元豊通寶	真書	3.097	24.44	1.10	
銭157	B-9-6	天禧通寶		2.392	24.58	0.89		銭228	C-7-7	天聖元寶	篆書	3.138	24.27	1.10	
銭158	C-1-1	開元通寶		3.104	24.70	1.15		銭229	C-7-8	元祐通寶	真書	3.382	23.94	1.18	
銭159	C-1-2	祥符通寶		3.433	25.06	1.32		銭230	C-7-9	大中通寶		3.578	24.14	1.31	
銭160	C-1-3	祥符通寶		2.732	23.18	1.27		銭231	C-7-10	祥符通寶		3.133	24.81	1.21	
銭161	C-1-4	熙寧元寶	篆書	3.481	23.65	1.41		銭232	C-7-11	祥符通寶		3.208	24.96	1.38	
銭162	C-1-5	紹聖元寶	篆書	3.449	23.57	1.26		銭233	C-8-1	咸平元寶		2.483	-	-	小間切あり
銭163	C-1-6	大觀通寶		2.852	24.53	1.44	一部欠	銭234	C-8-2	開元通寶		3.695	25.40	1.09	
銭164	C-1-7	正隆元寶		2.966	24.83	1.36		銭235	C-8-3	元豊通寶	真書	3.478	23.36	1.29	
銭165	C-1-8	元豊通寶	真書	1.953	22.56	0.89		銭236	C-8-4	開元通寶		3.869	23.38	1.27	
銭166	C-1-9	景德元寶		2.741	24.26	1.19		銭237	C-9-1	元豊通寶	篆書	3.394	24.35	1.27	
銭167	C-1-10	元豊通寶	篆書	2.942	24.01	0.93		銭238	C-9-2	熙寧元寶	真書	3.782	23.66	1.44	
銭168	C-1-11	開元通寶		3.573	24.76	1.33		銭239	C-9-3	天禧通寶		3.024	24.64	1.14	
銭169	C-2-1	天禧通寶		3.197	24.18	1.40	一部欠	銭240	C-9-4	祥符通寶		3.156	23.94	1.13	
銭170	C-2-2	元豊通寶	真書	3.517	23.97	1.39		銭241	C-9-5	元祐通寶	真書	2.189	23.13	0.82	一部欠
銭171	C-2-3	開元通寶		3.456	24.52	1.17		銭242	C-9-6	祥符通寶		3.510	24.19	1.24	
銭172	C-2-4	景德元寶		3.227	24.81	1.19	一部欠	銭243	C-9-7	咸平元寶		2.262	24.21	0.78	
銭173	C-2-5	開元通寶		3.534	24.19	1.34		銭244	C-9-8	祥符元寶		2.910	24.25	1.15	一部欠
銭174	C-2-6	天禧通寶		3.600	23.90	1.16		銭245	C-9-9	祥符元寶		3.526	25.15	1.27	
銭175	C-2-7	元豊通寶	篆書	2.885	23.98	0.97		銭246	C-9-10	祥符通寶		3.356	24.27	1.23	
銭176	C-2-8	開元通寶		2.716	25.38	1.09	一部欠	銭247	C-9-11	祥符通寶		2.312	23.58	1.05	小片あり
銭177	C-2-9	祥符通寶		2.691	24.55	1.00		銭248	C-9-12	大定通寶		3.071	24.09	1.05	
銭178	C-2-10	正隆元寶		3.787	24.79	1.51		銭249	D-1-1	元豊通寶	真書	2.699	23.75	1.02	
銭179	C-2-11	大觀通寶		2.322	24.93	1.09		銭250	D-1-2	元豊通寶	真書	2.951	23.50	1.05	
銭180	C-2-12	開元通寶		3.257	23.12	1.35		銭251	D-1-3	祥符通寶		2.917	24.77	0.95	
銭181	C-2-13	祥符元寶		3.740	25.54	1.15		銭252	D-1-4	紹聖元寶	真書	2.980	23.62	0.99	
銭182	C-2-14	祥符通寶		2.950	25.02	1.16		銭253	D-1-5	天禧通寶		3.404	24.15	1.24	
銭183	C-2-15	元豊通寶	真書	3.472	24.76	1.27		銭254	D-1-6	咸平元寶		3.477	24.35	1.32	
銭184	C-2-16	天聖元寶	真書	2.943	24.08	1.19		銭255	D-1-7	祥符元寶		2.440	24.30	0.95	
銭185	C-3-1	元豊通寶	真書	2.481	23.66	1.20	一部欠	銭256	D-1-8	太平通寶		2.620	24.18	0.96	
銭186	C-4-1	祥符元寶		4.004	24.74	1.36		銭257	D-1-9	開元通寶		3.055	24.76	1.15	
銭187	C-4-2	元祐通寶	真書	3.760	24.50	1.13		銭258	D-1-10	元豊通寶	真書	2.565	25.13	0.78	
銭188	C-4-3	祥符通寶		3.679	25.67	1.19		銭259	D-1-11	祥符元寶		3.621	24.53	1.20	一部欠
銭189	C-4-4	淳化元寶	行書	3.678	25.11	1.29		銭260	D-1-12	天聖元寶	真書	3.803	24.76	1.32	
銭190	C-4-5	熙寧元寶	真書	3.830	23.96	1.39		銭261	D-1-13	元豊通寶	篆書	3.000	24.08	1.26	
銭191	C-4-6	祥符元寶		2.808	24.85	1.21	一部欠	銭262	D-1-14	治平元寶	篆書	4.059	23.41	1.53	
銭192	C-4-7	熙寧元寶	真書	3.529	23.73	1.43		銭263	D-1-15	洪武通寶		2.711	24.63	1.00	
銭193	C-4-8	開元通寶		3.042	23.39	1.05		銭264	D-1-16	政和通寶	篆書	3.474	24.37	1.51	
銭194	C-5-1	慶元通寶		3.244	24.45	1.25		銭265	D-1-17	咸平元寶		2.804	24.94	1.21	
銭195	C-5-2	景定元寶		2.610	24.23	1.14	背元	銭266	D-1-18	景祐元寶	真書	3.646	24.86	1.18	一部欠
銭196	C-5-3	咸平元寶		3.473	24.33	1.10		銭267	D-1-19	元豊通寶	真書	3.487	24.62	1.36	
銭197	C-5-4	永樂通寶		2.754	24.98	1.14		銭268	D-2-1	景德元寶		2.901	24.14	0.97	
銭198	C-5-5	紹聖元寶	篆書	3.496	24.20	1.22	一部欠	銭269	D-2-2	開元通寶		2.816	24.81	1.28	
銭199	C-5-6	祥符元寶		4.097	25.74	1.43		銭270	D-2-3	祥符元寶		3.232	23.84	1.23	
銭200	C-5-7	嘉祐元寶	真書	2.895	24.12	1.20	一部欠	銭271	D-2-4	大定通寶		3.430	25.33	1.54	
銭201	C-5-8	祥符通寶		3.566	25.56	1.24		銭272	D-2-5	宣德通寶		3.579	25.01	1.27	
銭202	C-5-9	熙寧元寶	真書	3.256	23.37	1.20		銭273	D-2-6	皇宋通寶	篆書	3.829	24.24	1.34	
銭203	C-5-10	元豊通寶	篆書	3.617	25.41	1.15		銭274	D-2-7	正隆元寶		3.587	24.82	1.53	
銭204	C-5-11	皇宋通寶	真書	2.946	24.99	1.11		銭275	D-3-1	元豊通寶	篆書	3.259	24.80	1.37	一部欠
銭205	C-5-12	乾元重寶		3.095	24.31	1.04		銭276	D-3-2	開元通寶		2.459	23.23	0.93	
銭206	C-6-1	開元通寶		3.243	24.69	1.15		銭277	D-3-3	皇宋通寶	真書	3.240	24.80	1.15	
銭207	C-6-2	祥符元寶		3.283	24.32	1.12		銭278	D-3-4	祥符元寶		2.740	23.93	1.05	
銭208	C-6-3	紹熙元寶		3.866	24.27	1.56	背元	銭279	D-3-5	景德元寶		4.051	24.54	1.48	
銭209	C-6-4	開元通寶		2.922	25.04	1.06		銭280	D-3-6	祥符通寶		3.445	23.97	1.32	
銭210	C-6-5	紹聖元寶	篆書	3.961	24.56	1.23		銭281	D-3-7	熙寧元寶	真書	2.960	24.48	1.02	
銭211	C-6-6	開元通寶		3.286	23.69	1.12		銭282	D-3-8	熙寧元寶	真書	3.889	23.93	1.45	

番号	分割記号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	備考	番号	分割記号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	備考
銭283	D-4-1	天禧通寶		3.123	24.78	1.52	一部欠	銭354	E-3-1	咸平元寶		2.658	23.89	1.00	小片あり
銭284	D-4-2	元豊通寶	篆書	2.740	23.11	0.99	一部欠	銭355	E-3-2	政和通寶	篆書	3.754	24.41	1.14	
銭285	D-4-3	天聖元寶	真書	3.743	24.52	1.33		銭356	E-3-3	大觀通寶		2.990	24.52	1.22	
銭286	D-4-4	元豊通寶	真書	3.295	24.55	1.00		銭357	E-3-4	祥符通寶		3.477	24.81	1.17	
銭287	D-4-5	至道元寶	草書	3.008	23.68	1.18		銭358	E-3-5	元豊通寶	真書	2.717	23.30	1.03	
銭288	D-4-6	天禧通寶		2.584	24.48	0.98		銭359	E-4-1	元豊通寶	真書	2.946	24.35	1.03	
銭289	D-4-7	元豊通寶	篆書	3.741	23.97	1.26		銭360	E-4-2	天聖元寶	真書	3.435	24.43	1.20	
銭290	D-4-8	祥符通寶		4.425	25.43	1.43		銭361	E-4-3	祥符通寶		3.869	24.43	1.29	
銭291	D-4-9	皇宋通寶	真書	2.097	23.87	0.72		銭362	E-4-4	淳熙元寶		2.720	23.20	1.18	
銭292	D-4-10	祥符元寶		3.036	24.28	1.00		銭363	E-4-5	洪武通寶		3.988	24.68	1.41	
銭293	D-4-11	咸平元寶		3.222	24.76	0.98		銭364	E-4-6	洪武通寶		2.989	24.06	1.23	
銭294	D-4-12	祥符通寶		2.739	24.43	1.14		銭365	E-4-7	祥符通寶		3.910	24.84	1.30	
銭295	D-4-13	嘉祐通寶	真書	3.207	24.21	1.23		銭366	E-4-8	祥符元寶		2.809	25.30	1.00	
銭296	D-4-14	熙寧元寶	篆書	3.057	24.36	1.17		銭367	E-4-9	祥符元寶		4.105	25.08	1.29	
銭297	D-4-15	祥符通寶		3.235	24.34	1.18		銭368	E-4-10	開元通寶		3.531	24.75	1.30	
銭298	D-4-16	祥符元寶		3.401	24.74	1.37		銭369	E-4-11	天聖元寶	篆書	3.191	24.30	1.12	
銭299	D-4-17	天禧通寶		3.336	25.09	1.09		銭370	E-4-12	祥符元寶		2.737	23.65	1.11	
銭300	D-4-18	太平通寶		3.003	24.07	1.02		銭371	E-4-13	紹定通寶		3.334	23.90	1.18	
銭301	D-4-19	治平元寶	篆書	3.525	24.04	1.46		銭372	E-4-14	元祐通寶	真書	2.837	23.16	1.00	
銭302	D-4-20	天禧通寶		4.103	25.70	1.43		銭373	E-4-15	祥符通寶		2.833	25.15	1.05	
銭303	D-4-21	皇宋通寶	真書	3.123	24.63	1.09	一部欠	銭374	E-4-16	咸平元寶		3.488	24.08	1.02	
銭304	D-4-22	祥符通寶		3.016	25.14	1.01		銭375	E-4-17	洪武通寶		3.590	23.33	1.27	
銭305	D-4-23	祥符通寶		3.012	24.45	1.15		銭376	E-4-18	淳化元寶	草書	3.909	24.75	1.27	
銭306	D-4-24	宣和通寶	真書	3.065	24.31	1.02		銭377	E-4-19	祥符通寶		3.899	24.77	1.33	
銭307	D-4-25	至和元寶	真書	3.955	23.64	1.36		銭378	E-4-20	開元通寶		2.788	23.07	1.23	
銭308	D-4-26	紹聖元寶	篆書	3.651	24.36	1.23		銭379	E-4-21	天聖元寶	真書	2.830	25.26	0.96	一部欠
銭309	D-4-27	景德元寶		3.880	25.25	1.25		銭380	E-5-1	皇宋通寶	篆書	3.291	24.58	1.21	
銭310	D-4-28	祥符元寶		3.012	24.27	1.11	一部欠	銭381	E-5-2	不明		3.399	24.19	1.08	
銭311	D-4-29	開元通寶		2.760	24.29	0.88		銭382	E-5-3	祥符元寶		3.531	24.21	1.17	
銭312	D-4-30	咸平元寶		3.402	24.67	1.16		銭383	E-5-4	天禧通寶		3.709	24.88	1.26	
銭313	D-4-31	至道元寶	真書	2.976	24.69	1.11		銭384	E-5-5	元豊通寶	篆書	3.704	25.27	1.32	
銭314	D-4-32	開元通寶		3.599	24.87	1.35		銭385	E-5-6	天聖元寶	真書	2.626	25.12	1.16	一部欠
銭315	D-4-33	祥符元寶		2.586	22.68	1.12		銭386	E-5-7	天聖元寶	篆書	3.514	25.54	1.16	
銭316	D-4-34	天聖元寶	篆書	2.987	24.15	1.23	一部欠	銭387	E-5-8	元豊通寶	篆書	4.082	24.29	1.42	
銭317	D-4-35	祥符通寶		3.506	24.94	1.18		銭388	E-5-9	祥符元寶		3.680	24.26	1.21	
銭318	D-4-36	元豊通寶	真書	3.394	23.65	1.14		銭389	E-5-10	宣和通寶	真書	3.952	25.64	1.27	
銭319	D-4-37	皇宋通寶	篆書	3.119	25.08	0.96		銭390	E-5-11	熙寧元寶	真書	3.639	24.04	1.36	
銭320	D-4-38	元豊通寶	篆書	3.617	24.95	1.27		銭391	E-5-12	元豊通寶	篆書	3.426	24.29	1.32	
銭321	D-5-1	天聖元寶	篆書	3.363	25.29	1.29		銭392	E-5-13	政和通寶	篆書	2.527	24.35	1.09	一部欠
銭322	D-5-2	祥符通寶		2.960	23.94	1.04		銭393	E-5-14	皇宋通寶	真書	3.375	24.61	1.17	
銭323	D-5-3	洪武通寶		2.211	23.56	0.92	一部欠	銭394	E-5-15	嘉祐通寶	真書	3.430	24.99	0.99	
銭324	D-5-4	天聖元寶	真書	3.626	24.70	1.16		銭395	E-5-16	大觀通寶		3.416	23.91	1.24	
銭325	D-5-5	政和通寶	篆書	2.682	23.65	0.98		銭396	E-5-17	祥符元寶		3.789	24.64	1.12	
銭326	D-5-6	元祐通寶	篆書	2.943	24.29	1.24	一部欠	銭397	E-5-18	祥符元寶		2.699	24.85	1.10	
銭327	D-5-7	開元通寶		3.013	24.73	1.28		銭398	E-5-19	元豊通寶	真書	3.454	23.72	1.10	
銭328	D-5-8	不明		3.250	22.83	1.22		銭399	E-5-20	元豊通寶	真書	3.395	24.04	1.41	
銭329	D-5-9	開元通寶		3.662	25.50	1.25		銭400	E-5-21	治平元寶	篆書	3.120	23.34	1.30	
銭330	D-5-10	熙寧元寶	篆書	3.023	24.53	0.90		銭401	E-5-22	元豊通寶	篆書	3.184	23.58	1.04	一部欠
銭331	D-5-11	紹聖元寶	真書	3.158	24.57	1.11		銭402	E-5-23	祥符通寶		2.933	24.48	1.03	
銭332	D-6-1	元豊通寶	真書	3.137	24.37	1.18		銭403	E-5-24	天聖元寶	篆書	3.539	25.05	1.15	
銭333	D-6-2	熙寧元寶	篆書	3.525	23.30	1.48		銭404	E-5-25	元符通寶	篆書	2.878	23.92	1.09	
銭334	D-6-3	至道元寶	草書	2.695	25.19	1.04		銭405	E-5-26	建炎通寶	真書	1.798	23.58	0.75	
銭335	D-6-4	開元通寶		3.358	24.56	1.17		銭406	E-5-27	元祐通寶	真書	2.824	23.51	1.11	
銭336	D-6-5	元豊通寶	真書	3.405	24.83	1.21		銭407	E-5-28	天禧通寶		3.971	25.57	1.41	
銭337	D-6-6	皇宋通寶	真書	3.513	24.33	1.10		銭408	E-5-29	祥符通寶		3.757	24.66	1.23	
銭338	D-6-7	皇宋通寶	真書	2.837	23.59	0.85		銭409	E-5-30	祥符元寶		3.851	24.88	1.31	
銭339	D-6-8	元豊通寶	篆書	3.519	24.32	1.14		銭410	E-5-31	大定通寶		3.881	24.71	1.23	
銭340	D-6-9	大觀通寶		3.389	24.47	1.26		銭411	E-5-32	天禧通寶		3.352	25.03	1.11	
銭341	D-6-10	天禧通寶		3.682	24.43	1.32		銭412	E-5-33	景德元寶		2.350	23.65	0.76	
銭342	D-6-11	宣德通寶		3.087	25.08	0.98		銭413	E-5-34	淳化元寶	草書	3.947	25.32	1.25	
銭343	D-6-12	宣和通寶	真書	3.753	24.09	1.32		銭414	E-6-1	政和通寶	篆書	3.537	24.84	1.36	
銭344	D-6-13	嘉定通寶		2.920	24.10	1.22		銭415	E-6-2	祥符通寶		3.363	25.29	1.13	
銭345	D-6-14	景德元寶		3.545	25.21	1.57		銭416	E-6-3	咸平元寶		3.686	24.77	1.14	
銭346	E-1-1	治平元寶	真書	2.608	23.32	0.92		銭417	E-6-4	咸淳元寶		2.709	24.13	0.86	
銭347	E-1-2	大觀通寶		2.954	24.44	1.14		銭418	E-6-5	天禧通寶		1.999	24.64	1.08	
銭348	E-1-3	祥符元寶		3.476	25.48	1.30		銭419	E-6-6	治平元寶		2.883	24.55	1.01	
銭349	E-1-4	宣和通寶	真書	3.386	23.62	1.11		銭420	E-6-7	聖宋元寶	真書	3.597	24.70	1.10	
銭350	E-1-5	開元通寶		3.027	24.12	1.24	一部欠	銭421	E-6-8	至道元寶	草書	2.393	24.42	0.85	
銭351	E-1-6	祥符通寶		3.582	24.03	1.21		銭422	E-6-9	元豊通寶	篆書	3.405	24.23	1.26	
銭352	E-2-1	咸平元寶		2.312	23.95	0.98		銭423	E-6-10	咸平元寶		3.593	25.44	1.07	
銭353	E-2-2	祥符通寶		3.726	25.22	1.28		銭424	E-6-11	咸平元寶		3.172	24.75	1.00	

番号	分割記号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	備考	番号	分割記号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	備考
銭425	E-7-1	洪武通寶		3.475	23.77	1.36		銭495	F-3-5	元豐通寶	真書	3.386	24.61	1.22	
銭426	E-7-2	開元通寶		2.810	24.04	1.07		銭496	F-3-6	熙寧元寶	真書	3.567	23.97	1.24	
銭427	E-7-3	祥符通寶		3.713	24.22	1.23		銭497	F-4-1	明道元寶	篆書	2.774	23.21	1.02	
銭428	E-7-4	祥符元寶		3.308	23.83	0.98		銭498	F-4-2	聖宋元寶	真書	3.344	24.63	1.04	
銭429	E-7-5	皇宋元寶		3.280	24.66	1.19	背四、 文字順変異	銭499	F-4-3	大觀通寶		3.753	24.14	1.30	
銭430	E-7-6	祥符元寶		3.697	25.22	1.25		銭500	F-4-4	政和通寶	真書	3.391	25.55	1.12	
銭431	E-7-7	開元通寶		3.895	25.04	1.48		銭501	F-4-5	景德元寶		3.509	24.99	1.31	
銭432	E-7-8	至道元寶	行書	2.687	24.36	0.92		銭502	F-5-1	祥符元寶		2.703	24.38	1.07	
銭433	E-7-9	元祐通寶	真書	3.295	23.71	1.03		銭503	F-5-2	景德元寶		3.756	25.15	1.36	
銭434	E-7-10	天聖元寶	真書	3.592	24.88	1.35		銭504	F-5-3	祥符元寶		3.117	24.94	1.09	
銭435	E-7-11	祥符元寶		3.350	24.16	1.16		銭505	F-5-4	熙寧元寶	真書	3.188	24.42	1.18	
銭436	E-7-12	至道元寶	行書	3.118	24.56	1.09		銭506	F-5-5	景德元寶		2.614	24.33	1.27	
銭437	E-7-13	元祐通寶	真書	2.279	23.41	0.90		銭507	F-5-6	政和通寶	真書	3.950	23.87	1.57	
銭438	E-8-1	天禧通寶		3.218	23.84	1.15		銭508	F-5-7	元祐通寶	真書	2.684	23.30	1.07	
銭439	E-8-2	祥符元寶		3.606	24.56	1.33		銭509	F-5-8	皇宋通寶	篆書	2.866	-	-	3片
銭440	E-8-3	洪武通寶		5.452	25.19	1.42		銭510	F-5-9	祥符元寶		2.773	24.86	1.09	
銭441	E-9-1	元符通寶	真書	3.430	24.62	1.15		銭511	F-5-10	皇宋通寶	篆書	2.800	24.97	1.06	
銭442	E-9-2	大觀通寶		4.232	24.73	1.56		銭512	F-5-11	景德元寶		3.758	24.66	1.29	
銭443	F-1-1	祥符元寶		2.553	24.18	0.99		銭513	F-5-12	洪武通寶		3.718	23.36	1.42	
銭444	F-1-2	祥符通寶		3.115	24.94	1.17		銭514	F-5-13	祥符通寶		3.123	24.48	1.24	
銭445	F-1-3	元祐通寶	真書	3.033	24.32	1.10		銭515	F-5-14	元祐通寶	真書	3.385	25.07	1.14	
銭446	F-1-4	祥符通寶		2.641	23.70	1.06		銭516	F-5-15	祥符元寶		3.419	24.56	1.41	
銭447	F-1-5	開元通寶		3.417	24.43	1.38		銭517	F-5-16	熙寧元寶	真書	3.544	23.70	1.05	
銭448	F-1-6	景德元寶		3.994	25.93	1.48		銭518	F-5-17	紹聖元寶	真書	3.168	23.95	1.14	
銭449	F-1-7	皇宋通寶	真書	2.984	24.30	0.96		銭519	F-5-18	元祐通寶	真書	2.648	23.40	1.06	
銭450	F-1-8	天聖元寶	篆書	3.506	23.71	1.26		銭520	F-5-19	政和通寶		3.762	24.55	1.36	
銭451	F-1-9	祥符通寶		2.902	24.21	1.14		銭521	F-5-20	祥符元寶		2.389	23.71	0.91	
銭452	F-1-10	至道元寶	草書	3.267	25.08	1.19		銭522	F-5-21	祥符通寶		2.882	24.92	1.17	
銭453	F-1-11	天禧通寶		3.379	25.14	1.17		銭523	F-5-22	開元通寶		2.472	22.98	0.97	
銭454	F-1-12	聖宋元寶	篆書	2.890	23.55	0.94		銭524	F-5-23	大觀通寶		3.376	24.48	1.29	
銭455	F-1-13	政和通寶	篆書	2.515	24.74	1.14	一部穴	銭525	F-5-24	景德元寶		2.516	23.52	1.03	
銭456	F-1-14	祥符通寶		3.076	24.55	1.07		銭526	F-5-25	明道元寶	篆書	3.407	24.61	1.15	
銭457	F-1-15	祥符元寶		3.391	24.78	1.10		銭527	F-5-26	熙寧元寶	篆書	2.558	23.45	0.88	
銭458	F-1-16	祥符通寶		3.739	25.00	1.35		銭528	F-5-27	聖宋元寶	篆書	3.025	23.63	1.05	
銭459	F-1-17	開元通寶		3.098	25.40	1.19	一部欠	銭529	F-5-28	開元通寶		3.121	23.60	1.11	
銭460	F-1-18	祥符元寶		2.866	25.29	1.06		銭530	F-5-29	政和通寶	篆書	3.730	25.05	1.20	
銭461	F-1-19	皇宋通寶	真書	4.508	25.33	1.41		銭531	G-1-1	開元通寶		2.765	24.27	1.13	
銭462	F-1-20	皇宋通寶	真書	2.773	22.92	1.12		銭532	G-2-1	祥符元寶		2.870	24.89	1.38	
銭463	F-1-21	淳化元寶	行書	3.551	24.63	1.25		銭533	G-3-1	天禧通寶		3.595	24.17	1.24	
銭464	F-1-22	元符通寶	篆書	3.513	25.21	1.05		銭534	G-3-2	政和通寶	篆書	3.180	24.74	1.17	
銭465	F-1-23	元豐通寶	真書	2.955	23.80	1.19		銭535	G-3-3	元豐通寶	真書	3.026	24.41	1.02	
銭466	F-1-24	咸平元寶		2.973	24.02	1.01		銭536	G-3-4	元豐通寶	真書	2.482	24.46	0.89	一部穴
銭467	F-1-25	皇宋通寶	真書	3.473	25.38	1.19		銭537	G-3-5	元祐通寶	篆書	2.577	23.23	1.10	
銭468	F-2-1	祥符元寶		3.009	23.90	1.07		銭538	G-3-6	祥符元寶		2.980	24.97	1.30	
銭469	F-2-2	宋通元寶		3.289	24.55	1.14		銭539	G-3-7	祥符元寶		3.140	24.43	1.18	
銭470	F-2-3	景德元寶		3.019	24.61	1.15		銭540	G-3-8	元豐通寶	篆書	3.735	24.58	1.32	
銭471	F-2-4	宋通元寶		3.577	24.97	1.17		銭541	G-3-9	祥符元寶		3.377	24.65	1.37	
銭472	F-2-5	祥符通寶		4.045	24.06	1.44		銭542	G-3-10	咸平元寶		3.651	24.50	1.17	
銭473	F-2-6	元祐通寶	篆書	2.781	24.14	1.15		銭543	G-3-11	洪武通寶		3.678	24.00	1.46	
銭474	F-2-7	天聖元寶	真書	3.098	25.19	1.05		銭544	G-3-12	大觀通寶		3.151	24.73	1.25	
銭475	F-2-8	元豐通寶	真書	3.661	23.50	1.33		銭545	G-3-13	至道元寶	行書	3.602	24.31	1.21	
銭476	F-2-9	政和通寶	真書	4.051	24.35	1.25		銭546	G-3-14	開元通寶		2.525	24.86	1.13	
銭477	F-2-10	天禧通寶		3.023	35.65	1.35		銭547	G-3-15	元豐通寶	真書	3.289	25.58	1.15	
銭478	F-2-11	正隆元寶		4.100	24.42	1.41		銭548	G-3-16	至道元寶	草書	3.285	24.90	1.12	
銭479	F-2-12	天禧通寶		2.819	24.39	1.32		銭549	G-3-17	至道元寶	行書	3.348	24.65	1.33	
銭480	F-2-13	元豐通寶	真書	3.001	24.63	1.22		銭550	G-3-18	咸平元寶		3.222	25.71	1.01	
銭481	F-2-14	祥符通寶		2.481	22.98	1.02		銭551	G-3-19	皇宋通寶	真書	3.018	24.59	1.05	
銭482	F-2-15	開元通寶		3.862	24.13	1.35		銭552	G-3-20	祥符元寶		3.029	23.85	1.14	
銭483	F-2-16	祥符元寶		2.919	24.87	1.21	一部穴	銭553	G-3-21	祥符通寶		4.110	25.43	1.47	
銭484	F-2-17	咸平元寶	真書	2.735	24.11	0.99		銭554	G-3-22	天聖元寶	篆書	2.636	24.53	1.26	一部欠小片
銭485	F-2-18	祥符元寶		3.520	24.98	1.18		銭555	G-4-1	聖宋元寶	篆書	3.562	24.39	1.55	一部欠
銭486	F-2-19	景德元寶		2.943	25.43	1.13		銭556	G-4-2	天禧通寶		2.477	23.36	0.90	
銭487	F-2-20	元豐通寶	真書	2.699	24.13	0.87		銭557	G-4-3	元豐通寶	真書	2.915	24.19	0.97	
銭488	F-2-21	天禧通寶		4.077	25.24	1.27		銭558	G-4-4	景德元寶		2.466	24.56	1.02	
銭489	F-2-22	元豐通寶	篆書	3.866	24.71	1.22		銭559	G-4-5	至和元寶	真書	3.663	24.76	1.33	
銭490	F-2-23	永樂通寶		3.171	24.46	1.11		銭560	G-4-6	皇宋通寶	真書	3.743	25.01	1.33	
銭491	F-3-1	元豐通寶	真書	2.517	24.34	1.06		銭561	G-5-1	明道元寶	篆書	3.475	25.27	1.37	一部欠
銭492	F-3-2	熙寧元寶	真書	3.375	23.19	1.38		銭562	G-5-2	天禧通寶		2.565	24.40	1.35	
銭493	F-3-3	洪武通寶		3.423	23.61	1.39		銭563	G-5-3	祥符元寶		2.918	24.72	1.12	
銭494	F-3-4	祥符通寶		3.928	25.81	1.41		銭564	G-5-4	祥符元寶		2.669	24.03	1.12	3片
								銭565	G-5-5	天聖元寶	真書	2.751	25.66	1.07	

表6 個別出土銭一覽表

番号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	出土遺構	備考	番号	銭種	書体	重量	直径	厚さ	出土遺構	備考
銭566	開元通寶		4.800	25.57	1.57	土坑83	2枚接、小片	銭635	元豐通寶	真書	3.731	25.40	1.15	土坑551	
銭567	開元通寶		2.718	23.93	1.25	地下室574		銭636	元豐通寶	篆書	3.231	25.53	1.23	土坑551	
銭568	開元通寶		3.408	25.30	1.62	地下室581		銭637	元豐通寶	篆書	2.939	25.03	1.06	土坑551	
銭569	開元通寶		3.329	25.04	1.44	地下室581	一部欠	銭638	元豐通寶	篆書	4.529	24.85	1.58	土坑551	
銭570	開元通寶		3.471	24.92	1.48	地下室650		銭639	元豐通寶	真書	3.222	25.36	1.31	地下室581	
銭571	開元通寶		3.299	25.20	1.20	地下室650		銭640	元豐通寶	真書	4.378	25.63	1.42	地下室581	
銭572	開元通寶		2.813	23.58	1.03	あげ土		銭641	元豐通寶	真書	3.716	24.48	1.44	地下室581	
銭573	開元通寶		2.352	23.99	1.14	第1面掘下	3片	銭642	元豐通寶	篆書	3.821	23.98	1.32	地下室581	
銭574	開元通寶		2.874	24.92	1.22	攪乱		銭643	元豐通寶	真書	4.252	25.09	1.36	地下室581	
銭575	太平通寶		2.697	24.38	1.25	地下室581		銭644	元豐通寶	真書	2.732	25.83	1.37	地下室581	一部欠
銭576	咸平元寶		3.564	25.08	1.38	地下室581		銭645	元豐通寶	真書	4.082	24.55	1.28	地下室667	
銭577	咸平元寶		3.554	24.77	1.18	地下室581		銭646	元豐通寶	真書	3.173	25.19	1.18	あげ土	
銭578	咸平元寶		3.881	24.35	1.43	第2面掘下		銭647	元豐通寶	真書	3.087	25.04	1.45	第1面掘下	
銭579	景德元寶		3.139	24.97	1.20	土坑548		銭648	元祐通寶	篆書	3.506	24.67	1.28	土坑80	
銭580	景德元寶		3.151	24.59	1.26	土坑551		銭649	元祐通寶	篆書	3.367	25.40	1.40	土坑551	
銭581	景德元寶		3.616	24.70	1.60	地下室581		銭650	元祐通寶	篆書	3.406	24.47	1.26	地下室581	
銭582	景德元寶		2.564	24.95	1.04	第1面掘下		銭651	元祐通寶	篆書	3.624	24.69	1.27	地下室581	
銭583	祥符元寶		2.059	20.95	1.33	地下室581	小型銭、 外縁なし	銭652	元祐通寶	篆書	3.723	24.95	1.46	地下室581	
銭584	祥符元寶		3.512	25.09	1.24	地下室581		銭653	元祐通寶	真書	3.968	24.45	1.41	第2面掘下	
銭585	祥符元寶		2.667	21.07	1.37	地下室581	小型銭、 外縁なし	銭654	紹聖元寶	篆書	2.049	24.95	1.29	地下室581	
銭586	祥符元寶		3.328	24.89	1.29	地下室581	2片	銭655	紹聖元寶	真書	3.882	24.27	1.64	地下室581	
銭587	祥符元寶		3.002	25.16	1.30	地下室650		銭656	紹聖元寶	篆書	4.455	25.46	1.41	地下室667	2/3片
銭588	祥符通寶		3.047	25.90	1.31	第1面上面		銭657	紹聖元寶	真書	1.342	18.01	1.20	第2面掘下	小型銭、 外縁狭い
銭589	天禧通寶		3.428	26.20	1.09	地下室581		銭658	元符通寶	篆書	3.324	24.59	1.31	地下室581	
銭590	天聖元寶	真書	3.367	25.33	1.40	土坑551		銭659	元符通寶	篆書	2.999	24.07	1.45	地下室581	一部欠
銭591	天聖元寶	篆書	3.075	25.37	1.34	地下室581		銭660	元符通寶	篆書	4.052	25.78	1.41	地下室581	
銭592	天聖元寶	篆書	3.149	25.29	1.19	地下室581		銭661	元符通寶	篆書	3.850	24.24	1.51	地下室581	
銭593	天聖元寶	篆書	3.113	24.91	1.19	地下室581	一部欠	銭662	聖宋元寶	真書	2.701	24.50	1.08	地下室581	
銭594	天聖元寶	真書	3.149	25.47	1.11	土坑650		銭663	聖宋元寶	篆書	3.274	25.36	1.43	地下室650	一部欠
銭595	天聖元寶	篆書	3.829	25.30	1.42	地下室667		銭664	大觀通寶		2.220	25.18	1.31	土坑551	
銭596	天聖元寶	真書	3.225	24.95	1.28	あげ土	一部欠	銭665	大觀通寶		2.911	24.09	1.40	土坑534	
銭597	景祐元寶	真書	3.149	25.44	1.15	地下室581	一部欠	銭666	政和通寶	真書	3.070	24.25	1.66	地下室581	一部欠
銭598	景祐元寶		3.238	25.50	1.17	あげ土		銭667	政和通寶	真書	3.733	25.05	1.32	地下室581	
銭599	皇宋通寶	真書	3.274	24.96	1.28	土坑551		銭668	政和通寶	篆書	2.902	24.16	1.10	土坑650	
銭600	皇宋通寶	真書	2.749	23.53	1.18	土坑551	一部欠	銭669	宣和通寶	篆書	1.772	23.29	0.99	地下室581	一部欠
銭601	皇宋通寶	真書	2.619	25.20	1.10	土坑551		銭670	淳熙元寶		2.803	24.77	1.27	地下室650	背十三
銭602	皇宋通寶	真書	3.963	25.29	1.56	地下室581		銭671	嘉定通寶		3.721	25.79	1.37	地下室667	
銭603	皇宋通寶	真書	3.279	25.29	1.21	地下室581		銭672	洪武通寶		3.787	23.74	1.32	土坑551	
銭604	皇宋通寶	真書	3.582	24.74	1.25	地下室581		銭673	洪武通寶		3.355	23.06	1.81	土坑560	
銭605	皇宋通寶	真書	3.219	24.78	1.07	地下室581		銭674	永樂通寶		2.864	25.16	1.31	土坑551	
銭606	皇宋通寶	篆書	3.538	25.17	1.58	地下室581		銭675	永樂通寶		3.696	25.45	1.52	土坑551	
銭607	皇宋通寶	篆書	2.182	25.35	1.23	地下室581	2片	銭676	永樂通寶		3.759	25.37	1.28	土坑551	
銭608	皇宋通寶	篆書	3.185	24.30	1.35	地下室650	一部欠	銭677	〇〇元寶		1.793	25.48	1.36	地下室581	一部欠
銭609	皇宋通寶	篆書	3.074	24.46	1.24	地下室650		銭678	〇〇通寶		2.068	22.76	1.23	第1面掘下	
銭610	皇宋通寶	篆書	2.432	24.31	1.01	地下室667	3片	銭679	〇〇元寶		3.479	25.04	1.39	土坑560	
銭611	皇宋通寶	篆書	2.889	23.68	1.27	攪乱		銭680	〇〇元寶		4.336	24.40	1.50	第2面掘下	
銭612	皇宋通寶		4.111	25.70	1.81	第1面掘下		銭681	〇聖元〇	真書	2.979	23.36	1.20	土坑7	5片
銭613	皇宋通寶		3.427	24.33	1.49	第1面掘下		銭682	〇和〇寶		2.215	24.87	1.13	第1面掘下	1/4欠
銭614	至和元寶	真書	4.209	25.41	1.61	地下室581		銭683	嘉〇〇〇		0.840	-	1.02	井戸64	1/3片
銭615	至和通寶	篆書	3.000	24.99	1.14	地下室581	一部欠	銭684	皇〇〇寶		1.268	-	1.79	土坑83	1/3片
銭616	至和通寶	真書	3.720	25.29	1.42	地下室594		銭685	輪銭		0.861	-	1.62	地下室581	4片
銭617	嘉祐元寶	篆書	2.979	24.99	0.99	土坑551		銭686	不明		3.392	-	-	土坑7	11片
銭618	嘉祐通寶	真書	3.183	23.97	1.35	土坑80		銭687	不明		3.138	25.13	1.24	溝43	
銭619	嘉祐通寶	真書	3.619	24.01	1.60	地下室581		銭688	不明		3.096	-	-	土坑539	1/2、他2片
銭620	嘉祐通寶	真書	3.558	25.53	1.19	地下室581		銭689	不明		2.647	-	-	土坑548	4片
銭621	嘉祐通寶	真書	3.208	25.77	1.33	地下室581		銭690	不明		2.229	24.73	1.11	土坑551	一部欠
銭622	嘉祐通寶	篆書	3.515	24.77	1.16	地下室581		銭691	不明		0.259	-	0.85	土坑551	1/4片
銭623	嘉祐通寶	篆書	1.684	24.66	1.17	第1面掘下	1/3欠	銭692	不明		2.799	23.99	1.36	土坑560	
銭624	嘉祐通寶	真書	3.426	25.82	1.37	第2面掘下		銭693	不明		3.004	23.69	1.40	土坑560	
銭625	治平元寶	真書	3.275	25.17	1.30	土坑551		銭694	不明		2.631	-	1.49	土坑560	2片、一部欠
銭626	治平元寶	真書	3.197	23.88	1.20	第1面掘下		銭695	不明		2.037	24.81	1.21	土坑650	1/2片
銭627	熙寧元寶	篆書	3.228	25.16	1.09	土坑551		銭696	不明		0.369	-	-	地下室581	
銭628	熙寧元寶		2.863	24.75	1.41	土坑560		銭697	不明		1.737	25.79	1.57	地下室581	2片
銭629	熙寧元寶	真書	4.351	24.28	1.68	地下室581		銭698	不明		3.582	26.60	1.64	地下室581	2片
銭630	熙寧元寶	篆書	3.094	23.58	1.20	地下室581	一部欠	銭699	不明		0.896	-	0.74	地下室581	小片2
銭631	熙寧元寶	篆書	3.075	24.62	1.43	地下室581	3片	銭700	不明		1.237	-	-	地下室581	1/3片
銭632	熙寧元寶	真書	3.647	23.58	1.42	地下室581		銭701	不明		0.613	-	-	地下室581	
銭633	熙寧元寶	真書	3.223	25.98	1.20	地下室650		銭702	不明		1.445	-	-	地下室581	1/2片
銭634	熙寧元寶	真書	3.241	24.83	1.51	第1面掘下		銭703	不明		0.678	14.67	0.91	地下室650	小型銭
								銭704	不明		1.067	-	-	地下室650	1/4

付章2 出土した動物遺存体

丸山真史（奈良文化財研究所）

（1）概要

当地点では、弥生時代から近世に至るまでの、動物遺存体が破片数にして62点が出土している。そのうち種類、部位などを同定したものは52点を数え、中世の魚貝類が中心となる。以下では、時代、遺構別に出土した動物遺存体を紹介する。なお、下記の魚類の大きさは、奈良文化財研究所所蔵の現生骨格標本との比較から推測した値である。また、貝類は破損が著しく、計測は困難である。

（2）時期・遺構別の特徴

弥生時代前期

土坑515 イノシシの橈骨（右）、踵骨（左）が1点ずつ出土しており、いずれも強く被熱して白色を呈する。橈骨は骨幹部と癒合していない遠位端であり、若獣と推測される。

平安時代後期から中世

遺物包含層（第2面掘り下げ） 貝類のアカニシ1点が出土している。また哺乳類のニホンジカの枝角が1点出土している。枝角に加工痕は見られないが、角製品の素材や薬などを目的として、持ち込まれたと考えられる。

中世

地下室650（13世紀後半） 貝類は、アカニシが15点出土している。魚類は、マダイの上後頭骨＋前頭骨、前頭骨、副蝶形骨、前上顎骨（左）、前鰓蓋骨（右）、角骨（左）が1点ずつ、計6点が出土しており、マダイを含むタイ科の上擬鎖骨（右）、擬鎖骨（左）、間鰓蓋骨（右）が1点ずつ、計3点が出土している。いずれも体長40cm以上の個体と推測される。マダイの前頭骨のうち1点は、正中線上で切断されている。擬鎖骨（左）、間鰓蓋骨（右）は、いずれも体長20～30cmと推測

表7 動物遺存体種名表

軟体動物門 Mollusca	タイ科 Sparidae
古腹足目 Vetigastropoda	マダイ <i>Pagrus major</i>
ミミガイ科 Haliotidae	タイ科の一種 Sparidae, gen. et sp. indet..
ミミガイ科の一種 Haliotidae gen. et sp. indet.	サバ科 Scombridae
新腹足目 Neogastropoda	サバ属の一種 <i>Scomber</i> sp.
アッキガイ科 Muricidae	哺乳綱 Mammalia
アカニシ <i>Rapana venosa</i>	食肉目 Carnivora
脊椎動物門 Vertebrata	イヌ科 Canidae
硬骨魚綱 Osteichthyes	タヌキ <i>Nyctereutes procyonoides</i>
ウナギ目 Anguilliformes	奇蹄目 Perissodactyla
ハモ科 Muraenesocidae	ウマ科 Equidae
ハモ属の一種 <i>Muraenesox</i> sp.	ウマ <i>Equus caballus</i>
スズキ目 Percidae	偶蹄目 Artiodactyla
スズキ科 Percichthyidae	イノシシ科 Suidae
スズキ <i>Lateolabrax japonicus</i>	イノシシ <i>Sus scrofa</i>
ハタ科 Serranidae	シカ科 Cervidae
ハタ科の一種 Serranidae, gen. et sp. indet.	ニホンジカ <i>Cervus nippon</i>



図52 出土動物骨

される。ハモ属の歯骨（左）と角骨（左）が1点ずつ、計2点が出土しており、体長100cm以下のやや小型と推測される。ハタ科の前上顎骨（左）と臀鰭棘が1点ずつ、計2点が出土しており、前上顎骨は体長40～50cm、臀鰭棘は60cm以上の大型個体と推測される。

スズキの歯骨（左）1点が出土しており、歯骨高10.9mmを測り、体長40～50cmと推測される。サバ属の主鰓蓋骨（右）1点が出土しており、体長30cm程度と推測される。哺乳類は、ニホンジカの椎骨（胸椎）1点が出土している。

土坑609（13世紀後半） 魚類は、マダイの前上顎骨（左）が1点出土しており、前上顎骨長44.0mmを測り、体長40～50cmと推測される。ニホンジカの枝角が1点出土している。角幹が鋸によって切断されており、角製品の製作途中で投棄されたものと考えられる。

土坑667（13世紀後半～14世紀前半） 魚類はタイ科の擬鎖骨（左）1点が出土しており、体長30～40cmと推測される。哺乳類は、タヌキの脛骨（右）が1点出土している。

土坑581（14世紀前半） 貝類は、アカニシが2点出土している。哺乳類は、ウマの臼歯（上下・左右不明）が1点出土している。

地下室574（14世紀後半） 魚類のマダイの椎骨が1点出土しており、体長40～50cmと推測される。

溝43（14世紀後半か） 貝類のアカニシが1点出土している。

土坑42（中世） 貝類のアカニシが、1点出土している。

中世から近世

遺物包含層（第1面掘り下げ） 貝類のアカニシが2点出土している。

表8 動物遺存体集計表

時期	遺構／層位	貝類		魚類						哺乳綱				計
		アフリカ類	アカニシ	ハモ属	スズキ	ハタ科	マダイ	タイ科	サバ属	タヌキ	ウマ	イノシシ	ニホンジカ	
弥生前期	土坑515											2		2
平安後期～中世	第2面掘下		1										1	2
13C後	地下室650		15	2	1	2	6	3	1				1	31
	土坑609						1						1	2
13C後～14C前	地下室667							1		1				2
14C前	地下室581		2								1			3
14C後	地下室574						1							1
	溝43		1											1
中世	土坑42		1											1
中世～近世	第1面掘下		2											2
16C後～17C初	土坑17	2	2											4
近世以降	土坑19		1											1
計		2	25	2	1	2	8	4	1	1	1	2	3	52

近世

土坑17 (16世紀後半～17世紀初頭) 貝類のアカニシ1点とアワビ類2点が出土している。

土坑19 貝類のアカニシが1点出土している。

(3) 中世の魚貝類利用について

京都市内では当地点のほかに、平安京左京三条二坊十町跡、同四条二坊十二町跡、同五条三坊九町跡から、中世の魚貝類が出土している(丸山2008)。平安京左京三条二坊十町跡では貝類のアカニシ、シジミ科、ハマグリ、魚類のアユ、コイ、サケ属、ボラ科、アジ科、タイ科、ベラ科が、同四条二坊十二町跡では貝類のアカニシ、ハイガイ、魚類のスズキ、ブリ属が、五条三坊九町跡では魚類のコイ、マダイ、タイ科が出土している。当地点の調査によって、貝類ではアワビ類を、魚類ではハモ属、ハタ科、サバ属を新たに追加することができ、多様な海産物が京都へもたらされたことが明らかになりつつある。

鎌倉や博多遺跡などの代表的な中世遺跡では、アカニシなどの巻貝が多く出土する傾向が見られ、京都でもアカニシを多く消費していたことが想定される。出土した資料は、破損して殻軸のみになったものが多く、殻付きの状態を持ち込まれているが、調理法は明らかではない。魚類では、マダイに「兜割り」した前頭骨が含まれており、あら煮などの料理に使用し、マダイの骨に含まれる旨味を利用していたと考えられる。また、京都市内では、近世の遺構からハモ属が頻繁に出土するが、今回中世にもハモを利用していたことが明らかになった。現代では、ハモは祇園祭に欠かせない食材とされるが、骨切りをして料理に供することが一般的である。文献の記録では、享保十五年(1730)に成立した『料理綱目調味抄』には、ハモについて「…細かに刀めを入ルれハ小骨切りて口にさはらず…」とある(吉井1979)。享保以前には、山科言経の日記に「ごんぎり鱧」があり、ハモの干物を細かく切って料理していた(吉田1991)。当遺跡で出土しているハモ属がどのように調理されたか定かではないが、京都におけるハモの利用が中世初期に遡ることは興味深い。

(4) 小結

当遺跡では、弥生時代から近世にかけての遺構から動物遺存体が出土し、中世の魚貝類が中心的存在である。海産物のアワビ類、アカニシ、ハモ属、スズキ、ハタ科、マダイ、サバ属が出土しており、

中世都市における食生活や、海産物の流通、漁撈技術などを検討する貴重な資料となる。京都における水産物利用について、中世の魚貝類遺存体がさらに増加すれば、中世と近世の数量的な比較が可能であり、京都における具体的な水産物利用の変遷を明らかにすることができるだろう。

参考文献

丸山真史2008「出土した動物遺存体」『平安京左京五条三坊九町跡・烏丸綾小路遺跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-10 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 pp.78-79

吉井始子1979『翻刻江戸時代料理本集成』第四巻 臨川書店

吉田元1991『日本の食と酒-中世末の発酵技術を中心に-』人文書院

圖 版



1 第1面東半全景（西から）



2 第1面西半全景（南東から）



1 土坑527 (北から)



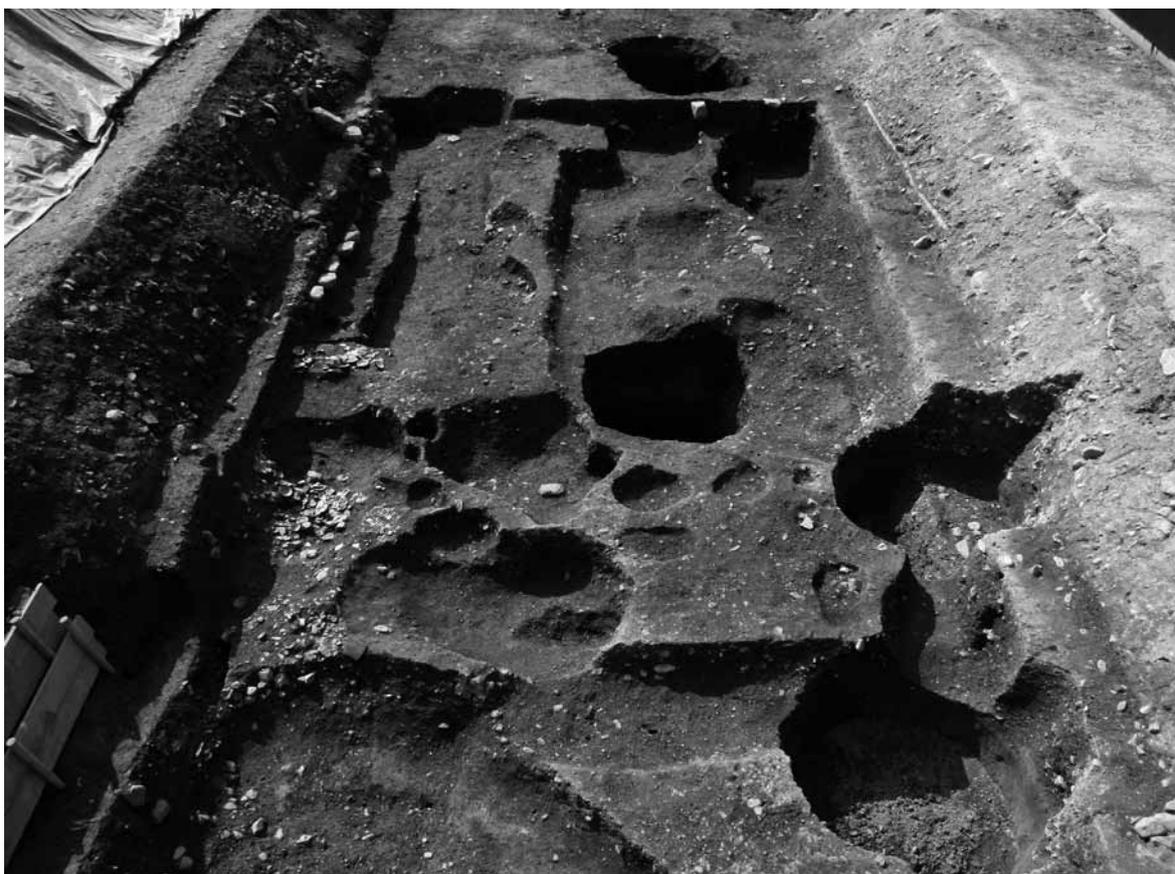
2 土坑13 (南東から)



3 土坑17 (西から)



4 土坑19 (西から)



1 第2面東半全景（東から）



2 第2面西半全景（南東から）



1 地下室581（東から）



2 地下室581西壁縦板炭化材と裏込め（東から）



1 地下室581 瓦片散布状況（東から）



2 地下室581 西壁縦板裏込め断面（北から）



3 地下室581 東壁縦板裏込め断面（北から）



4 地下室581 東石状況（北から）



1 地下室574 (東から)



2 地下室685 (南から)



3 地下室650 (南から)



1 土坑80・85（北東から）



2 土坑80（北東から）



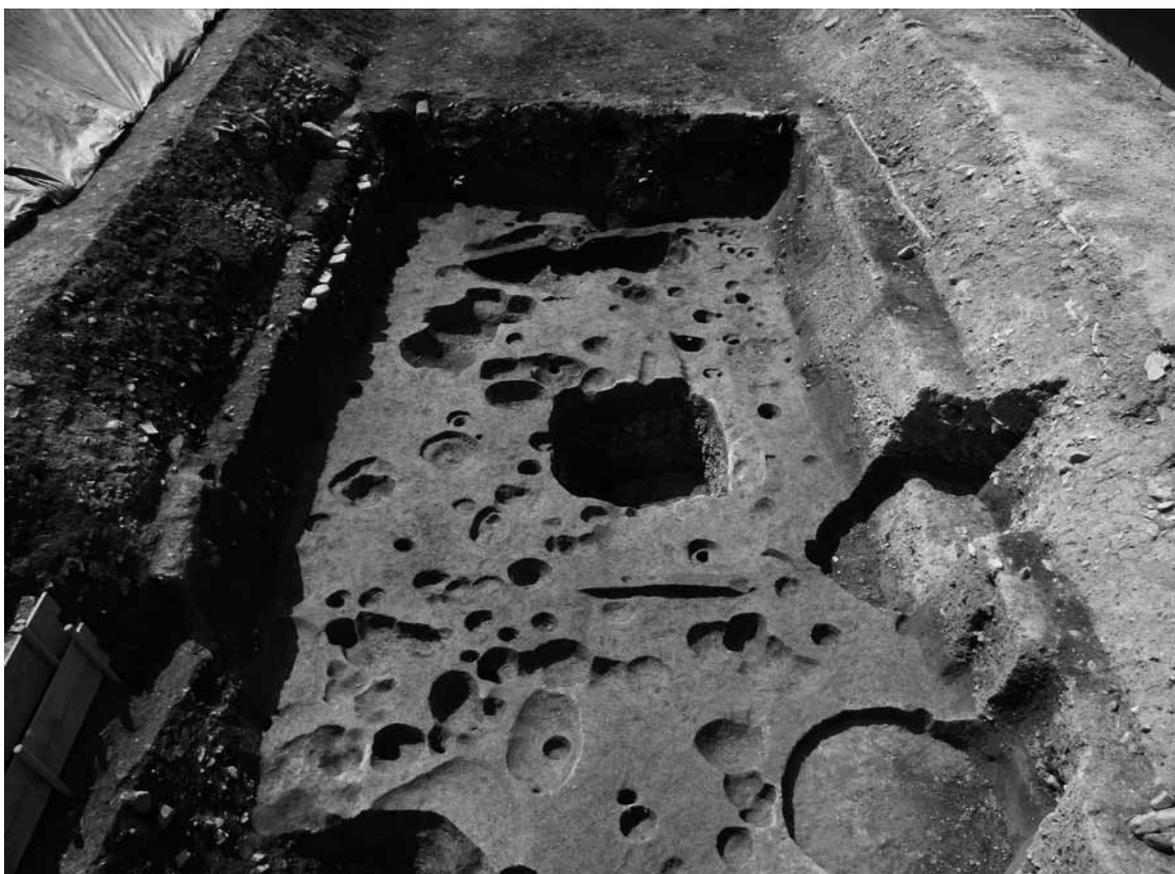
3 土坑85（北から）



1 第3面東半全景（東から）



2 第3面西半全景（東から）



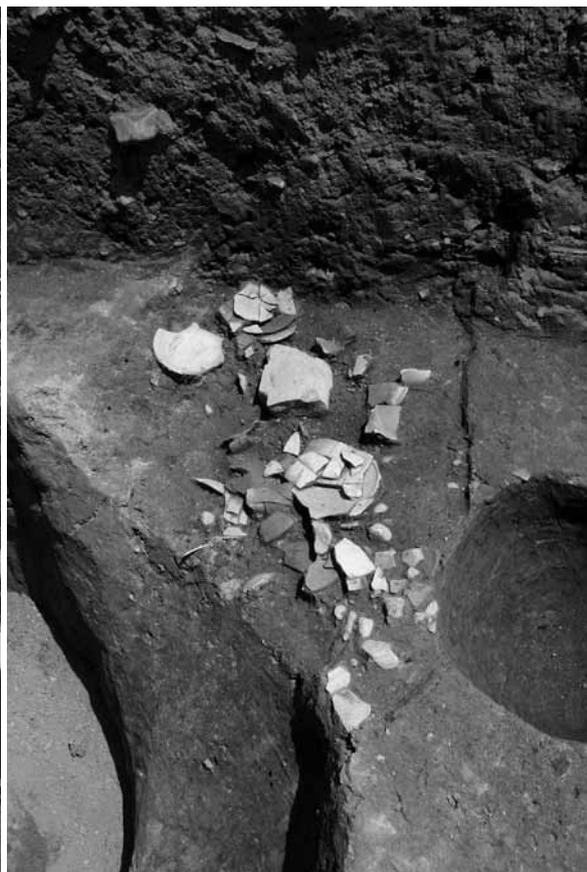
1 第4面東半全景（東から）



2 第4面西半全景（東から）



1 土坑405 (北東から)



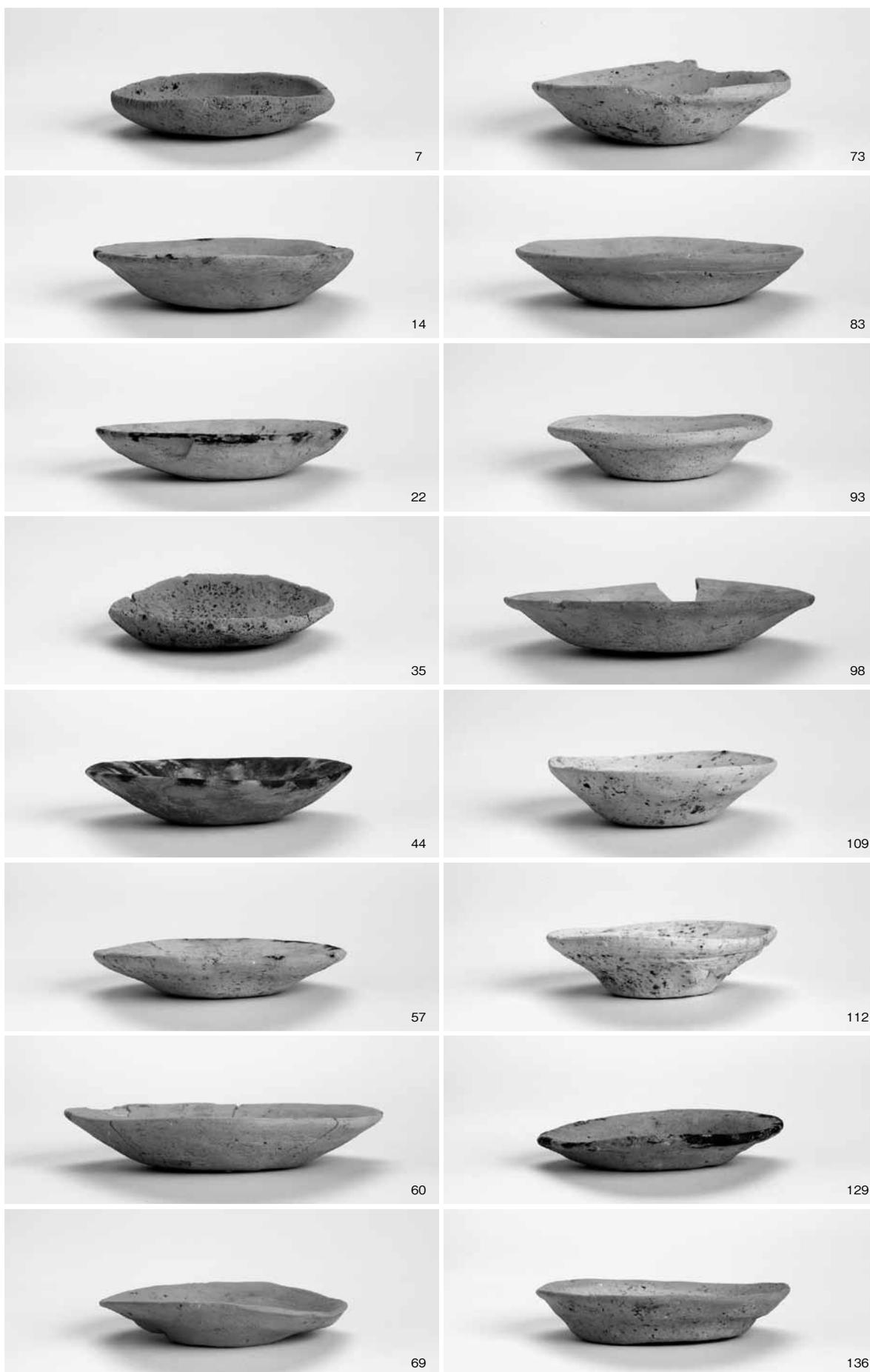
2 土坑671 (西から)



3 土坑515 (北から)



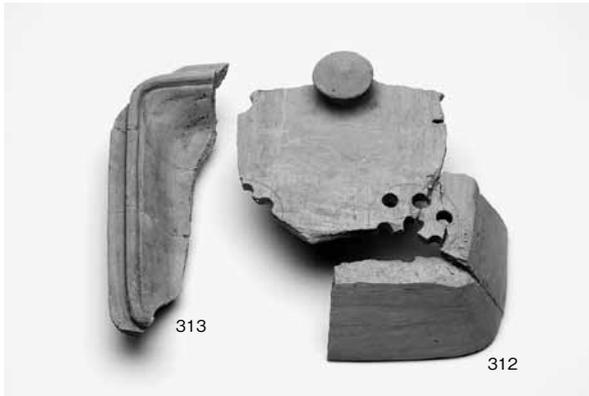
4 土坑693 (南東から)



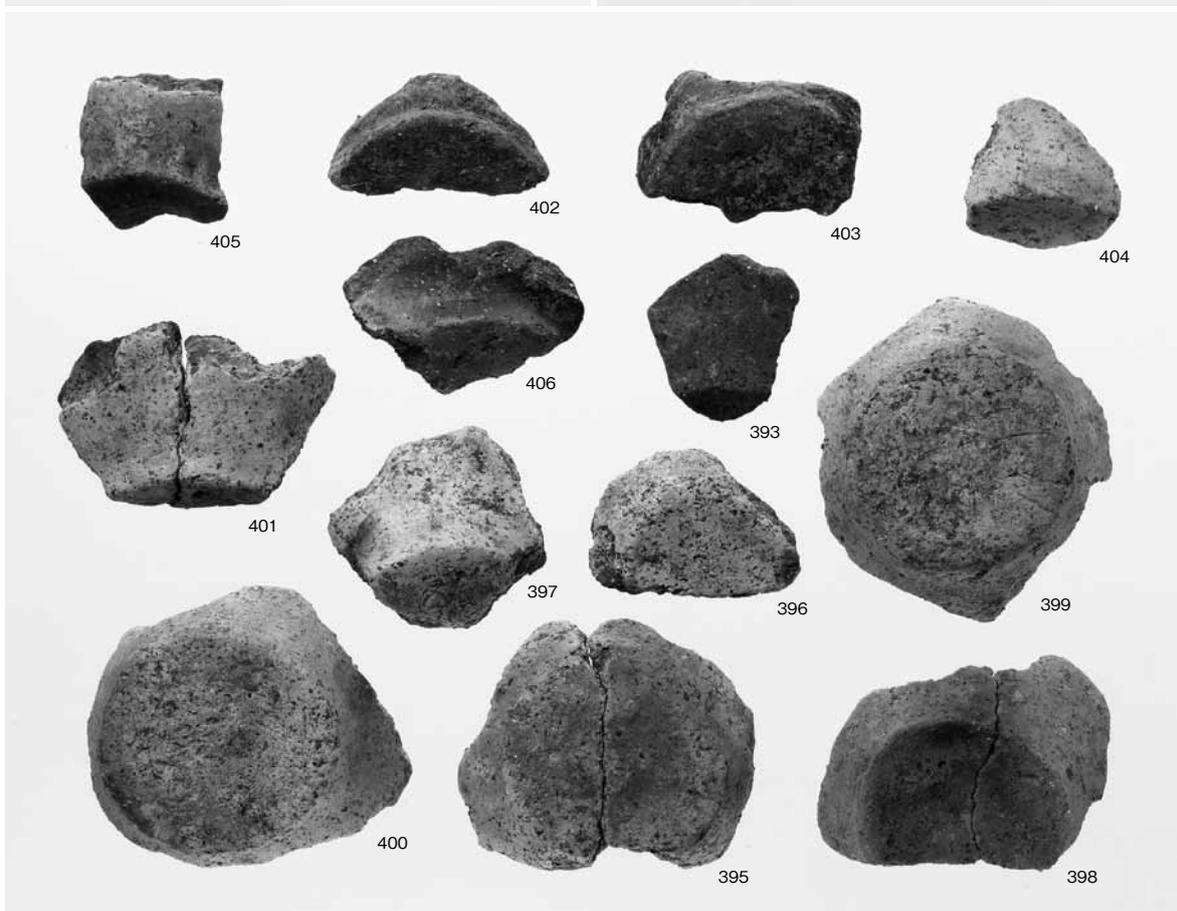
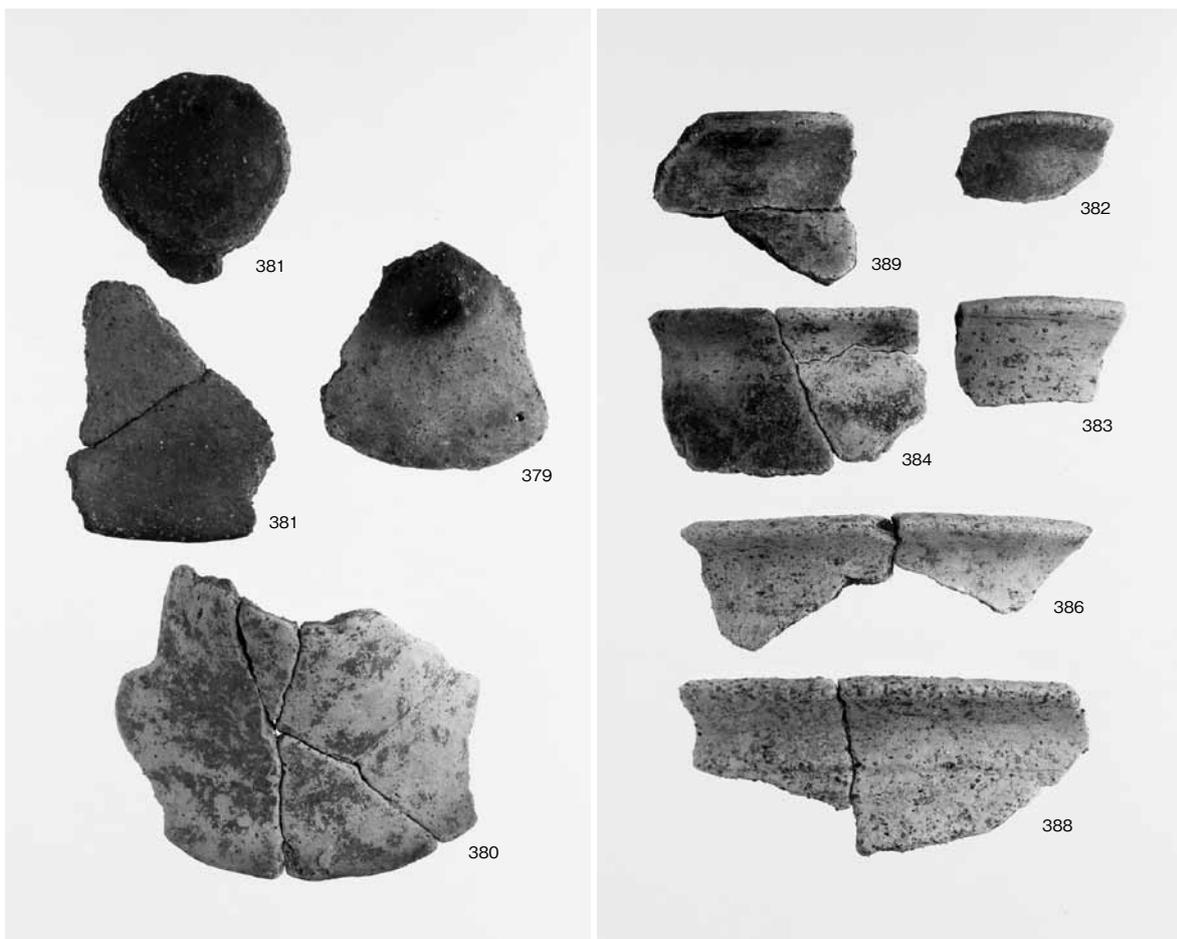
土坑13・17・7・54、井戸64、土坑560・80出土土器



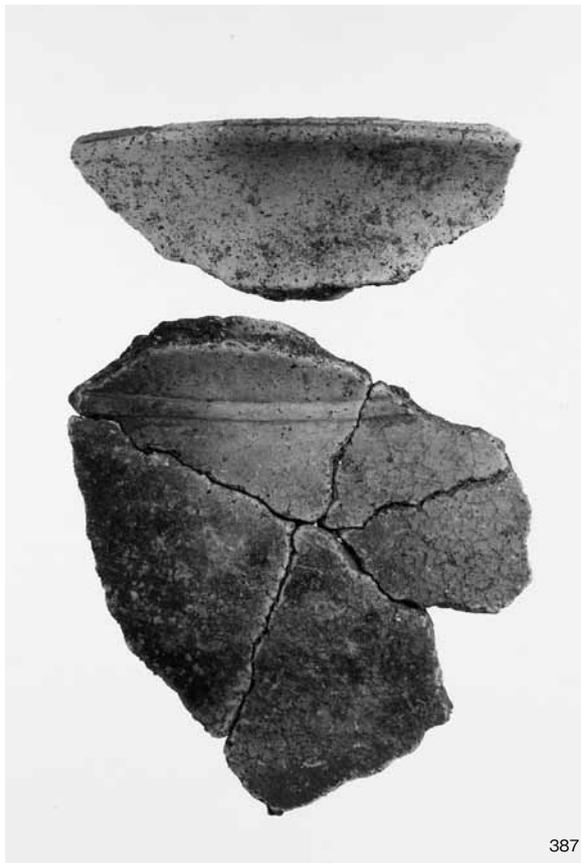
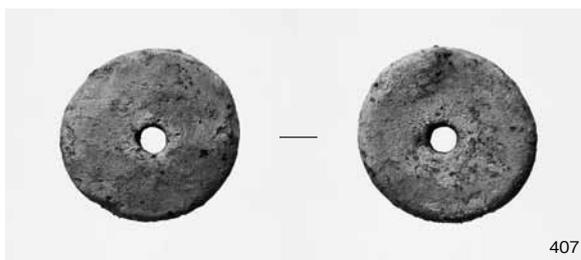
土坑85·地下室581出土土器



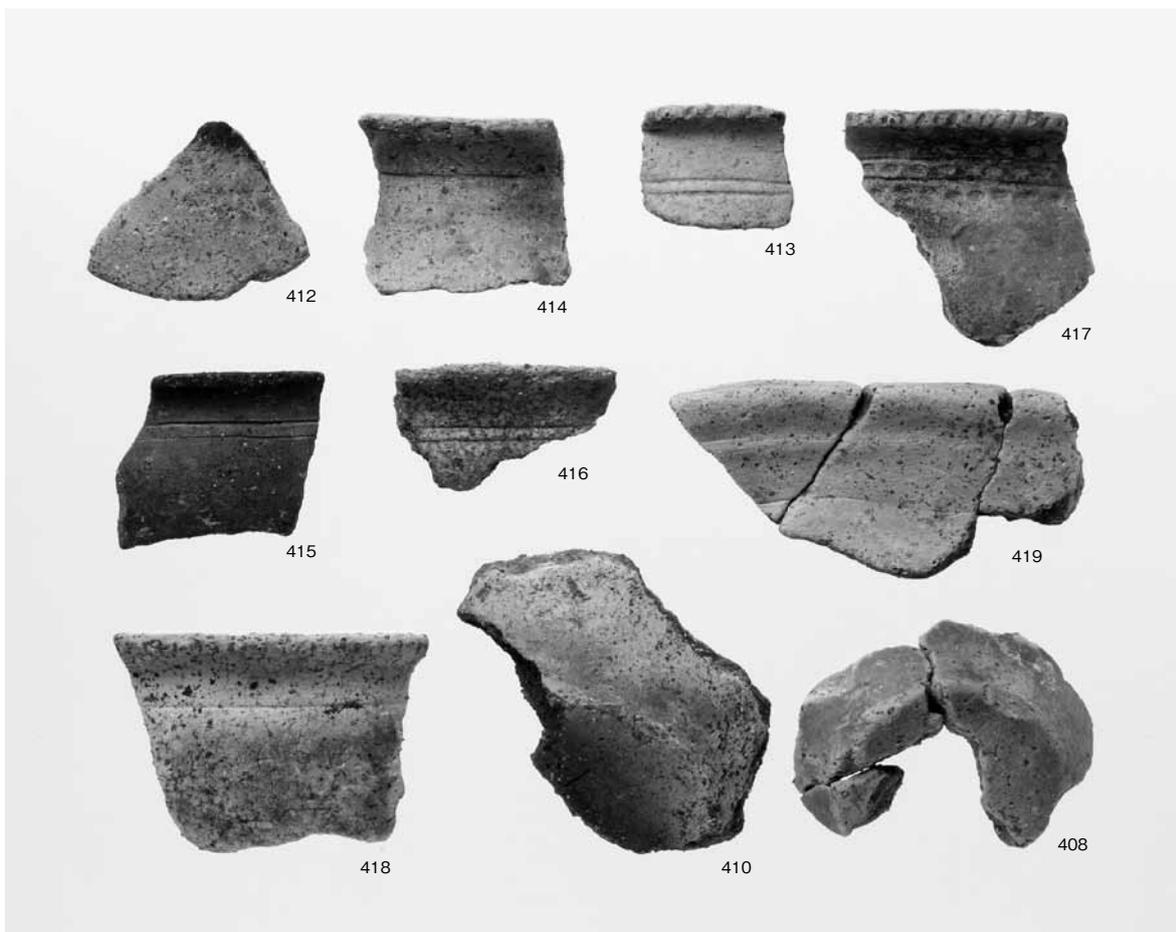
地下室581·594·650、土坑123·208·671出土土器



土坑515出土土器 1



土坑515出土土器2



土坑693出土土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょうしじょうさんぼうはっちょうあと・からすまおいけいせき							
書名	平安京左京四条三坊八町跡・烏丸御池遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-2							
編著者名	東 洋一・伊藤 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年9月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 からすまおいけいせき 烏丸御池遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 しんまちどおりさんじょうさがる 新町通三条下る さんじょうちよう 三条町339-1他	26100	1 464	35度 00分 28秒	135度 45分 25秒	2013年2月 18日～2013 年5月20日	300㎡	集合住宅 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
烏丸御池遺跡	集落跡	弥生時代	土坑、溝	弥生土器、石器、骨		畿内弥生第Ⅰ様式の土器を多量に含む土坑2基と第Ⅴ様式の壺を含む溝を検出した。 中世前半の地下室6基を検出した。 戦国時代の緡銭565枚を埋蔵した土坑を検出した。		
平安京跡	都城跡	平安時代前期	土坑	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦				
		平安時代後期 ～鎌倉時代前半	土坑、溝	土師器、須恵器、緑釉陶器、瓦				
		鎌倉時代後半 ～室町時代	地下室、土坑、溝、井戸、	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、ガラス玉				
		戦国時代 ～近世初頭	土坑	土師器、瓦器、焼締陶器、国産陶磁器、輸入陶磁器、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-2

平安京左京四条三坊八町跡・
烏丸御池遺跡

発行日 2013年9月30日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961